810.12
Y94
ウ
810.12-Y94ウ
1200500753176
複写

始

42-56

國語學史概說

文學博士 學教授 吉澤義則 著

ト工 4L-56
810.12
Y94
⑦

京都帝國大學教授
文學博士
吉澤義則著

國語學史概說

文獻書院內
國文學講座刊行會

(續國文學講座)

國語學史概說

目次

はじめに……一
第一章　契沖以前……一
第二章　契沖より宣長まで……三
第三章　宣長以後守部まで……八七
第四章　守部以後明治初年まで……一五一

國立圖書館
昭和24.3.15
寄贈

國語學史概說

講師　吉澤義則述

○はじめに

前の國文學講座にものした國語學史においては、既に見られた通り、假名遣・音韻・テニヲハ等の個々の問題について研究のあとを追つた。從つて或る時代においては如何なる學者が出て、國語について如何なる研究を殘したか、一般にその時代の國語研究の狀態は如何であつたか、といふやうなことは概觀し難い狀態にあつた。本講においてはそんな點に注意し、かねて前講にもれた所を出來るだけ補ひたいと思ふ。勿論或程度までは前講と重複することはやむを得ないが、前講において相當に詳說した所は、何頁參照といふことにして、なるべくそれに譲りたいと思ふ。で、そんな場合には、面倒でも參照の勞をとつていただきたい。

第一章　契沖以前

我國に國語研究が起つてから數百年、圓珠庵契沖が出て新研究の端を開くまでの間は、研究に科學的基礎をもたず、從つて國語學といひ得る程のものはないのである。元來わが國の文學は和歌を中心として發達した。これは誰も

が認める所であるが、國語の研究も亦主として和歌の學問につれて起つたのであつた。例へば假名遣の研究である、行阿によれば藤原定家がその家集拾遺愚草の淸書を信濃前司親行に托したのを緣としてはじまつたものである。そしてそれは和歌者流によつてうけつがれて來た。契沖の新假名遣の主張も萬葉集研究の結果大成したものと考へられる。その契沖がまた

かなづかひは俗にも渡ることながら、まさしくは和歌をもてあそぶ人の事なり。（和字正濫要略の序）

といつてゐるのである。

和歌は萬葉集以後、漢文學の壓迫によつて一時公會の席を退いて色好みの家にかくれ、はかない月日を送つてゐたのであるが、國人が國粹に目ざめてから、再び公會の席にも出ることを得て、榮ある日は廻つて來た。歌合が盛に行はれ、勅撰の和歌集が相ついで出來た。こゝに歌の研究が起つたのは餘りにも當然なことである。大鏡には行成卿のことを記した條に、

この大納言殿よろづにとゝのひ給へるを、和歌のかたやすこしおくれたまへりけむ、殿上に歌論義といふ事いできて、その道の人々いかゞ問答すべきなど、歌の學問より外の事もなきに、この大納言殿は物ものたまはざりければ……

といふ記事がある。かうして歌學上の著書も出るにつけて、自然用語の研究が起り、テニヲハの研究、歌語の解釋、語源の研究といふやうなものも起つて來たので、富士谷成章のあゆひ抄も本居宣長の詞の玉緒も、和歌を中心としての研究であり、詞の玉緒をうけついだ諸の研究も和歌が中心であつたことは、例證を示すに便利であるといふ點もあつたであらうが、またその傳統によることも爭はれぬ。

言靈のさきはふといはれた我國の事である。國人が國語に對する關心はいつ頃から認められるかといふに、それは頗る古い時代からであらう。文獻に見える所では、古事記の中に

豐雲上野神
宇比地邇上神
須比智邇去神
阿那邇夜志愛上袁登古袁

といふやうに、漢字の四聲に準じて、よむ音の上下を示した所がある。これに就て本居宣長は古事記傳一に於て次のやうに述べてゐる。

さて記中に、讀音（ヨムコヱ）を示したるを考るに、上卷に多くして、中下卷にはいと〳〵稀なり。上卷にも神名に多し。それは常ノ言と異にして、唱（トナヘアヤマ）を訛ること多きが故なるべし。さて其（ソ）は其ノ字ノ訓の本ノ聲のまゝに讀（ヨム）べき處には附（ツケ）たることなし。たゞ言の連（ツヅ）りて聲の變る處に附（ツケ）たり。豐雲上野神の如き雲はもと平聲なるを、雲野と連（ツヅ）く故に上聲になるを、訛りて本の平聲に讀（ヨマ）むことを思ひて上聲と示したるなり。（中略）然らば上聲の平聲去聲にかはる處も有ルべきに、平と去とは附たる處なく、只上聲のみ見えたるは如何といふに、凡て言の連（ツヅ）きて本ノ聲の變る例を考るに、平去の上聲にかはるが常多くして、上聲の平去に變るはいと稀なり。故（カレ）記中に聲を附る中に、平去に附

べき處はおのづから無(ナカ)りけらし。然るに宇比地邇上神、須比地邇去神、此ノ去聲たゞ一ッあるは比地邇てふ同言の二ッならびたる、一ッの邇は上聲、一ッの邇は去聲にて、忽に音の異なるが故なり。

かうしてとにかく發音に注意がしてあるといふ事は、國語に對して關心があつたことを示すものである。たゞそれが個々の言葉についての注意に過ぎなくて、多くを集めて何か法則めいたものを見出さうといふ努力はまだなかつたのである。

古事記の表記法は右の外にも種々心を用ひた所がある。その序文にも

上古之時言意並朴、敷レ文構レ句於レ字即難、已因レ訓述者詞不レ逮レ心、全以レ音連者事趣更長、是以今或一句之中交二用音訓一、或一事之内全以レ訓錄、卽辭理(ガタキハ)叵レ見レ以レ注明レ意、況易レ解更非レ注

とあつて、國語として記しとゞめる苦心を述べてゐる通り、實際に

久羅下那洲多陀用幣琉之時琉字以上十字以音
天之常立神訓常云登許訓立云多知

の如く樣々の方式をとつてゐる。この漢字の音をかりて假名として用ひたものも、その文字には頗る注意が拂はれてゐて、たゞにその字形が書紀に用ひてあるものに比して著しくやさしいといふばかりでなく、宣長がその古事記傳一に

書紀は漢音吳音をまじへ用ひ、又一字を三音四音にも通はし用ひたる故に、いとまぎらはしくて、讀(ヨミ)を誤ることの多きに、此記は吳音をのみ取て、一ッも漢音を取らず、又一字をば唯一音に用ひて、二音三音に通はし用ひたることなし。

と述べてゐる通り、非常に細かい注意のもとにとり用ひられてゐるのである。古事記の撰者はこれに就て何とも說をなしてゐないけれども、この書にはその假名用法にある主義が認められるといつてよいものではあるまいか。たゞそれが此の書だけに止つて、他の表記法までを支配しようとするまでに至らなかつただけである。

語源に關する興味は、言葉に關して人が持つ興味の中でも、古い時代からあるもので、古事記に、須賀の地名を說いて、素戔嗚尊が八俣のをろち御退治の後、宮を作るべき地を求めてこの地に到り給うて、

吾來二此地一、我御心須賀須賀斯。

と仰せられたのに起るといひ、茅渟ノ海を說いて、五瀨命が賊におはせられた御手の痛手の血を洗はれたので、血沼(チヌ)海といふのであるといふたぐひは、例が多い。これらは海鼠(コ)の口がさけてゐる理由を、古事記に、天ノ宇受賣(ウズメ)ノ命が海中の魚族に對して、天孫に仕へまつるか否かと尋ねた際に、すべての魚族が奉仕を誓つたが、この海鼠(コ)だけが默つてゐたといふので、癩癩をおこして「此口乎不答之口(コノクチヤコタヘセヌノチ)」とののしつて、紐小刀でその口を拆いたためだと傳へてゐるのと、同樣な興味にもとづくものである。常識的語源論が早くから起りうる事もこゝに於て考へられる。

言語の解釋といふことがはじまつたのは何時頃からであるか明でないが、釋日本紀によれば、養老五年に既に太朝臣安麿が日本書紀を講義したといふことである。この年は書紀の出來た翌年であつて、これなどはまづ言語の解釋のはじめといつてよいであらうか。その後弘仁三年(一四七二)刑部少輔多朝臣人長、承和十年(一五〇三)博士菅野朝臣高年、元慶二年(一五三八)博士善淵朝臣愛成、延喜四年(一五六四)藤原朝臣春海、承平六年(一五九六)博士矢田部宿

禰公望等によつて、この講義が行はれた。この講義は書記されて、日本紀私記となつてその一部分が現在に殘つてゐる。その中に語源の解釋と見るべきものが散見してゐるが、勿論常識標準の解釋である。

さて漢字をかりて國語を寫すについては、字音を假名として用ふる場合はとにかく、字訓を用ひるについてはそれを理解する爲に

其御頸珠名謂御倉板擧之神訓板擧云二多那一。

汝命者所知夜之食國矣訓食云二袁須一。　（以上古事記）

の如く訓を示す註を要することがある。これを一括したものでは、嵯峨天皇の弘仁年間（一四七〇——一四八三）に奈良の藥師寺の僧景戒があらはした日本靈異記があり、毎章の終りに難解の文字を摘出して、よみ方や意味をつけてゐる。靈異記はその名で推量されるやうに、日本における古來の神佛妖怪に關した小話を集めたもので、漢文式に書かれてゐる。群書類從に收められてゐるが、群書類從本をそのまゝ亞鉛凸版を以て、日本古典全集が、狩谷棭齋全集第一として覆刻してゐる。古語の研究には參考になるものである。

かくてこれらはその文のその箇所にだけ通ぜしめるための註に過ぎないが、これはやがて、書を讀むためにも文をかく爲にも、字書の必要であることを物語つてゐるものである。かゝる次第であるから、我國に於てまづ出來たものは、國語を中心とした辭書ではなくて、漢字を中心とした字書であつた。即ち新撰字鏡（十二卷）がある。これは僧昌住の撰で、序によれば宇多天皇の寛平四年（一五五二）の夏に草案成つて新撰字鏡と名づけたが、その後も集めてやまず、昌泰年中（一五五八——一五六一）に玉編と切韻とを得て增補し、更に小學篇の字、本草の字をも加へて、十二卷とした。收むる所は片數一百六十、字數二萬九百四十餘字、小學篇の字は別に四百餘字あるといふ。天部・日部・月部・肉部・雨部・氣部・風部・火部等、大體漢字を偏傍によつて分けて、音と訓とをつけたもので、その間に親族部（卷二に）、草木異名（卷七に）、臨時雜要字（卷十二に）といふやうな部もあつて、臨時雜要字のうちには、舍宅章・農業調度章・男女裝束資具章・樣調度及織縫染章・馬鞍調度章・木工調度章・鍛冶調度章・田畠作章・諸食物調饌章・海河菜章といふ分類で字が集めてあるなどは、後世の節用集を思はせる所がある。小學篇からとつた字は卷七にあるが、これには音をつけず訓ばかりある。音は反切によつて示し訓には萬葉假名（稀に片假名）が用ひてある。次に記す和名抄と共に古語を考へる貴重な資料である。

古言の證とすべきものゝ中に、新撰字鏡てふ書は、古き世の書目錄に字鏡といへるあり、其字鏡はいと古へ出來しが、それに次て新撰を作りしならんか。されど寛平四年に撰たると記して、實に古言多く、假字も古にかなへり。是を吾友村田春海てふ人、京に遊べる時ゆくりなく得て、いとよろこびてもたりしを、乞もとめて見るに、疑はしかりし言の知らるるも多也。たとへば蝶は音のまゝにのみよびて訓は知がたかりしを、加波比良古と訓、をかしといへる假字の出る所知がたかりしに、可咲を阿奈乎加志とよめるたぐひなり。

といつて、その著に參考になつた樣をのべてゐる。古言梯は假名遣の辭書で、前講四四頁に略說してある。

さて新撰字鏡といふ名であるが、新撰といふのが果して魚彥が想像の如くであるかどうかは疑はしい、桂川中良の隨筆桂林漫錄の中に、右の魚彥の說を引いて、

楫取魚彥なる者、此書は古の字鏡に次ぎて作りし故新撰と題せしならんと云へど、昌住が自序に其事を記さず、

按に、古より曾て無キ所の新書なるに依りてかくは題せしならむ、目錄には新撰の二字を省きしにもあるべし。

（百家說林卷三）

といふ反對說がある。國語學書目解題では

屋代氏は一切經音義に引きたる漢土の字鏡に對して名づけたるものなるべしと云はれたり。或はさもあるべし。

といつてゐる。この說が穩かであらうと思ふ。

次に和名抄は、詳しくは和名類聚抄といひ、傳本には十卷本、二十卷本等がある。醍醐天皇の第四の皇女勤子內親王の令旨を奉じて、源順朝臣が撰集したもので、その撰進の方針は、自序に次の如くある。

或漢語抄之文或流俗人之說先舉本文正說各附出於其注、若本文未詳則直舉辨色立成楊氏漢語抄日本紀私記、或舉類聚國史萬葉集三代式等所用之假字、

この外に深根輔仁の和名本草も參考してゐる。和名本草は專ら藥物の漢名の下に日本名の對譯を施した藥物の辭書である。著者の生歿年月は不明であるが、書は平安朝初期のものである。續群書類從卷第八百九十二に收められてゐる。

さて和名抄はひろく種々の書から漢語を集めて出處を示し、その和訓を萬葉假名で示してゐる漢和辭典であるが、集めた言葉は名詞だけであつて、天地・人倫・形體・疾病・術藝・居處・舟車等の部類に分けてある。それが十卷本の方は二十四部類、二十卷本の方は三十二部類になつてゐる。

この書には

渡子　日本紀私記云渡子和太利毛利今按俗云和太之毛利

幸魂　同私記云幸魂佐枳美太萬俗云佐岐太萬

といふやうに、二つの和訓をあげて一方を俗としてゐる所がある。俗といふ言葉ははやく常陸風土記に、

荒賊　俗曰阿夫良流賊斯母乃

海苔　俗曰乃理

などと用ひてあるが、これは漢語に對して和語を指しただけで、和名抄のやうに、二つの和語の間に於て一方を俗といつたのとは意味が違ふ。和名抄のは言葉に雅俗の區別を明かにあらはしたものの最初として注意しなければならぬ。著者源順朝臣は力の及ぶ限り古典を搜索して、典據ある和語を立てゝ雅語とし、新生轉訛したものを俗語と見て、兩者を明かに識別したといふことが、その例を研究することによつて知りうる。源順は梨壺の五人の一人として、後撰集の撰に與つた人である。

和名抄の註釋としては、狩谷棭齋の「箋註和名類聚抄」十册がもつともすぐれたものである。

類聚名義抄（十一卷）といふ字書は製作年代は明かでない。佛法僧の三帙に分けて文字を集めてゐるので、三寶名義抄、三寶類字集などといふ異名がある。文字の配列は漢字の偏旁により、人偏からはじめて雜の部まで百二十類、字毎に音と訓とをつけ、訓は多いのになると十五六もつけてある。著書は菅原道眞の父是善だといふ說もあり、これが眞實ならば、是善は元慶四年（一五四〇）に六十九歲で歿してゐるので、新撰字鏡より前のものとなる譯であるが、恐らくは僧侶の手になつたもので、時代も和名抄以後のものであらうと考へられる。この書の訓は片假名を以て記して

ある。但しその書體は現在のものと同じではない。訓にアクセントが示してあるのは、此書の特長である。それは京都を標準としたものゝやうである。

次に伊呂波字類抄といふのがある。これはいろは別にして言葉を集め、そのいの部ろの部等の中を、更に天象・地儀・殖物・動物等の類によつて分けてある。言葉はすべて漢字であげて、その下に片假名がつけてある。著者は橘忠兼といふ人で、近衛天皇時代の人である。傳本には種々ある。今行はれてゐる十卷本は後人が增補したものである。國語學書目解題に

はじめ天養の頃撰者はこの書の稿を起し、長寛中に二卷の書となしたるを、更に增補して四本とし、後にまた增補すること治承中に及びしが、この度は三卷三本とせしものか、十卷本はまた後人の增加せしものなるべしといふ。其增加せし人は、或は藤原實淵公にやと、下の黑川氏の考に見ゆれど詳ならず。

と言つてゐる。天養は近衛天皇の年號（一八〇四——一八〇五）、長寛は二條天皇の年號（一八二三——一八二五）、治承は高倉天皇の年號（一八三七——一八四一）である。藤原實淵は康正元年（二一一一五）左大臣となり、數年にして致仕して東山に閑居したので、東山左府と呼ばれた洞院實淵であつて、拾芥抄、名目抄等の著書がある。平家物語考證卷の一、「鵜川合戰の事」の中の白山の註に、「洞院家伊呂波字類抄云白山者山獄之神秀者也……」とある洞院家伊呂波字類抄を證據として、黑川春村は藤原實淵の增補と推定したのである。黑川春村の說は、國語學書目解題に、その三卷本の端書が引かれてをり、又、春村の隨筆碩鼠漫筆の中にも出てゐる。伊呂波字類抄はこの頃日本古典全集第三期刊行書の中に加へられて、覆刻されつゝある。

新古今和歌集と新勅撰和歌集との撰者をつとめ、仁治二年（一九〇一）に八十歳の高齡をもつて薨じた京極中納言藤原定家卿は、歌道の大家として國文學史上にも種々功績があり、後世に非常な崇拜をうけて、

抑々於歌道定家を離ぜん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。（徹書記物語）

とまでいはれた程であるから、その影響の大きかつたことも推察されるが、國語學上においても所謂定家假名遣が近世に至るまで、京都の歌人等の間に尊重せられたのであつた。

言葉はその形式（發音）も內容（意味）も、地方的には勿論時代的にも變つてゆくことは、明かな事實であるが、その發音が變つてゆく際に、それにつれてそれを表はす文字がかはらぬ事がある。或は又或音に對しては、表記すべき文字がないことがある。かゝる場合發音と異る表記法が行はれることになる。そしてその際に人爲的法則が定められてゐなければ、表記法が各人各樣で不統一になりをはる。所で我國の實際に於ては、平安朝に入つて發音の變化が大いに起り、時代を下るにつれて假名遣の混同が甚しくなつて、定家の時代はその甚しい時代であつたのである。

さてある時定家がその家集拾遺愚草の淸書を河內前司親行といふ者に依賴した。時に親行はこの機會に假名遣の統一方針を定めてくれと申出た處、定家は親行にその案を作れといつた。そこで親行は案を立てゝ定家に示すと、定家はそれを承認した。行阿の記す所によれば、假名遣のはじめはかうして起つたのである。さてこの定家の假名遣は、その標準を古人の慣例によらうとした氣持があることは察せられるが、それはほんたうに古い確かな所の慣例を歸納的に研究して定めるといふ態度ではなかつたので、甚だ不完全な歷史的假名遣となり了つたのであつた。（前講一九

――二四頁參照)。その後いつ頃からか四聲によつて假名が違ふといふやうな說が出て、その說によつて定家の假名遣を增訂したと考へられるのが、行阿の假名文字遣であつて、(前講一〇――一六頁參照)、後世にはこれが定家假名遣として廣く行はれたのである。

然しこの四聲とか音の輕重とかの語勢による假名遣を批評したものがないでもない。即ち長慶天皇の御批評はその御撰にかゝる仙源抄の跋文にある。(文は前講一六――十八頁に引いてある)この跋文は久しく耕雲散人明魏法師のものと誤解せられてゐた。契沖はこれを見なかつたらしい。和字正濫通妨抄に於て、徒然草野槌をひいて、

つれ〳〵草の野槌に「……明魏法師はすでにかなもじづかひをやぶりて、いね、をお、えゑの類、みなひとつに書べしといへり」とあり。……明魏法師の說は何にあるにか知らねど、大きに誤れり。

といつて、明魏法師を攻擊してゐるのであるが、明魏法師がさういつた說は何にも見當らない。野槌が明魏法師の說としたのは、或はこの仙源抄の跋文のことであらうか。さうとすれば野槌はこの跋文の意味をとりちがへてゐるものである。そこには、四聲によつて假名がかはるといふことは考へられないといふやうなお考へがあるだけで、

此一帖には文字づかひをさたせず。

とは言つてをられるが、

いね、をお、えゑの類、みなひつとに書べし。

とは言つてをられないのである。仙源抄は「仙洞の源氏物語の抄」の意で名づけられた、源氏物語の要語をいろは順に集めて解釋した源氏辭書ともいふべきもので、群書類從に收められてゐる。雜誌國語國文の研究第二十六號(昭和三年十一月號)に、宮田文學士の研究がある。

又、北朝文和の頃に權少僧都成俊といふ者が、萬葉集の跋を書いて、定家の假名遣に從つては萬葉集の義理には違ふといふことを述べてゐる。(前講二八――二九頁)。成俊の說は後に契沖の歷史的假名遣論にヒントを與へたものであらうとして注意せられるのであるが、當時の假名遣は、長慶天皇の御批評も成俊の說も、何等の影響を見ずにすぎたのである。

次に定家の名によつて出たものになほ手爾波大概抄がある。

名詞動詞等の觀念語に對して、助詞助動詞等の形式語を意識したことは萬葉時代にその證があるが、之を類別し研究するといふやうなことは容易に起らなかつた。順德天皇の八雲御抄卷六用意部に、「てにをはといふ事」といふのがあつて、作歌上テニヲハに關する注意をしてをられるが、分類研究までにはいたらなかつた。やの十品、かの二品、といふやうに分けたのは、この手爾波大概抄がはじめである。これは傳へによれば、定家がその子爲家の爲に書いたものだといふのであるが、その通り信用してよいかどうかは疑問だとされてゐる。とにかく古くは定家のものと信じられてをつて、宗祇法師はこれに注釋を加へて、「手爾波大概抄の抄」をこしらへた。文明十五年(一一四三)の宗祇と肖柏の奧書があり、それによれば宗祇の口授を肖柏が筆記したものが、大概抄の抄である。宗祇は古今傳授をはじめた東常緣の門人で、最初に古今傳授をうけた人である。短歌よりも連歌にすぐれて、勅を奉じて新撰菟玖波集を編んだ。自然を友として一生を旅に送つた旅行好きで、後柏原天皇の文龜二年(一一六二)七月八十二歲を以て箱根山中に歿した。その門人肖柏は「牡丹花假名遣歌」をこしらへて、歌をもつて假名遣を敎へようと試みた。

假名遣における定家假名遣の如く、テニヲハ研究に影響の大きかつたのは、世に姉小路式といはれるものである。これは姉小路家に代々傳つたもので、出來た時代は明かでないが、定家の大概抄よりは後のもので、室町時代の末には歌人の間に行はれてゐたやうである。姉小路殿手爾越葉抄、秘傳天爾波抄、和歌十三ケ條口傳等、傳本は種々あり、奥書なども同じではない。寛文十三年(一六七三)に刊行された歌道秘藏錄も、一名を姉小路家本てにはの傳といひ、姉小路式の一本である。

姉小路式は手爾波大概抄よりは分け方もくはしく、例歌もあげてあつて、稍進歩してゐる。ことに「ぞ」「こそ」の係詞に對する結詞のことが說かれてゐるのは注意すべきである。

當時の學問が衰へ和歌の道も廢れてゐた時代で、學者は學問を秘し、傳授とよび秘傳と稱して、故意にその道を神秘にしてをつたので、テニヲハの研究なども頗る嚴重な束縛のもとに傳へられてゐた。前講一五三頁及一五四頁に引いた、手爾波大概抄の抄と姉小路式との奥書の樣子でもこれは察せられよう。かくて衰へた學問は益々衰へ、新研究は全くその出道をふさがれて、江戸時代に入つたのである。

姉小路式は細川幽齋の手に增補せられて、春樹顯秘抄となつた。細川幽齋は足利將軍義滿の時管領として令名のあつた細川頼之の弟頼有の九世の孫で、有名な武人でありまた歌人である。豊臣秀吉の歿後、石田三成が德川家康に對して兵を擧げた際、幽齋は三成に與せず、爲に丹後の田邊城にあつて三成の將小野木重勝等の爲に圍まれて危かつたが、當時歌道の奥義を極め古今傳授を受けてゐたものは幽齋一人であつたので、後陽成天皇はその傳授の亡びる事を惜み給うて、勅使を遣はしてその圍みを解かしめられた。それ程な學者であつたのである。慶長十五年(一六一〇)に七十七歳でなくなつた。春樹顯秘抄といふ名は、そのはじめに、

てにはとは出葉と書ケり、草木の葉なくば何の草何の木と云事しりがたし、葉に出すを見て其草其木としるがごとし、和訓のてにをはをもて其儀其理をしる也。(がごとし、一本)

とあるテニヲハの說から名づけたものである。この書に於ては姉小路式に比して題目も大分增してゐる。以上の書のこと、くはしくは、前講一五二頁から一五八頁を參照せられたい。

奈良朝から平安朝初期へかけての支那字音の研究、天竺の音韻學悉曇の傳來と、その組織にならつての五十音圖の製作、韻鏡の發見とその研究、これ等はすべて前講第三章の初に記した所に讓る。五十音圖製作の目的は字音反切の爲ではあるまいが、いつの頃からか字音を反切する爲に用ひられ、吉野朝時代の人明魏法師(前講六九頁參照)の倭片假字反切義解では、カルガユへのルガの反ラ、ユへの反エ、そのラエの反レ、故に、カルガユへを三度反切してカレ(故)といふ言葉が出來るといふやうに、國語の解釋の上にも五十音反切が用ひられてをり、五音相通の說と共にこれが國語解釋の鑰となつたことなども、同じ所に述べた。

伊呂波字類抄以後の主な辭書には、字鏡集、平他字類抄、下學集、撮壤集、運歩色葉集、節用集、等がある。字鏡集は二十卷、菅原爲長の撰といはれる。爲長は後嵯峨天皇寛元四年(一九〇六)三月二十八日に百歳でなくなつた人で

ある。國語學書目解題にこの書について、

この書は漢字の偏傍を分類し、偏傍によりて漢字をあつめ、各字の音幷に訓を片假名にて付けたる字書なり。

（中略）新撰字鏡の他に、單に字鏡といひ或は字鏡抄、字鏡集などいふもの數種あり、多くは撰者の名を署せず、

此本には每卷の末に「爲長卿作」とあり。又書寫の奥書あり、其中第一卷の末には

應永二十三年七月二十三日寫之

第十九卷の末には

應永二十四年六月二十八日寫之

と見えたり、二十三年の夏より二十四年の夏までに寫したるなり。

とある。應永は足利義持の時代で、その二十三年は二〇七六年である。

平他字類抄は續群書類從完成會で出した續群書類從雜の部（卷第八八七）に收められてゐる、漢字を平聲と他聲とに分けて集めてゐるので、平他といふ名がある。上下あり上には名詞を集め、まづ天象・地儀・人倫等に類別した中を、平聲と他聲とにわけ、下の方は動詞形容詞等の字を集め、まづいろは別にした中を、平聲と他聲とに分けてある。著者は分らないが、上には嘉慶二年（二〇四八）十一月二十三日に、下には康應元年（二〇四九）五月朔日に寫了した由の奥書がある。嘉慶・康應は何れも北朝後小松院の年號である。

下學集は二卷、文安元年（二一〇四）六月の序がある。東麓破衲序とあるが、東麓破衲が如何なる人かは明かでない。京都の禪僧であらうとは想像されるが。序に次の如くある。

乃造二字書一以授二之目一曰二下學集一也。下學者語曰下學而上達云。爾思レ之夫下學二地理一而上達二天道一豈不レ在二斯書一乎。故卷則上下象二天地兩儀一、門則十八取二九天九地之二九一矣。

即ち上下二卷、天地・時節・神祇・人倫等の十八門に分類して、片假名でよみ方をつけてある。まゝ漢文で字義を釋した所もある。

撮壤集は三卷、續群書類從雜部（卷第八八九）に收められてゐる。又井上頼圀・小杉温邨兩氏の增訂和訓栞にも附錄せられてゐる。享德三年（二一一一四）の序があつて、

飯尾氏之族有二善永祥者一、志二于稽古一類二衆事物之名數一以教二幼子姪一、名曰二撮壤集一、其志可レ嘉矣。

とあるので、飯尾永祥といふ人の撰だと知られる。永祥はよく分らないが、伴信友は、

康富記嘉吉三年四月三日松尾神輿云々之條に、今日奉行飯尾肥前入道永祥參向云々とあるは此人なり。

といつてゐる。天象部、風雨部、佛部、神部等に分類し、上卷のはじめに天象部、中卷のはじめに地儀部、下卷のはじめに人倫部がおいてあるのは、撰者の意向もうかがはれるが、上卷が必しも天に關したものとばかりは限らないのである。風雨部で例をとるなら、

風

韶風春　東風同　黄雀同　薰風夏　南風同　凉風同　西風秋　金風秋　野分秋　朔風冬　北風同　旋風　木枯（コガラシ）

嵐（アラシ）　降吹（フブキ）　霾（ツチフル）　颷（ツジガセ）　暴風（アラヒカセ）

雲

五雲　慶雲　孤雲　旱雲　雲峰　霧鏈（ダナビク）　黒雲　霞　霧

といふやうな體裁で、夫々關係した言葉を集めてゐるのである。

運歩色葉集は四册、撰者は不明である。國語學書目解題に、

この書は節用集に似たる字書なり。いろは順に語をあつめ、本文は漢字にて書き、片假字にてよみかたを添へたり。まゝ註を加へたるもあり。註のうちに年代をかぞへたるあり。第一册石山の條より第二册道風の條までは、天文十六年に至る何年とかぞへたり。但し立山の條のみには天文十七年までをかぞへ、又道風の次にみえたる高野の條以下卷末に至るまでみな同じく十七年までと數へたり。これに據るに、此書は天文十六年に稿を起し、十七年に至りて成りたるものなり。天正本の序の末にも十七年に成りたるよしに見ゆ。

とある。天文十七年は二二〇八年である。

節用集も撰者は不明である。傳本も寫本刊本種々ある。その内容もそれ〴〵同一ではない。それらを研究したものでは、大正五年に東京帝國大學文科大學紀要第二に、上田博士と橋本學士の「古本節用集の研究」といふのが出てゐる。次には日本古典全集第一期の刊行にかゝる易林本節用集につけた橋本學士の同書の解説をかりて參考に供しよう。

節用集は室町時代に出來、江戸時代を經て明治にいたるまで、宏く世に行はれた通俗字書である。江戸初期以前のものに就いて見るに、すべて伊呂波引であつて、伊呂波以下の諸部にわかつた上、更に各部を天地（乾坤）時節（時候）以下の門に分つて語を收めたもので言語から文字（漢字）を索める爲の辭書としては最便利な最適切な體制を有するものである。その著者については、林宗二（林逸とも云ふ。二一五八「明應七年」――二二四二「天正九年」壽八十四）とするもの、其他數説あるが、大概信じ難い。たゞ建仁寺の僧とする説のみは眞に近さうである。著作年代も亦未詳であるが、室町中期の作らしくおもはれる。その異本は極めて多く、江戸初期以前のものと認められる寫本の我々の目に觸れたものでも二十種を超え、印本は天正十九年の堺版をはじめとして、慶長年中にも既に數版を重ね、その後續々改版せられて普く世間に流布し、遂に節用集の名は伊呂波引通俗辭書を意味するまでになつた。かやうに永く生命を失はなかつた書の常として、絶えず改訂增補が行はれた爲、節用集の諸本は寫本も刊本も全然同一の本と認むべきものは極めて稀であつて、大抵多少内容を異にし、中には伊呂波引を改めて分類體としたものや、種々雜多の附録を加へて、大に面目を改めたものもある。易林本節用集は節用集の中最早く印行せられたもの丶一であつて、慶長二年（二二五七）に易林と云ふ者が改訂を施し跋を加へたものである。易林はどんな人かわからない。

易林本節用集は慶長二年の版とおもはれるが、それより前の印本としては天正十九年堺版の節用集がある。饅頭屋本節用集は刊年未詳であるが、甚古色があつて、易林本と前後を爭ふものである。以上の三つが刊本節用集中最古いものであつて、室町時代及江戸初期の言語文字を研究するには逸し難い資料である。その中饅頭屋本と天正十九年本とは系統上やや近いところがあり、易林本は別系統に屬する。所收の語は饅頭屋本最少く、天正本之に次ぎ、易林本は數多くして研究上益する所が多い。しかのみならず易林本は當時かなり行はれたと共に、その後に刊行せられた多くの節用集の根源となつたのであるから、直接間接に江戸時代の言語文字の上に影響を及ぼ

したであらうと考へられるから、その歴史的價値もまた少くないと云ふ事が出來よう。

右引用にあたつて、後半は中略した箇所がいくつかあること、紀元年數はもと西紀であるのを、皇紀に改めたことを斷らねばならぬ。なほ饅頭屋本節用集は增補和訓栞の下に附錄せられて活字になつてゐる。

語源をとくことは古くからあつたことは前述の通りであるが、一部の書としてその說を集めた語源辭書ともいふやうなものはいつ頃からあるものか、增補和訓栞には桑家漢語抄といふ書も附錄せられてゐる、この書は、天文・地理・器類・居家等に類別して

天　阿面　案字圜云面與レ美通音也、仰見之畧訓也。

霧　記梨　霧氣及ニ人物草木一則以ニ刀針一如レ切刺ニ其人物草木一終枯死、故取ニ記梨佐須之義一、

理　古登波流　齋部秘授抄曰、當レ書ニ事分一、事物如レ此々々相分別之義也、略之訓也、

の如く、漢字に萬葉假名で訓をつけ漢文で語源を解釋してゐて、奥書に、

楊梅亞槐漢語抄十卷自ニ官庫一潛求レ之、外以ニ東山左府之御本一校合畢、尤當家重書也

文明元年乙丑十二月下浣日　一條桃華老叟兼良書之

右十卷之秘書者楊梅大納言顯直卿之漢語抄也、今度之秘錄撰集之勅寫畢

天正六年乙亥三月下旬　清給事中　洞霞老人書之

とあるのであるが、信じ難くて、國語學書目解題に、

楊氏漢語抄(今云、桑家漢語抄ノ別名)は和名類聚抄にも引用したるものなれど、今傳はれるは僞書なりと既に先

嚢の說あり。(中略)其本十卷にわかちたれど、墨付は三十枚にたらず。大納言顯直といふ人、公卿補任にも見えず、其中に引用したる舊桑抄、神代秘授、齋部國語抄、齋部秘授抄などあやしむべき書なり。地理類の郡領の條に律を引きて「行被百五十里四圍爲大國、同百里四圍爲上國、八十里四圍爲中國、五十里四圍爲下國」といへれど、民部式に河内美作を大國とし、出羽信濃を上國とし、土佐を中國とせるものとあはず、其他しるしたることいとつたなきものにて信ずるに足らず。蓋し好事のもの古の書に托して作りたるものなるべし。

とある。理の訓が古登波流とあるなども、さう古いものではないことを示してゐる。又文明元年は己丑であり、天正六年は戊寅であるのに、この奥書の干支があはないのも變である。とにかく信じ難いものである。

細川幽齋に和歌を學び、里村紹巴に連歌を習つた松永貞德は、文學的には御傘を著はして俳諧の法式を定め以て古風の俳諧を大成した人として、和歌よりも俳諧に注目される人であるが、この人に和句解といふ著書がある。五册、語源辭書ともいふべきもので、言葉はいろは順に集めてある、解釋はいふまでもなく常識的で、

盜　ねすむなり、人のねむりたる頃を窺ふ故歟、ねとぬと五音相通。

夜　晝は散在し夜は一所に寄るか。

といふやうな說き方である。いつ出來たものか、刊行は寛文二年(一六六二)であるが、貞德はそれより前、承應二年(一六五三)に八十三歲で歿してゐる。

和歌其他國文學の註釋的研究や歌學書にあらはれた歌語の解釋等は之を略すとして、國語學に關するおもな研究は

上に記した如くである。契沖の出るまで數百年と年數は長いけれど、テニヲハにしろ假名遣にしろ、研究に科學的基礎がなくて見るべきものがない。當時の學問は殆んど貴族の專有で、その授受にはやかましい制限があつて、誰でもがその秘傳口傳をうけるといふ譯に行かず、その傳授を受けたものはまた徒らに師傳を重んじて保守に偏し、かうして自由なる研究、進取的研究は全く妨げられてゐた。これがこの時代の狀態であつて、見るべき研究のないおもな原因である。

第二章　契沖より宣長まで

德川家康が、天下の政權を得て以來、彼は專ら文治の策を取つて、藤原惺窩・林道春等の學者を登用して盛に經筵を開かしめ、一方にはまた伏見に學問所をたてたり、江戸城内に文庫を設けたり、或は古書を開板したりして、鋭意學問の普及をはかつた。林道春が論語の講義をした時、經筵を開くのは古から明經博士の職であるのに、彼が匹夫の身を以て講義するとは不都合だと、明經博士の船橋秀賢といふ人が怒つたが、匹夫の身を以て經書を講ずるのはむしろ嘉すべきことではないかと、家康は笑つて顧みなかつたといふ話もある。かうして永く堂上貴族の手中に窮屈に握られてゐた學權は、こゝに漸く平民の手中に移り、自由研究の道が開けはじめて、遂に元祿の所謂文藝復興の時代が來たのである。この時代に當つて國語學上にも新しい研究の道が開けた。それを開いたのはいふまでもなく、難波の僧圓珠庵契沖その人である。

契沖は寛永十七年(一六四〇)に尼崎に生れた。幼にして聰明、五歳の時母の敎へた百人一首を暗記し、更に父の敎へた實語敎をも暗記したといふ。その父母の家を離れて妙法寺に手定の徒弟となつたのは十一歳の時であるが、それには、七歳の時大病をして、その夢中に感じた所によつて、切に父母に請うて許されたのだといふ話がある。十三歳の頃剃髮して高野山に上り、東室院の左學頭快賢といふ人を師として學んだ。二十三歳の時山を下りて、生玉の曼陀羅院に住職となり、その翌年には阿闍梨位を受けた。

曼陀羅院の住職となつたのは妙法寺の手定の推薦であつて、靜かに佛學を研鑽する他に望みのない契沖は、煩はしい雜務のあるべき住持となることを喜ばなかつたであらうが、篤實なその性質の彼は、かつてその徒弟であつた情誼から、やむを得ずなつたものであらうといはれてゐる。そして彼はその後數年にしてこの寺を辭し、諸方に放浪して、その三十年代は、泉州久井に五年ほど、後、泉州萬町の伏屋長左衞門方に數年をつた。伏屋家は萬町の豪家で多くの圖書をもつてをつた。契沖はこゝで伏屋家の藏書である國典を讀破して、從來の漢籍佛典の研究は漸く日本古典の研究に進み、將來古典研究家たるべきもとをなした。これより先契沖は曼陀羅院時代に下河邊長流と相知つた。この萬町時代には僧淨嚴(覺彦)について安流の灌頂といふのをうけた。この淨嚴は悉曇に通じてゐて、悉曇三密鈔といふ著書もあり、契沖の音韻研究に影響を與へた。

その後三十九歳の時から再び大阪に歸つて、今里の妙法寺の住職になることになつた。その理由は、妙法寺の住職で契沖の師である手定との關係と、その頃老母を養はねばならぬ事情が起つたことゝで說明される。契沖はこゝに住職をしてゐる時代に、水戸の名君德川光圀に知られて、萬葉代匠記を書いた。光圀は勤王の志深く、彰考館をおいて俊秀の士を招聘し、大日本史を編纂して國家の正しき方向を示した人である。この人はまた萬葉集の註釋にも志あり、諸本をあつめて研究を進めてをつたが、下河邊長流が萬葉研究に深いことをきいて、長流に註釋を請うた。所が

長流は病氣の爲果さなかつたので、契沖が書くことになつた。かくて出來たのが代匠記である。

代匠記には初稿本と精撰本とある。初稿本は天和三年(一三四三)契沖四十四歳の頃稿を起して貞享四年(一三四七)四十八歳の頃成就、精撰本は元祿三年(一三五〇)五十一歳の時成就した。初稿本に於ては流布本だけによつたのであつたが、精撰本に於ては水戸家で集めて謄寫した中院本等を貸されたので、まづ本文の異同をしらべ、それによつて解釋を研究することが出來た。その他訓や解釋の上に說を出す所多く、すべての點に於て初稿本よりは進んでゐる。開卷第一の雄略天皇の御製にある「籠」をカタマと訓んだのは精撰本がはじめであつて、光圀はその卓見に服し、且つそれがかねゝ〳〵自分の思つてゐた所とあつてゐたので非常に喜んで、白金一千兩、絹三十匹を賜うて註釋の勞を謝したといふことである。所がまた寡欲な契沖はそれを或は貧者に惠み、或は寺院の修繕費にあてゝ、私しなかつたといふ。

契沖は元祿三年一月に母に死別れた。契沖が妙法寺の住職を辭して圓珠庵に退隱した時代は明かではないが、一方には母に別れ、一方には光圀の請なる萬葉集の註釋を完成した元祿三年の頃であらうと考へられてゐる。圓珠庵は大阪高津に今も存在してゐる。契沖はこゝに於て煩はしい寺の事務もなく、光圀から生活の助をうけて、悠々として學問に從事し、厚顏抄(記紀の歌の註釋)、古今餘材抄(古今和歌集の註釋)、和字正濫鈔その他多くの著述を殘して、元祿十四年(一三六一)正月二十五日に六十二歳をもつて寂したのである。その著述は集めて契沖全集として先年朝日新聞社から出版せられ、その第九卷に、文學士久松潛一氏の筆になる契沖傳があつて、その生涯その學問等についての詳細な研究を示してゐる。

さて契沖は萬葉集をはじめとして、伊勢物語、古今集、源氏物語等の註釋をものしたが、それは徒らに舊註を集めたものではなくて、皆その獨自の研究の結果を發表したもので、この點は彼と同時代の註釋の大家北村季吟(元和四年一二七八——寶永二年一三六五)と頗る異る。季吟の源氏物語湖月抄、枕草紙春曙抄等は今に行はれてはゐるが、それは堂上の學說をうけついで舊註の集成といふ所のものであるので、新研究のはじめは契沖にあるとせられるのである。

中にも國語學上における契沖の功績は、歷史的假名遣を定めて、根據の薄弱な獨斷的な從來の定家假名遣をうち破つたことである。所謂定家假名遣は既にのべた通り四聲說といひ慣例といひ、不完全な標準によつてゐるのであるが、定家の名によつて歌人達を支配してゐたのであつた。德川時代に入つて、萬治三年(一三二〇)の序がある荒木田盛徵の類字假字遣、延寶四年(一三三六)刊行撰者不明の一歩、元祿四年(一三五一)刊行撰者不明の初心かなづかひ等があるが、夫々その編纂の體裁は工夫されてゐても、內容は大體所謂定家假名遣を出るものではなかつた。(以上三書については前講二五——二七頁參照)契沖が假名遣の標準を古書に求むべきことを知つたのは、吉野朝時代の人權少僧都成俊の萬葉集の跋の影響もあるではあらうが、事實は何といつてもその萬葉研究の結果でなければならない。

契沖の假名遣論は、代匠記の總釋にも見えてゐるが、專ら假名遣を論じたものは、和字正濫鈔、次に橘成員が和字正濫鈔に反對して出した倭字古今通例全書を見て憤慨してものした和字正濫通妨抄、なほ之を補改して自說の基礎を固めた和字正濫要略の三部である。これらについては前講三〇頁から三七頁にのべた所に讓つて、こゝには代匠記精撰本の總釋のうち、集中假名の事といふ條に見える意見を紹介しておかうと思ふ。まづこゝには國音について、

マコトニ本朝ノ音ハ詳雅ナリ。何ヲ以テカ知トナラバ能梵音ニ通ズル故ニ知レリ。（中略）彼三韓ノ如キハ日本紀ニ訛テ詳ナラザル由處々ニ見エ、此集（記者云、萬葉集をさす。）第二ニモ言サヘグ韓トモ百濟トモヨメリ。大唐モ江南江北音ノ輕重異ナル由ナルニ、マシテ衰世ニ至テハ中區ヲ去テ邊地ヲ都トシケレバニヤ、晩宋ノ後ノ音ハ詳雅ナラザル歟、梵文ニ叶ハヌナリ。

といつてゐる。即ち支那音朝鮮音は國音より劣つてゐるといふのであるが、その理由は梵音に通じるか否かにあるので、梵音を最もすぐれたものと考へてゐたやうに見える。悉曇學者覺彦に學んだ釋契沖としては當然な結論のやうに考へられる。次に音聲の發生について、

凡ソ人ノ語ラムトスル時喉中ニ風アリ。天竺ニハ是ヲ優陀那ト名付ルヲ、此ニハ譯シテ內風ト云。此風下テ臀水ヲ擊時、齗、齒、脣、頂、舌、咽、口ノ七處ニ觸レ、喉內、舌內、脣內ノ三內ニ依テ出ス所ノ聲ニ五十音アリ。

といひ、諸音の初は阿であること、阿は聲と韻とを兼ねたものであることを說いて、

此阿ノ聲初テ舌ニ觸テ伊ト成リ、脣ニ觸テ宇ト成ル。江ハ伊ノ末音ナリ。江ト云時最初ニ微隱ニ伊ノ聲ヲ帶シテ、伊江ヲ急ニ呼如クナルハ此故ナリ。乎ハ宇ノ末音ナリ。乎ト云時最初ニ微隱ニ宇ノ聲ヲ帶シ、宇乎ヲ急ニ呼如クナルハ此故ナリ。阿ハ諸音ノ本體ニシテ伊宇江乎ノ四音ヲ生ジ、加左太奈波末也良和ノ九宇ヲ生ジテ其韻トナレバ、聲韻ヲ兼ル字トス。

といひ、次に、カサタハマヤラワの九音が夫々イウエヲと合して三十六音となり、すべてで五十音をなすことをのべ、梵文の法によつて五十音圖を示してゐる。次に我國の實際は四十七音であることをのべて、いろは歌の四十七言の中にも假名遣の誤り易いものがあることをのべ、

此度和名集ヲ初メテ日本紀ヨリ菅家萬葉集等マデノ假名ヲ考ヘ見ルニ、皆一同ニシテ此集ト叶ヘリ。又行成卿ナドノ比マデノ假名ヲ見ルニ、此集ニ違ハネバ其後漸々ニ誤レル歟。

といつて、これらは多くは古人の跡に依らなければ知り難いものであるから、今萬葉集中に見えて今の人の用法と異るものを思出すに隨つて擧げようといつて、其例をあげてゐる。和字正濫鈔は要するにこれをおしひろげたものだといひ得る。正濫鈔の卷一は總論で、まづ行阿の假名文字遣を否定し、次に

今撰ぶ所は日本紀より三代實錄に至るまでの國史、舊事記、古事記、萬葉集、新撰萬葉集、古語拾遺、延喜式、和名集のたぐひ、古今集等及び諸家集までに、假名に證とすべき事あれば見及ぶに隨ひて引て是を證す。

といつて基礎を明かにし、次に音聲の發生、悉曇、五十音圖、平假名片假名の字源、いろは歌等について記してゐるのであるが、音聲の發生、悉曇、五十音圖等の說は前記代匠記の說の如くで、これらは皆覺彦の悉曇三密抄によつたものである。たゞ正濫鈔の五十音圖は前講七十二頁に例示したやうに、獨特の複合字をもつて示してゐる、それは契沖の工夫であつて、オヲの所屬を誤つたのは覺彦の誤のまゝを承けたのであつた。なほ契沖の音韻に對する見解については、前講七十二頁以下に引いた久松氏の研究を參照せられたい。

契沖の語源說は代匠記や和字正濫鈔等にもぽつ〳〵見えるが、隨筆の圓珠庵雜記の中にはまとめて說かれてゐる。

鶯は、もろ〳〵の鳥の中に、すをうるはしうくふなれば、愛食巢と名付るか。

魚は、うろこあり尾あれば、鱗尾といふか。

鳥は、人の取てかひもしくひもすれば、捕か。
寺、丹青色をまじへて、其光のてらす故に名付るか。
又法の燈をこゝに挑て、冥き塗をてらす故ともいふべし。

中にはすぐれた說もないではないが、大體に於ては右のやうな常識的解釋である。久松氏が契沖傳に、契沖の假名遣研究と語源說との關係をといて、

文獻のない假名遣を定める一方法として、契沖は語源的に假名遣を定めた。契沖が語源論に多少手をふれたのは、この假名遣の研究から自然に出て來た道であると言はれなければならぬ。彼の語源說が極めて獨斷的であるのは、文獻學者としての契沖には至當な事であると思はれる。彼は飽く迄も文獻學者として終始すべきであつたが、たま〳〵文獻なき語源研究に手を着けたために、こゝに失敗を演じたのである。文字論も周到なる研究ではないが尙文獻によつた點がある。語源說に於ては文獻を離れて强ひて解釋しようとしたために、契沖としては寧ろ不思議に思はれる樣な非科學的結果を來したのである。

とこつてをられるのは、もつともなことである。

國語學に對する契沖の功績は前にも述べた事ではあるが歷史的假名遣を定めたことが第一である。然し新しい學說は出たからといつて直に天下を風靡するといふ譯には行かぬ。契沖の和字正濫鈔には橘成員の反對があつた。その篤に和字正濫通妨抄と、和字正濫要略とが書かれたのは、假名遣の方からいへば却つてよい收穫であつた。

然しこの二書は刊行せられなかつた。でその後も契沖の說が假名遣界の一勢力となる迄にはかなりの年月を待たなければならなかつた。その間に出た貝原益軒の倭字解、服部吟照の假名遣問答抄、其の他種々の假名遣に關する著書は、何れも從來の假名遣を主張したものであつた。その中でも服部吟照の假名遣問答抄は、益軒の倭字解に反對して書かれたものであつて、契沖の假名遣の側から見ると同士討の觀があつたのは一興である。これらについては前講三十七頁から四十三頁にのべた所を參照願ひたい。

倭字解の著者貝原益軒は、寛永七年(一二一九〇)に生れ、正德四年(一三一七四)に歿した。契沖より十年早く生れ十三年おそくなくなつてゐる譯である。筑前の人であつて、名は篤信字は子誠、益軒はその號であるが、又損軒とも言つた。幼い時からすぐれてをつて、他日名を成すべき素質を示した逸話も傳つてゐる。はじめは佛書を好んだが、後に兄の訓誡で儒書の研究をはじめ、明曆年中京都に出て、松永尺五・木下順庵・山崎闇齋等について學び、業成つて京都に帷を下して子弟を敎へた。博識を以て名あり、容易に人をほめぬ太宰春臺も、益軒の洽覽博識は海內無比だとほめたさうである。後鄕里に歸つて藩侯に事へ在職四十年、名聲益々揚つた。儒敎研究の傍敎訓に關する書を著はして社會敎育に資し、晩年は國語研究に手をそめて、倭字解の外に日本釋名の著がある。なほ益軒の著書は明治の末年に集めて、益軒全集(八卷)として出されてゐる。その第一卷のはじめに詳細な年譜や傳記がつけてある。

日本釋名は語源をといたもので三卷ある。元祿十二年(一三五九)の自序があり、同十三年に刊行された。自序によれば劉瀰の釋名にならつて、日本紀・萬葉集・和名抄以下の古書にもとづいて編んだものだといふ。語彙は、天象・時節・地理・宮室……といふやうに分類してある。その凡例には彼の語源解釋についての意見がまとめて述べてある。

きづ語源をとくに八の要訣ありとして、

和語をとく事は謎をとくが如し、其法訣をしるべし。是をとくに凡八の要訣あり。

○一に自語は天地（アメツチ）男女（ヲノメ）父母（チハハ）などの類、上古の時自然に云出せる語也、其故はかりがたし、みだりに義理をつけてとくべからず。

○二に轉語は五音相通によりて名づけし語也。上（カミ）を轉じて君とし、高（タカ）を轉じて竹（タケ）とし、黑（クロシ）を轉じて烏（カラス）とし、盜（ヌスミ）を轉じて鼠（ネズミ）とし、染（ソミ）を轉じて墨（スミ）とするの類也。又轉語にして略語をかねたるも多し、且音を轉じて和訓とせしの類あり、後にしるす。

○三に略語はことばを略するを云。ひゆるを氷（ヒ）とし、しばしくらきをしぐれ（シ）とし、かすみかゝやくを春日（カスガ）とし、たちなびくをたなびくとし、文出（フンデ）を筆（フデ）とし、墨研（スミスリ）を硯（スゞリ）とし、宮所を都とし、かへる手をかへでとし、いさぎよきをさぎとし、かへりを鴈とし、前垣（マガキ）を籬とし、きこえを聲とするの類也。上略中略下略有、又略語にして轉語をかねたるも多し。

○四に借語は他の名とことばをかり、其まゝ用ひて名づけたる也。日をかりて火とし、天（アメ）をかりて雨とし、地（ツチ）をかりて土とし、上をかりて神とし髮とし、疾（トシ）をかりて年とし、蔓（ツル）をかりて弦とし、潮（シホ）をかりて鹽とし、炭をかりて墨とするの類也。

○五に義語は義理を以て名づけたる也。諸越（モロコシ）を唐（モロコシ）とし、氣生（イキオヒ）を勢とし、明時（アカトキ）を曉とし、口無（クチナシ）を梔子とするの類。又是を合語とも云、二語を合せたる故也。義語にして轉語をかねたるもあり。義語を略したるは即略語也。

○六に反語はかな返し也。はたおり（ハトリ）を服部とし、かるがゆへをかれとし、かれをけとし、ひらを葉（ハ）とし、とをつあはうみをとをたふみとし、あはうみをあふみとし、きゑをけとし、見へをめとし、やすくきゆるを雪（ユキ）とするの類多し。

○七に子語は母字より生ずる詞を云。一言母となれば其母字より生ずるを云。日の字を母字としてひる・輝（ヒカガ）・光を生じ、月を母字として晦（ツゴモリ）・朔（ツイタチ）を生じ、火を母字として炎・焙・埃（ホコリ）を生じ、水を母として源（ミナモト）・溝（ミゾ）・汀（ミギハ）・港を生ずる類を子語と云。

○八に音語（イン）也。音語に三樣あり、一に字の音を其まゝ用ひて和語とせしは、菊・桔梗・繪・馬・石榴など也。二に唐音を其まゝ和語に用たるあり。杏子（アンズ）・石灰（シックイ）・波蘿（ハウレン）などの類也。三には梵語を用たる有。ほとゝぎす・尼・猿（サル）・斑（マダラ）などの類也。和語千萬おほしといへども此八の外に出ず。もろこしの文字をつくりしに、六書とて六の品あるがごとし。

といつてゐる。これは要するに國語の構成についての研究で、完全とは勿論言はれぬけれど、當時にあつてこれだけに秩序立つた意見を述べてゐるのは、卓見だといはなければならない。次に實際に研究する場合の方針として述べてゐる注意は、大體次の如くである。

一、和語をとくに上代よりとなふる詞を、音を以てとくはあしゝ。上代は和語のみにして漢字なし、漢字を以て名づけしは後代の事也。又近代のいやしき俗語を以て古のことばをとくべからず。上代のことばは今の俗語にかはれり。今の語にてとけば古語にあはず。聖（ヒジリ）を非を知ると云の類用ゆべからず。

一、母語を用て子語をとくべし、子語を以て母語をとくべからず。火は天の日をかりてひと云なるを、日は地の火と同じければひと云ととき、日とは物日にあたればひるゆへに日となづくととき、くもるゆへ雲と云の類、是子語を以て母語をとく也。あやまり也。

一、ときがたき言をばうたがはしきをかきてとくべからず。みだりにとけばあやまるもの也。

一、古語をとくにはやすくすなをにとけば古人の言をつくりし意にかなふ。むつかしくうがちてとけば古人の意にかなはず。……妻をとくにむつましと云上下を略せりととくは、やすらかにてよし。夫婦枕をならべつゝきまとはるゆへ妻と云説むつかしくしてすなをならず。うがてりと云べし、

一、和語にすむをにごり、にごるをすむ事多し。清濁通用する故也。和語をとくにも清濁ちがひたるはくるしからず。……くれはたおりをくれはどりと云、日むかひをひふがと云、いでを手と云の類、うむの下をにごる例とはかはりて清濁ちがひたるも可也。

之等の注意は大體に於てもつともな注意である。所でこれを運用するに當つて、常識的態度をすてゝ科學的態度をとればよかつたのであるが、その點は遺憾であつた。

雪　やすくきゆる也、やすのかへしはゆ也、きゆるの下を略す。

霜　下(シモ)にあるの義也。霜滿レ天などいへ共、かたちのみゆるは下にあり。

雷(イカツチ)　いかりてつちにおつる也。

東風(コチ)　こは氷(コホリ)也、ちはちらす也、春のはじめにこほりを吹ちらす風也。とくるをちると云。又とくの反字(カヘシ)はつ也、つとちと通ず、こほりとく也。

五月雨(サミダレ)　さつきあめくだる也。さはさ月、みは雨なり、めとみと通ず、たれはくだる也、上を略す、るとれと通ず。

但し三卷全部が取るに足らぬ解釋ばかりたといふのではない。

書(フミ)　ふみ、神代直指抄にふるきをみると云義、一説に百濟國より表をたてまつりしに其語不敬なりとて菟道皇子(ウヂ)大にいかりて、書を地になげ足にてふみ給へり、故にふみといふ。……此等の説いづれも通ず。しかれどもおそらくは皆傅會(フクワイ)せる鑿説なるべし。篤信ひそかにおもへらく、ふみは文(ブン)の字の音を用て和訓とせるなるべし。文字の音を用ひて和訓とする例多し、頓(トミ)・蟬(セミ)・錢(ゼニ)・鬼(ヲニ)・紫菀(シヲニ)・牽牛子(ケニゴシ)・木瓜(ボケ)・蘇枋などの類なり。いにしへ我國には文字なし、文字はもろこしより來れり、其時文の字のふんの音を用て、むとみと相通ゆへにふみと訓ぜしなるべし。此例おほければ何のうたがひかあらんや。

これは卓説といふべきものゝ一例である。但し右の引例の語のうちで、頓は、とみ(疾)といふ國語がもとで、それに頓をあてたものと見るのが現在の定説である。鬼は言海にも「隱(オヌ)ノ音轉ナリト云」とある。

又右の例に見える神代直指抄といふ書は他にもしば〳〵引かれてゐる。仙覺の萬葉集抄、由阿の詞林采葉抄、等の名も見える。但し引用書の名がないのは益軒自身の説だとは限らぬやうである。てにをはをといて、

出葉(ナニハ)　葉の出て草木をわきまへしるが如く、てにをは付れば其意義明らかになる也。

とあるなどは、出所は斷つてないが益軒がはじめての説ではない。これらからおして考へられる。保科氏の國語學史

（一一〇——一一二頁）には、貞德の和句解、契沖の圓珠庵雜記等と比較して、益軒の說のこれらに類似したものが多くあることを指摘し、暗合であるといへばいへないこともないが、むしろ益軒は貞德や契沖の說をうけついだと見た方が穩かであらうといはれてゐる。

このテニハの語源に對する說は、元祿十六年に出來た益軒の著、點例には、改められて、

テニハハ、文字ノ音ノ末ニモ訓ノ末ニモヨミ付ル助字ヲ云。（中略）其內テニヲハノ四字多シ、其外ニモアレド、此四字オホキユヘニ是ヲトリテテニヲハト名ヅク。（中略）一說テニハトハ出爾葉ノ意、草木葉出テイヅレノ草木ト云事ヲシルガ如クナレバテニハト云トイヘリ。是テニハト云名ニヨリテ、故實ナキ事ヲ私ニツクリ出シ附會セルナリ。

とある。點例は上下二卷、經傳の訓點のつけ方を說いた書である。

益軒についで出て、語源研究にすぐれた業績を殘したのは新井白石である。白石は號で名は君美といひ、明曆三年（一六五七）に生れた。父は上總久留里に二萬千石の土屋侯の家臣で、白石の生れた時は、侯が明曆三年正月の江戸の大火にその邸宅も罹災したので外孫なる內藤侯の柳原の邸に寄住してをられた時であつたので、白石は內藤侯の邸內の假屋で生れたのであつた。土屋侯の母堂は白石を非常に愛して、襁褓の中から常にそばにおき、侯も亦日々に召して愛されたので、一門の人々は侯の庶子かと疑つたといふ。白石は幼い頃から聰明であつたが、また頗る努力家であつて、その九歲の頃の秋から冬にかけて、習字の課を立てゝ、晝の間に行草の字三千、夜に入つて一千づゝ毎日書くことになり、冬になつて日が短くなつては、晝の課業が明るいうちに終らず、西向の竹椽の上に机をもち出しては書き終り、又夜になつて睡魔におそはれた時は、衣を脫いでその竹椽で一桶の水をかぶつて目をさましつゝ課業を果したといふ。

延寶五年白石が二十一歲の時、彼は事によつて父と共に土屋家を去らねばならなかつた。しかも仕途を禁じられて去られたのであつた。彼の自叙傳の折たく柴の記にこの時のことを記して、

かゝりしかば我ふたゝび仕にしたがふべき望は絕ぬ。父母をば陸奧におはせし人のやしなひまゐらせられたれ、我ゆく末の事どもをいかにともおもひわかたず。主從わづかに二人身を市中によせつ。むかししたしかりしものどものもとより、そこらの人の子供に手習ふ事などをしへて、世渡るたすけともせよかしといひおこせたりけれど、我こゝろざしにもあらねば、朝と夕とにはこゝかしこにて書講じぬる人の許にゆきてこれを聞き、ひるのほどは日ごとに父母のもとに參て見えまゐらす。

といつてゐる。かうして生活を脅かされながらも、なほ學問に精進したのであつた。豪商河村瑞軒が彼を見込んで、金三千圓で求めた宅地を學問の資としてつけてやらうといふ緣談を出したのもこの頃の事で、白石は斷然とこれを辭し、小蛇がうけた疵は小さかつたが、後それが大蛇となつて死んだ際にはその疵が大きくなつてゐたといふ譬を引いて、

三千兩の黃金をすてゝ大疵あらむ儒生と成し立てられむ事は、謀を得給ひたりともいふべからず。たとひさしきる所の小しきなりとも、我も亦疵かうぶらん事をねがはず。（折たく柴の記）

といつたのであつた。

延寶七年に土屋侯は當代頼直が家治まらずといふ廉で所領を沒收せられ、その子主税がかたばかりの所領を賜はつた。その主税が白石を招いたので、白石の仕途は再び開けた。天和二年堀田正俊に仕へたが遂に志を得ず元祿四年に致仕した。だが後まもなくその師木下順庵の推薦で元祿六年に甲府の德川家宣に召されて待遇日に厚く幸福な日がめぐつて來た。寶永六年に家宣が將軍となるに及んでは、白石はかねて幕政にも參與せしめられ、内政上にも外交上にも劃策する所多く、その意見は屢々採用せられた。朝鮮來聘使の待遇法の改正、武家諸法度の改正等はその一例である。かくして將軍家宣の顧問としての白石の地位は頗る重かつたのであるが、その家宣は在職四年で薨じてしまつた。その子家繼が五歲で將軍職をつぎ、家繼養育の事を命ぜられた側用人間部詮房は白石の說をも聽いたが、家繼もまもなく薨じて(時に八歲)、紀州から吉宗が入つて八代の將軍となるに及んで、白石は隱居した。その後約十年は不遇で、筆硯典籍を友として餘生を樂み、享保十年(一三八五)六十九歲で歿したのである。著書は全集六册、博學多識で和漢の典故に通じ、著書の種類も種々であるが、國語學關係の主なものは、東雅、東音譜、同文通考等である。

東雅は二十卷、語源を釋いた書である。書名は日東爾雅の意で、支那の爾雅といふ書になぞらへてつけたものである。その凡例に

此書の編は、要とするところ物名を釋するにあれば、倭名類聚鈔に見えし所に據て、天地より始て蟲魚の類に至るまで、其名の釋すべきを釋す。義既に闕けて解すべからざるものと、釋を待たずして義自ら明かなる者の如きは、收載することを必とせず。

とあるので、大體の方針がうかゞはれる。その出來た時については、同じく凡例に、

此書の作丁酉の夏にあり。時に海上に寓して與に語るべきなし。舊聞を綴集し、筆に隨ひて編を成す。客間たゞ一篋の書あるのみにして、校訂に便りすべきものなし。秋後居を北郭門外に卜するに至りて、詳該を加ふるに及ばず。明年の夏、病榻暇あり、其書せし所を觀るに、鄙言紛謬、援引失據、すくなからず。業已に志倦み氣疲れぬ。たゞ其太甚なる者を删去りて後者の改定を俟つ。

とある。丁酉は享保二年(一三七七)で、吉宗が將軍となつて白石が退隱したその翌年、六十一歲の時である。

東雅には益軒の日本釋名のやうに、語源解釋についての方針といふやうなものは示してない。然しその言葉に就ての意見は總論に於て見ることが出來る。そこには益軒の說に對して反對してゐる所も二三ある。それは次のやうな所である。

世の人いふ事あり、和語を解くには謎語を解くが如し。其要訣を得ぬれば解くべからざる者なしなどいふなり。凡天地の大なるより見ぬれば、我東方の如きまたこれ一方の風にてあるなり。されば其一方の内、また古今の間五方の雅俗の言多からずともいふべからず。一つに皆概して謎語となして解せむ、其義を盡すべき事なりとも思はれず。ましてや古を師とするにあらずして、みづから其意解をもて其義を釋しなむ、我信ずる所にはあらず。

益軒が、「和語をとく事は謎をとくが如し云々」と述べてゐるについての說である。終の「ましてや古を師とするにあらずして、みづから其意解をもて其義を釋しなむ、我信ずる所にはあらず。」といふ言葉は、日本釋名のとき方の缺點を指すと共に、東雅の態度を示してゐるものである。

世の古語を解釋するに、上略中略下略等の說あるなり。我思ふ所には異なり。（中略）古言の略せるが如くなるは其扑也。これを略していひしにはあらず。（中略）其略語の例に、略語とは言を略していふ。ひゆるを氷といひ、しばしくらきをしぐれといひ、文出を筆といひ、墨研を硯といふの類也といふなり。古語に氷をばヒといひけりまたヒといふ言を開呼びてはヒイといひけり。ヒエとはヒイといふ語の轉ぜしなり。ヒユといふ語を略してヒといひしにはあらず。（下略）

又反語とはかな返しなり。見ゆを目とし、きくをケとし、やすく消ゆるを雪とするの類也といふなり。古語に目をマといひけり。マといふ語の轉じてメといひし如きは、或方言の同じからぬにもやよりぬらん。見るといひみゆといふが如きは、マといひメといふ言によりていひし所にぞあるべき。もしミといふ語を轉じて目といひしならんは、耳をよびてミミといふが如きはまたいかにやあるらん。（下略）

或說に、我國の言に借語の例あり、他の名と言葉とを其儘に借り用ひて名づけしをいふ。日を借りて火とし天を借りて雨とする類也といふなり。我思ふ所はこれもまた轉語なり。（中略）古語には日をばヒといひ、火をばホといひけり。されどヒといひホといふも轉音なれば、其初め日をヒといふによりて其音を轉じて火をホといひしや、また日をヒといひ火をホといふ、おの〳〵其義ありしにや、火をホといひしを轉じてヒといひしは或は方言にや出ぬらん、或は轉語にや因りぬらん、すべて是等の如きは今はた知るべからず。雨をアメといふは天をアメといふを其儘借用ひしといふが如きは知るべからず。雨をアメといひしはなを天の水といふ如し。天より水の降れる謂なり。古語に水をばミといひけり。（下略）

之等何れも益軒の說に對してのべてゐるのであることは、前にあげた日本釋名の說を參照すればうなづかれるであらう。

次に總論に見えた白石の語學上の意見を大略のべる。まづ彼は、「天下の言には古言あり今言あり、その古今の間に於て又其方言あり。方言の中にも亦各雅言あり俗言あり。」といつて、かういふ狀態であるから、千載の下に生れて千載の上に通じ、一方の內にあつて四方の外に達することは容易ではない。幸に國語には先達の人の訓釋が今日に傳つてゐる。それらの記錄にもれたものは、類を推し例に倣つて其の義を求むべく、それでも解しえぬ場合は、强ひて說をなさぬがよいといつてゐる。

次に、言語の研究にはその時代の研究をせねばならぬことをのべてゐる。或時代には外國語が國語の中に入つて來て、そのため古語が或はすたれ或はその義が隱れて變化を來してゐる。また種々の事情から國內の方言がいりまじつたり、さうでなくても時代によつて意義の變遷がある。故に今日の言葉の意義から古代の言葉をとくのはよくないので、時代の研究の必要な所以である。

次に、西洋と支那と日本との言語を比較して、日本語ほど聲音の少いものはないといふこと、とはいへ古今の言に通ずるには音韻の學による外はないこと、日本語には轉音が殊に多いこと、言と詞との區別、所謂上略・中略・下略の說について、所謂借語についての說などがある。言と詞との區別については次のやうにのべてゐる。

言といひ詞といふ義をもよくわきまふべき事なり。音發爲言、言之成文爲詞とも見えたり。先達の說に發語の詞なりといひ詞助也などいひし、皆これ詞なり。太古の言の如きは其音單出して即ち言となりし多かり。或は之・

を云はんとしてまづ其聲の發して其語を起しぬるあり、之を發語の詞といひまた上の詞助なりなどいひけり。或は其言の餘音ある、之を詞助とも助詞ともいひ、また其初に彼言あるによりて此言も出來しが如き、其詞を得て彼言の轉ぜしあるもすくなからず。或は彼と此との言を合て其言となれるには、彼此二つの言の相合ふ所を助けし詞あるを、中の詞助とも又やすめ字などゝも云ひし也。すべて是等の事によりて自から其言も長く其語も多くなりしと見えたり。これらの事も並に我書に註せし所に見えたり。たとへば日をヒといひ火をホといふが如きは、並に其音單出して言となりしなり。晝をヒルといふは、ヒといふは日也、ルといふは詞助也。星をホシといふは、ホといふは火也、シといふは詞助也、晝とはまづヒといふ言葉あるによりてまた晝といふ言葉の出來し也、ヒといひヒルといふは、ルといふ詞助によりて轉じたるなり。星とはまづ火といふ言葉あるによりて、また星といふ言葉の出來しなり。ホといひシといふはシといふ詞助によりて轉じたるなり。（中略）幽をホノカといふは、ホは火也、ノは則中の詞助にてやすめ字などいふものなり。カは赤なり、ホノカとは火の赤きによりていひし言也。ホといひカといふ二つの言をあはせいふ間を、ノといふ詞をもて助けて、ホノカといふ言葉とはなりし也。又古語に赤をカといひしも其音の單出して言となりしなり。又そのカといふ言葉をいひ出さんとしてアといひし如きを、發語の詞とも上の詞助などゝもいふ也。それをまたアカシともシアキなどゝもいふ。シといひキといふはアカといふ言の餘音にて、則これ下の詞助也。凡これらの類をもて、上中下の詞助といふ事をも、二合三合などいふ事をも推ししるべき事なり。

要するに言は語根、詞助は添辭であつて、言に種々の詞助が添つて多くの言葉を生ずることをのべてゐるのである。

東雅二十卷、天文・地輿・神祇・人倫・宮室・器用・飲食・穀蔬・果蓏・草卉・樹竹・禽鳥・畜獸・鱗介・蟲豸の類を別けて釋してゐるのであるが、そこに多く使はれてゐるのはこの言と詞との說、それから轉語といふことゝ引合せといふことである。

古語に背をソといふ。萬葉集の歌に、背向の字讀てソカヒといふが如きこれなり。またセと云は轉語なり。ソノフといふは、ソは即背なり。猶レ言レ後也。ノは詞助也。フは粟田をアハフといひ、豆田をマメフといふフの如し。即これ屋後田園の謂也。（卷二、地輿、園の條）

この中で、ソとフは言であり、ノは詞である。セはソの轉語で言である。かゝる轉語は五音相通で通常いはれる所であるが、白石のいふ轉語には次のやうな場合のもある。

或說に霜をシモといひ、潮をシホといふ。幷にこれシムといふ語の轉ぜしにて、其身にしむをいふなりといへり。されど古語にシといひし詞には白きをいふなり。霜をシモといひ潮をシホといふが如きは、その色に因りしとこそ見えたれ。（中略）シホといひシモといふが如き、もと是轉語なるは勿論なり。（卷〇、地輿、海の條）

シホとシモと轉ずるといふのは、前のソがセに轉ずるといふのが母音の轉化であるに對して、子音の轉化である。又次のやうな場合もある。

また稱してウシといふ事ありけり。舊事紀日本紀等には大人の字を用ひらる。……字志といひし語轉じてオシといふ。忍としるし押としるし、排としるす。取用ひし所の字は同じからねど、オシといふ語に於ては異なりと

も聞えず。……又轉じてはヌシといふ。日本紀に主の字讀てウシともいひ、ヌシともいひし、即是也。（卷五、人倫、人の條）

ウシ轉じてヌシといふといふのは、音が添加したものである。

次に引合せといつてゐる例は次の如きものである。

中臣氏をナカトミといふが如きは、ナカツオミといふ詞の、ツオの二つを引合せて呼びぬれば、トといふ詞になりたる也。（卷五、人倫、臣の條）

これは通例反切といふ所である。白石も、

カとは開なり明なり、天既に開け明るをさしいふ也。アクといふ事を引合せて呼ぶ時は、カといふ言葉となるなり。是等を音韻の學に反切の音といふなるべし。（卷一、天文、日の條）

といつてゐるのであるが、所謂反切の法では、アクはカとはならないやうである。

赤色をアカといふ。アは發語の詞なり。カはヤクといふが如し。其色の火の燒るが如くなるなり。ヤクといひヤケといふ語、合て呼ぶときはカといふ言葉になるなり。俗に霞をヤケといふもまた此義なり。（卷一、天文、霞の條）

古語に凡そ尊び稱してはマといひミといふ。眞讀でマといひ、御讀でミといふ是也。もゝこれ相轉じいひしなり。猶カミといふが如し。マとはもとカミといふ語を引合せて呼びしなり。（卷八、器用、枕の條）

これらは何れも通例の反切法では出ない音である。白石はどういふ具合に引合せたものか疑問である。

さてかうして引合せられた語を、「急なるなり」といつてゐる所もある。

織讀でハトリといふは、機織といふ語の急なるなり。ハタオリといふタオの二字を引結びてよびぬれば、トといふ音になりぬるなり。（卷七、器用、綾の條）

シヅオリまたシトリといふは、其語の急なる也。（卷七、器用、布の條）

又引合せる逆を、開くといつてゐる。

コといひしは物をコムルの義なり。されば籠の字亦讀でコムルとは云ひし也。又讀でカゴと云ひしは竹籠也。カと云ひタケといふは轉語也。カといふ音を開て呼ぶ時はタケといふ語になりけり。タケといふ語を合せ呼ぶ時はカといふ音になるなり。（卷八、器用、籠の條）

かうして、開いていふとか合せてよぶとかいふ說明は、どの程度まで信ずべきかは研究の餘地がある。前講（六九頁以下）に、眞淵が假名反しの法を大膽に用ひたことを述べたが、白石にも濫用と見るべき點があると思はれる。

この他にも東雅の語源說には不完全な所は多い。けれどもこれをそれ以前のものに比較してみると、頗る進步のあとありと言はなければならぬ。前にも引いた言葉であるが、東雅の總論に、日本釋名の說に反對して、

一つに皆概して謎語となして解せむ、其義を盡すべき事なりとも思はれず。ましてや古を師とするにあらずして、みづから其意解をもて其義を釋しなむ、我信ずる所にはあらず。

といつた、この古を師とするといふ態度、言ひかへれば歷史的に見てゆくといふ態度をとつたことが、白石の卓見であつて、東雅が今なほ重んぜられてゐる所以なのである。

東音譜は一卷、五十音を支那諸州の音と對照し、又、五十音にない音を表はす綴字の方法をのべたもので、凡例の終に、

是書本爲レ記二異言一而作。外國之音與二中國一異。故今音釋取義亦多與三舊說一不レ合。覽者恕焉。

とある。享保四年(一三七九)十二月の自序がある。

同文通考は前講にもしば〳〵引いたが、文字に關する研究であつて、語源研究の東雅と共に、白石の語學上の二大著述として稱へられるものである。但しこれは出來た時代が明かでない。白石の歿後、白蛾が增補して、寶曆十年(二四二〇)九月に刊行した。

この書は四卷から成り、卷一は支那の文字についての研究で、目錄を示せば次の如くである。

始製文字　六書　古文　大篆
奇字　小篆　隸書　八分
飛白　章草　行書　草書
百體書　俗字 訛字 創字　押字

卷二以下は我國の文字についての研究で、神代文字のこと、片假名平假名のこと、我國における漢字のことなどについてのべてゐる。その目錄は次の如くである。

神代文字　肥人書　薩人書　眞字
漢音吳音　篆書　八分飛白　行書
草書　新字　(以上卷二)
片假字　以呂波　梵字　符字
押字　點圖　片假字釋文　以呂波釋文
音類假字釋文　(以上卷三)
國字　國訓　借用　誤用
訛字　省字　(以上卷四)

神代文字については、まづ先人の說を列擧して之を批評し、自說をのべてゐるのであるが、その態度があまり愼重すぎて、存在說なのか非存在說なのかわかりかねる所があるが、むしろ存在說に傾いてゐたものゝやうで、平田篤胤がその神字日文傳に於て、

近キ世の人に、神代に文字ありと論へるは、新井君美ぬしぞ始なりける。

といつてゐることは、前講一〇二頁以下に述べた。又、片假名については、卜部兼倶の說によつて吉備公の作としたものといふやうな考へであつたやうである(前講一一九頁參照)。平假名については、空海が整理したものもあるとしてゐる。肥人書についてはその條に、

(前講一三八頁參照)、又、假名の字源については、肥人書から出てゐるものもあるとしてゐる。肥人書については

大藏省ノ御書ノ中ニ、肥人ノ字六七枚バカリアリ。其字皆假字ヲ用フ。其字イヤダ明カナラザルモアリ。乃川等ノ字ハ明カニ見ユ。

といふ、釋日本紀の卜部兼方の說をあげて、なほ冷泉爲富の本朝書籍目錄に肥人書五卷とあること、肥人書とは高麗

國の書であらうといふこと、今も朝鮮には梵字のやうな體裁の諺文といふものがあるによつて考へると、高麗の昔にもその國に行はれた文字があつて、それが我國に傳つて、肥人書となつたものであらうといふことをのべて、今のツノ等はその肥人書の川乃から出てゐるといつてゐるのである。

又、漢音と吳音とは何れが先に我國に傳つたかについて、吳音が先と推定はしながらも、なほその說のより難いことをのべて、

タヾ文獻ノ徵トスルニ足レルヲ取テ、漢音ノ傳レル事ハ王仁ガ來リシ日ニ始マリ、吳音ノ傳レルコトハ佛像經文ノ來リシ日ニ始レリトスルニハシクベカラズ。又按ズルニ、我國ニ傳フル所、ヒトリ吳漢ノ二音ノミニモ限ラズ、三韓ノ方音俗諺モアリケリ。古ノ音訓ニ今朝鮮ノ人ノ用フル聲韻ノマジハレルコト侍リ。

といつてゐる。白石のこの文獻主義は、例へば神代文字の說のやうに、存在說を可としてゐるのか、非存在說を可としてゐるのか、說のゆく所が明瞭を缺くといふやうな缺點はあるけれども、どこまでも文獻を基礎にして考へてゆくといふ所に、また彼としての强味がある譯なのである。とにかく同文通考は個々の問題についての說は簡單ではあるけれども、從來の人の調べなかつた文字一般について研究を纏めてゐる點で、見のがすことの出來ぬものである。平假名片假名の作者や字源等については契沖の和字正濫鈔にも說があり、やゝ纏つたものであるが、契沖のはこれが直接の研究對象ではなかつた。其他にもポツ〳〵と說があることは前講にものべたが、何れも取立てゝいふ程のものではなかつたのである。白石以後に於ても、伴信友の假字本末、平田篤胤の神字日文傳等、文字に關する研究は出たが、何れも文字の一部分の研究で、文字の全般に亘つて、同文通考の如く研究したものはないのである。とにかく東雅といひ同文通考といひ、異色ある研究といはなければならぬ。

享保十三年(一三八八)正月十九日に、六十三歲を以て歿した荻生徂徠は、復古學をとなへた有名な儒學者であるが、南留別志といふ隨筆の著があつて、そこに國語に關する說も少し見える。徂徠は醫を以て幕府に仕へてゐた方菴といふ人の第二子で、名は景元また雙松、字は茂卿、通稱は德右衞門、徂徠はその號である。本姓が物部なので物徂徠ともいつた。荻生といふのは其の先祖が三河の大給に居つたからだとのことである。徂徠は江戸生れで、また幼時からすぐれてをり、五歲にして字を識り十歲よく文を屬すと傳へられる。十四歲の時に父が事に坐して上總に竄せられたので、彼もそれに隨つてゆき、謫居十年、師友といふものもなくたゞ大學諺解一本を得て熱心に之を研究し、遂に講說に籍らず遍くこれに通ずることを得たといふ。後柳澤吉保に仕へて重く用ひられた。その學問は甚だ博くて、經濟・兵學・雅樂・法律等にも深く通じてゐた。

南留別志は五卷あり、文字・音訓・事物の名義等についての考說解釋で、史學に關するものが多い。末を「……なるべし。」といふやうに結んだ所が多いので、書名としたのである。序文によればもとは六卷あつた由で、

書舊六卷、其一卷門人持去、爲火所燒、爲可惜矣。

とある。序文は寶曆十一年の日附で、徂徠の門人で本書の校訂者である宇佐美惠といふ人の文である。

南留別志はもともと隨筆であるから、國語に關する意見といつても纏つたものではなく、所々に散在してゐるのである。今その二三を拾つてみるならば、

くには郡なり、きみは君なり、みなみは南なり、にしは西なり、みとにとは發聲なり。（卷一）

梅をうめ、馬をうまといふ、皆音なり。うは發聲なり。日本紀の内に梅をめのかな、馬をまのかなに用ゐたるも此いはれなり。（卷二）

ふたつはひとつの音の轉ぜるなり。むつはみつの轉ぜるなり。やつはよつの轉ぜるなり。いつつ・ななつはいづれ・なにといふ事なり。ここのつは、こゝら・ここだくのここなるべし。（卷二）

ひるこに蛭をかき、ひるめに日をかけるは、本義にはあらざるなり。ふたはしらながらひるといひて、子とめとにて男女をわけたるまでなれば、元來は義おなじかるべし。（卷四）

熊襲えぞ木曾、そは夷のことなるべし。紀の國は木の國なり、木曾も木の國も材木の出る所なり。えびす・えみし・えぞ、一語の轉ぜるなるべし。（卷二）

阿蘇は熊襲なるべし。肥後國球磨郡は其舊墟なるべし。陸奥はみちのおくなるに、後には又陸の字につきてむつの國ともいふ。文字につきて名の轉ぜるも常の事なり。（卷一）

つは月の形なり、へは部の略字なり。（卷一）

そ字は[illegible]の半體なるべし。（卷二）

り字を[illegible]字なりといふは心得がたし。[illegible]字の半體なるべし。世の人片假名のみを半體と思へり。ひらかなにもあるべきなり。かなといふ物をつくりしはじめを尋ぬるに、眞字を略してかきたるよりおのづからに出來れるなり。たゞ今世の抄物かきとてかける心なるべきを、昔の人のかなといふ物をつくらんとてたくみてつくれるやうに思ふは、事の心にいたらぬなるべし。（卷二）

古の詞は多く田舍に殘れり。都會の地には時代のはやり詞といふ物ひた物に出來て、ふるきはみなかはりゆくに、田舍人はかたくなにてむかしをあらためぬなり。此比は田舍人も都に來りて時の詞を習ひつつゆきて、田舍の詞もよきにかはりたりといふは、あしきにかはりたるなるべし。（卷一）

「譯文筌蹄」も語學關係のもので、竹里先生補譯とある後編三册と合せて九册ある。初編の卷首に徂徠の自序があつて、

是編予二十五六時所二口說一、僧天敎及吉臣哉筆受成レ帙。　とある。筆受者臣哉の凡例は寶永八年である。この書は、

○閑・靜・靖・恬・寂・寞・寥・閼・奇・徐・謐

○動・搖・撼・蕩

○躁・噪・譟・騷

等の文字について、漢語としての意義・差別・用法等をのべたもので、例へば、

「靜」ハ、シヅカナリト訓ズ、動字ノ反對ナリ。サレバ靜カナリトハ動カヌコトナリ。シヅカトイフ倭語ヲ以テ解セバ誤アルベシ。又躁字ノ反對ニモナルナリ。ソノ時ハサハガシカラヌコトナリ。聲容靜トイヒ、爲人（ヒトトナリ）沈靜トイヒ退靜トイヘル類、皆サハガシカラヌナリ。又白日靜トイヒ晚色靜トイヘバ、景氣ノモノシヅカナルナリ。俗語ニサビシキコトヲ冷靜トイフ。又奢靜トイフハ靜坐・坐禪ナドノ修業ヲイフ。（下略）

といふやうな調子で說かれてゐる。

徂徠の門に於ける二派は、詩文に於て服部南郭、經學に於て太宰春臺といはれる。春臺は名を純といひ信州飯田の人である。延享四年(二四〇七)に六十八歳で歿したのであるが、著述の多い中に和讀要領といふのは、國語學に關係をもつてゐる。これは三册あつて、漢籍を和讀する方法について論じたものであるが、

凡中華ノ書ヲ讀ムハ、中華ノ音ヲ以テ上ヨリ順下ニ讀テ、其義ヲ得ルヲ善トスレドモ、吾國ノ人ニシテ華音ノ讀ヲ習フコト容易ナラネバ、已(ヤム)コトヲ得ズシテ倭語ノ讀ヲナスナリ。然レバ文義ヲダニ失ハズバ、其讀法ハ人々ノ心ニ任スベシ、何ゾ必シモ門戸ヲ立テ一家ノ法ヲ定ンヤ。只要領ヲ得テ其規矩ニ循(シタガ)ハバ、類ニ觸テ自然ニ活法ヲ悟ルベシ。(上卷、倭讀ノ總說)

といふ意見でこの書を著したのである。

さてこの書の上卷は、倭讀ノ總說第一、日本ニ無ニ文字一說第二、中國ノ文字始行ニ于此方一說第三、倭音ノ說第四、倭語ノ說第五、顚倒ノ讀害ニ文義一說第六、倭音正誤第七、の七つの題目について說かれてゐるのであるが、日本無文字說はその題目の示す通り、上古に日本固有の文字といふものがなかつたといふ說で、古語拾遺の序、大江匡房の筥崎宮記、三善清行の昌泰四年の勘文等を引いて證とし、貝原益軒も同說であることをのべて、

損軒ハ吾國ノ記載ニ博覽ナリシ人ナレバ、其說尤信ズベシ、巫祝ノ徒往々吾國ニ文字アリシコトヲイフハ、皆孟浪ノ談ナリ。

といつてゐる。そして次の中國文字始行于此方說に於て、應神天皇の十六年に王仁が論語千字文を献じてから、支那の文字が我國に行はれたのであるが、王仁はこの時何國の音を傳へたか、如何なる讀法を傳へたかは不明であるが、現在我國に傳つてゐる字音が支那音でないことを考へると、百濟の音で百濟の讀法を傳へたものであらうと推定してゐる。次に倭語說に於ては、

倭語トハ日本ノ人ノ言語ナリ、倭語ニ五種アリ、一ツニハ天地自然ノ倭語、生民以來應神天皇ノ世マデ、文字ナカリシ時ノ吾國ノ人ノ言語ナリ。是眞ノ倭語ナリ、今何レノ言(コトバ)カ其遺(ノコリ)ゾトイフコトヲ知ラズ。二ツニハ異國ト往來ヲ通ジテヨリ後ノ倭語、吾國ニアラユル事物、多クハ異國ヨリ傳來レル者ナレバ、是事(コノ)是物(コノ)アリテ後ニ、各其名ヲツケタルナリ。三ツニハ文字アリテヨリ後ノ倭語、中國ノ文字行ハルルニ及ンデ、文字ヲ讀ムニツキテ、此方ニ無キ事物ナレドモ、他ノ事物ニ准ジテ倭訓ヲ施セルナリ。羊ヲヒツジト訓ジ、豹ヲナカツカミト訓ジ、象ヲキサト訓ジ、棠棣ヲカラナシト訓ズル類ナリ。四ツニハ華音ヨリ來レル倭語、中華ノ人ノ言語ヲソノママニ受用ヒタルナリ。火ヲホト訓ジ馬(ウマ)ヲムマト訓ジ、君ヲキミト訓ジ、蟬ヲセミト訓ジ、梅ヲムメト訓ズル類、本皆華音ナリ。火ヲヒトイフハホヨリ轉ジタルナリ。五ツニハ三韓ノ語ヨリ來レル倭語、上世ハ三韓ト頻々ニ往來ヲ通ゼシ故ニ、三韓ノ人ノ言語ヲソノママニ倭語トナシタルナリ。虎ヲトラト訓ズルハ高麗ノ語ナリト或人イヘリ。此類猶多カルベシ。(下略)

といふ說がある。次に顚倒讀害文義說では、支那の書を顚倒して讀むことはいつ頃から起つたかわからぬ。王仁の頃はまだなかつたであらう。なぜなら當時は倭語の數も少く、且つ王仁が倭語に通ずることも困難だから、只異國の音で異國の讀を傳へたに過ぎないであらうといつて、

其後中華ノ書多ク傳ハリ、文字ノ敎弘マリテ、物ノ名モ定マリ言語ノ數モ多クナリテ、中華ノ文學民間マデニ行

ハル。是ニヨリテ學士大夫書ヲ讀ム者、中華ノ字ヲ翻ジテ倭語トナシテコレヲ讀ム。倭語ヲ以テ中華ノ書ヲ讀ムニ、其文ヲ顚倒セザレバ其義通ゼザル故ニ、遂ニ顚倒ノ讀トナレリ。是何レノ時何人ノ創ケルトイフコトヲ詳ニセズ。世ニ傳テ吉備公ヨリ始レリトイフ。吉備公片假名ヲ造レルモ倭語ヲ書スルニ便ナラシメン爲ナレバ、倭語ノ讀ヲ創ケルトイフコト、誠ニサモアルベシ。既ニ倭語ヲ以テ中華ノ書ヲ讀メバ、異國ノ事ヲ見ルコト吾國ノ事ヲ視ル如クニテ、此方ノ人ニ甚便ナル故ニ、海內ノ人專是ヲ學テ古ノ讀法ヲ尋求ル者モ無ケレバ、吉備公ノ前ニハ如何ナル讀法ナリシトイフコトダニ傳ハラズ。中華ノ文字徒ニ侏儒鳥言ノ用トナリテ、文章ノ道是ヨリ差(タガ)ヘリ。吉備公ノ功ハ其罪ヲ掩ヒガタカラン。

といひ、顚倒のよみが文義を害ふことを例をあげて論じてゐる。

神道家跡部良顯には和字傳來考の著がある。この人は江戸の人で、幕府旗下の士である。父母共に教育があつたので、その訓陶によつて早くから講學の道に入つた。後澁川都翁といふ人の門に入つて神道學をまなび、又淺見安正・三宅重固等について漢學を修めた。著書が少くないが多くは神道に關するものである。かつて皇統の正閏を論じて南朝を以て正統とすべしとし、神皇正統記は卓見稱すべきではあるが、專ら南朝の衰微を慷慨して足利氏の凶暴を惡むに過ぎないからといつて、南朝編年錄といふ書を著したこともある。享保十四年(一三八九)に七十一歲でなくなり、大正四年十一月に從五位を贈られた。和字傳來考は享保九年の著で、神代文字の存在を主張したもの、一卷ある。その論の大體は、神代口訣に神代の文字は象形なりとあるのは慥かな正說である、これで思へば神代には天地日月風雲萬物の形を繪のやうに書いたものと見える。又、澁川春海翁から自分が傳授をうけた神代文字で十二支の名を書いたものであるが、これは象形ではないので、これで見ると神代に於て既に字形が變化したものと見える。そしてこの字は吉備公の片假名に似てゐるので見ると、片假名は恐らくこの文字から脫化したものであらう。文字の起源は、大己貴命が沙上の千鳥の足跡を見て造られたといふのが古傳說であるが、それ以前に素盞嗚尊が千鳥の足跡を見て造られ、八雲たつの歌などを書きつけておかれたものであらう。などゝいふやうなことで、最後に結論として、

儒道佛道傳來して世に蔓りしより、神道は衰へ文字もなき夷國の樣に世人いひ罵るは可憂ことにして、我邦に生まれし忠孝の大義に志あるものは可悲きことなり。

と慷慨してゐる。

京都の歌人有賀長伯は號を以敬齋といつて、平間長雅といふ人に學んだ。一家をなしては大阪に住み、專ら名所を探つて古歌に徵し、歌枕秋の寢覺の著がある。また和歌八重垣、和歌麓の塵等の著があつて、歌學者に便益を與へた。和歌八重垣は七册、元祿十三年(一三八〇)の序があつて、和歌の道には世代の先達の詠格法式をさだめ、讀方を敎へられた書は多いが、初學に便利なものがないことをのべて、

今あらたに和歌藝古のはじめより五句の次第・會席の作法・禁制用捨病の沙汰題のよみかたてにをは等にいたるまで、ことゞく是をしるし、又もろ〳〵の詞を部類して註釋をくはふ。猶物語等の言葉はかずおほかれど、和歌に詠じなれぬことの葉はのすることなし。たゞあまぬく用ひきたれる艶言をのみするゑつむ花のつみはやして、

全部七册なづけて和歌八重垣といふことしかり。

といつてゐるので、内容は大體推察されるであらう。はじめの三册が一般的の注意で、後の四册が和歌の詞部類幷註釋讀方で、詞はいろは順に集めてある。

いろことに　色異也。○讀方、二樣に用ゆべし。色ことにしてと云は色の各別なる心に用ゆべし。色ことになるといふは色のかはり變ずる心に用ひたり。又色ごとにと濁りて讀は色毎也。色々の心に用ゆべし。

いろのちぐさ　ちぐさは千種とかけり。○讀方、いろいろかずおほきこゝろに用ゆべし。紅葉草花菊なでしこに讀(ヨメ)り。其外なににても色々かずおほきことに用べし、草木にかぎらぬ詞也。

いろごろも　色にそめたる衣也。子細なし。

いろ〳〵衣　色々つぎ合せたる衣也。○讀方、しづ山がつのいやしき衣に詠べし。宮人の袖つぎ衣はけつかうなる衣也。夫木「しづのめが薪こりにと朝起ていろ〳〵衣袖まくりしつ。

といふ調子でといつてゐる。讀方といふ意味もこゝに引いた例でわかることゝ思ふ。

さてこの二册目に「てにをはの事」といふ項があつて、てにをはについての研究をのせてゐることは、前講に於てもべた(一五九頁―一六一頁)今その目錄だけあげるなら

○や　十五ヶ條　○そ　六ヶ條
○こそ　二ヶ條　○ぬ　三ヶ條
○か　五ヶ條　○かは　二ヶ條
○を　三ヶ條　○とは
○し　四ヶ條　○かゞ
○なを　二ヶ條　○哉　四ヶ條
○らん　三ヶ條　○て　三ヶ條
○つゝ　○かへりてにをは
○だに　二ヶ條　○さへ　二ヶ條
○やすめてにをは　○おなしてにをは
○ちがひてにをは　○いひかけてにをは

である。右のうち、哉、らん、て、つゝ、かへりてにをはの四つは、前に「歌のとまりの事」といふ項があつて、哉どめ、らんどめ、てどまり、つゝどめ、終の句より上へ心のかへる詠格などして說いてゐるのに讓つてある。又いひかけてにをはといふのは、

是は秀句にはあらで上より秀句のやうにいひかけたる也。

といつて、その例に、

あひみまくほし(古今)は數なくありながら人につきなみまどひこそすれ
きみにより我みぞつらき玉だれのみずは戀しと思はましやは(後撰)
かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思を(後拾)

新勅
かりにのみくる君まつとふり出て鳴しか山は秋ぞかなしき

といふ歌があげてある。後撰の例はまあとにかくとして、其他の例になると、テニヲハといふものにどの範圍までを含めてゐるのかと疑はれる。

次にこのテニヲハの說は前講にものべたやうに、末に、

　右てにをはの條々いづれもわたくしの今案にあらず。古來のをきてをもとゝして其上に古歌の證例をあげ早。

とあつて、長伯の自說ではないので、姉小路式から出たものであらうと考へられる。長伯には細川幽齋から烏丸光廣に傳へたといふテニヲハの書「春樹顯秘抄」を增補した「春樹顯秘增抄」といふのもあるのである。

長伯は元文二年(一三九七)六月に年七十七歲でなくなつた。

寬延三年(一四一〇)九月に五十三歲でなくなつた多田義俊は、伊呂波聲母傳の著者である。義俊は難波に生れた人で、兵部などゝも稱し、南嶺などゝ號した。壺井義知(號鶴翁)について古典の學を修め、博覽多識を以て有名であつた。かつて舊事紀僞撰考一卷を著はして、今ある舊事紀が杜撰であつて古書ではないことを論證し、師鶴翁がその著書に舊事紀を證として引いてゐることを難じ、それは取るに足らぬものである由を告白した書を著はすことを鶴翁に勸めた。義俊の說は卓說ではあつたが、鶴翁はそれを穿鑿するよりも、義俊の傲慢無禮を責めたので、遂に師弟間に隙を生じたといふ。然し伊勢貞丈(正德五年―天明四年一四四四。故實家)によれば、義俊もまた博覽ではあるが僞を好む癖があつて、その著述には疑はしい引用書が多いといふことである(安齋隨筆)。その著伊呂波聲母傳の奧書には、

　右以呂波聲母傳者、官家芝山宰相廣豐卿極秘之口傳也、日本古今之記錄以是考合、爲初學之定所也、甚雖爲秘事、因門人小林氏强請、不能固辭筆授之、漫不許他見矣

于時　延享三年九月下旬　　多田兵部源義俊

とあるが、これとほゞ同じ說をのべた同人著の日本聲母傳の末には、

　右聲母傳受ハ、三坂友之進勝有ト云人アラマシヲ疊ヘ至秘セシ事ヲ、有馬ノ人坂口幸因老人ニ傳リ、其卷幸因老人ヨリ桂秀樹傳ハリタレドモ、アラマシハ知レテ不委、畢竟一座ノ口傳ノ如キ書也。

とあつて、國語學書目解題には、

　こゝに三坂友之進、幸因老人とあるは、共に何なる人か詳にせず、桂秀樹は即ち多田氏のことなり。

と說明がある。かうして伊呂波聲母傳と日本聲母傳と、その由來が異つてゐるのは何故であらうか。或はこれらの由來は全然こしらへ事で、自說に勿體をつけるためにしたものでもあらうか。或は別な理由があるのであらうか。何とも知られないが、とにかく奧書のまゝに信用することを躊躇したければならぬことは考へられる。

伊呂波聲母傳はいろはの各字に特種の音義のあることを認め、この音義の上から語源を解釋しようとしたものである。例へば、いは詞の上にある時には、總て息にかゝる意味をもつてゐる。いのち、いきる、いそぐの如くで、いそぐは息を數多くつく心持から出た言葉である。には朝日の出はじめの色をいふので、ひいて新しいことをにいなどゝいふ。それをかりてにはかといふ語があり、なほ轉じてにえかへるといふ。らりるれろの五音は詞の助であつて、詞の母となることはない。その中で區別していへば、らはゆら〳〵した詞、りは決する詞、れは捨てた詞である。とい

ふやうな說である。

この書は初めに片假名平假名の起源についてのべ、また伊呂波の効用をのべて、これを知つてゐれば自然にテニヲハを知り和歌もよまれるやうになるといつてゐる。片假名平假名の起源についての說は前講文字の章に引いた所を參照していたゞきたい。（一一八頁。一三八頁。）

磨光韻鏡を著して韻鏡研究に一期を劃した僧文雄は、京都了蓮寺の住職で、俗姓は中西、丹波の生れで、名は無相、字は豁然といつた。前にのべた和讀要領の著者太宰春臺と親交あり、春臺について支那語を學んだといふ。韻鏡の研究を始めた動機も春臺との交りにあるらしい。磨光韻鏡に春臺が序をよせて、近世の韻鏡研究者は支那音を學ばないでやるから、まるで耒耜なくして耕すやうなものである。韻鏡研究にはまづ須らく支那音を學ぶべきで、その後にこそ四聲も明かに、七音も辨へ、內外開合凡百の呼法もすべて分別することが出來るのである。今の韻鏡研究者はたゞ反切の法を知つてその所以を知らないのであるから、どうして韻鏡の韻鏡たる所以を知らうかといつて、次に著者文雄を紹介し、

唯吾所善文雄師則不レ然。雄師者平安人也。少游二學於關東一嘗從レ予問二文字一。予時有二以告レ之。師好二華音一又好二韻學一。西歸之後潛二心於韻學一十有餘年。自言如レ有レ得焉。乃恨下先輩治二韻鏡一者皆有レ所レ未レ盡、且不レ知二韻鏡之用一、遂有レ所二發明一而著二書數編一。

といつてゐる。

磨光韻鏡は二卷、上は圖、下は韻鏡索隱と翻切門法とである。延享元年（一七四〇四）の刊行で、磨光と名づけたことについては、索隱の初めの方に、

本邦輓近諸家競爲レ疏。要偕張氏之奴隸也耳。流弊遂至レ反二切名諱一。謬妄不レ可レ言也。孰知二韻鏡明明一者。於乎、明鏡被二塵翳一者殆乎千載。雄之此舉欲二一除二塵翳一。故以二磨光一題云。

（註。爲疏……韻鏡の註釋をつくる。

張氏之奴隸……一に張麟之に從つて韻鏡を反切の圖としてのみ見たことをいふ。

と、自ら說明してゐる。さて本邦における韻鏡、文雄以前の研究、磨光韻鏡の批評等は、大略ながら前講音韻の章にのべたところに讓つて、こゝには省略することにする。（六二頁―六五頁）なほ文雄以後に於ては、太田全齋の漢吳音圖等の研究があり、韻學入門書として文雄の弟子近藤子業の書いたものを三浦茂樹が整理して出した韻學楷梯などがあることも前講にのべた所である。

文雄にはまた三音正僞といふ音韻についての研究がある。この書は寶曆二年（一七四二）の出板で、上下二卷一册、吳音漢音唐音の三音についてのべたもので、上卷は總說、下卷は韻鏡の順で文字を出し一々その音を正したものである。吳音が我邦にまづ傳はつたので、我邦の讀書の舊音はこれである、且つ古書の假名は吳音によつてゐる。何故吳音がまづ傳はつたかについては、我邦が吳の國に近いからだらうとの說があるが、その說が宜しい。漢音は桓武天皇の朝がはじめで、延曆年間は遣唐使の往來が頻繁であつたから、漢音が傳はつたのであうといふやうな意見が見えてゐる。

また和字大觀抄といふ著書がある。上下二册、寶曆三年(一七五三)に成り、翌年刊行された。上卷は、片假名及びその本字、五十音圖、假名反切、五十音竪横の相通、いろはの作者及びその文意、いろはの本字、平假名の類字等をとき、下卷は主に假名遣についてのべてゐる。それも契沖の新假名遣ではなくて、端のい、中のゐ、奥のひといふやうな名前で從來の假名遣をのべたのである。その附錄に假名合字といつて、前講四三頁にあげたやうな一種獨特の假名の綴字法を案出して、それによつて古今和歌集の序を書いて見せてゐる。上卷の最初に「かなづかひ大意」といふ章があつて、

かなづかひのやうをしらんとおもはゞ、片假字の五十といろはの四十七字の理を、よく〳〵わきまへしるべし。五十字は竪の十行相通じ、横の五行相通ず。おの〳〵其音かよふ事をしらしめて作れり。いろはの四十七字は、はひふへほの文字、わゐうゑおに通ふ事ありて、そのつかひやう科わかれたるを、大やうしらしめたるものにて、爰にこゝろをとゞむれば、かなづかひの法あることを知るなり。

といつてゐる。和字大觀抄二册は要するにこの事を明にする爲に書かれたやうなものである。その五十音の竪横の相通は、例へば「かきくけこ相通」では、かふ買　かふる更　かふ飼　等の、「か」を「こ」の音によむのは、かこの相通であり、無キ　泣キク　説キク　等はきくの相通であるといひ、「あいうえをやいゆえよの相通」では

であひ出合　でやひ、　にあふ似合　にやふ、　たふる任　たゆる(うゆ相通)、

等を示してゐる。なほ片假名の製作については吉備公整理説をのべ(前講一三九頁)、いろはについては頓阿の高野日記(前講一一五頁に引く)によつて弘法作としてゐる。要するにこの書は、韻鏡に於ける磨光韻鏡の如き、注意すべき研究であるとはいへないやうである。

文雄は寶曆十三年(一七六三)九月に六十四歳を以てなくなつた。

國學の四大人の一人、賀茂眞淵は、元祿十年(一六九七)に遠江國敷智郡伊場村に生れた。その家系の大體は、眞淵の死後その屍をゝさめた東京市外品川の東海寺なる少林院にある、門人加藤千蔭のかいた碑銘に次の如く記してある。

縣居于志、名者眞淵、氏者賀茂縣主、遠津祖者、山城國愛宕郡賀茂大神乃美也都古、賀茂成助縣主也、成助乃裔、片岡能祝奈理之、師重乃女、内爾仕奉而、筑前局登云之爾、遠江國敷智郡濱松鄕岡部乎賜利之乎、彼岡部爾齋比末都禮留、新宮乃神戸登奈之、永新宮乎伊都伎奉留倍伎與之、文永乃十末里一年、彼命婦乃弟師朝爾美許等能理有之與利、則其新宮乃祝登成而、代代乎經而、政定登云之波、引馬能原迺御軍爾從奉、伊左袁志伎業有豆、御佩乃太刀乎賜利奴、于志者、其政定與里五繼乃孫、定信登云留我眞子爾豆曾於波之計留。

族稱は岡部、字は初め參四といひ、後に衛士と改めた。縣居と號し、眞淵といふのは諱である。これも千蔭の書いた賀茂翁家集の序に、

眞淵と云へる御名は敷智の郡の名より思ひ寄りて著き給へりとぞ。縣居とは庭を田居の樣に作りて、賀茂氏の姓にも由あればとて、自ら家の名に負せられたるなりけり。

といつてゐる。眞淵は二男で、はじめ濱松驛の本陣梅谷甚三郎の婿養子となつたが、讀書を好んで養父との間が思はしくなかつたので、

しくなかつたので、妻の勸めのまゝに家を出て京都にのぼり、荷田春滿（アツママロ）の門に入つて國學を研究した。京都へ出たのは享保十八年三十七歳の時であつた。荷田春滿は姓は羽倉といひ、春滿はまた東麿とも書く。代々京都伏見の稲荷山の祠官である。幼より學を好み、別に師事する所もなくて自得發明する所極めて多く、博く國史律令古文古歌等に通じてをつた。

ふみ分けよ倭にはあらぬから鳥の跡を見るのみ人の道かは

といふ歌は世に名高い。古道を説くといふ態度に出た所謂國學は春滿から始まるといはれる。晩年伏見に國學校を創立しようとして、幕府に建議し聽されて地をトするまでになつたが、病歿して果されなかつたのは遺憾であつた。歿したのは元文元年（一三九六）六十九歳の時で、眞淵が入門したのは享保十八年（一三九三）であるから、其間四年に過ぎないが、眞淵は遂に春滿の學びの筋を傳へたのであつた。

さて眞淵は元文二年に一旦歸鄕、翌年江戸に出て諸生に教授した。この頃から養家梅谷の稱をとゞめてもとの同部を稱したが、離緣した譯ではない。後、延享三年五十歳の時田安宗武に仕へ、寳暦十年六十四歳で致仕、明和元年六十八歳の時濱松にかへり、明和六年（一四二九）七十三歳でなくなるまで濱松にをつた。

著書は數多い中に、萬葉考、冠辭考、祝詞考、源氏物語新釋等は註釋の主なものである。萬葉集大考の中に、

こゝに古き世の哥ちふものこそ、ふるきよゝの人の心詞なれ。此うた古事記日本紀らに二百ばかり、萬葉集に四千餘の數なむあるを、言はみやびにたる古言、心は直き一つ心のみになんありける。かれ先づ此よろづの言の葉に交りて年月をわたり、おのがよみづる言の葉も心も、かの中にも宜しきに似まくほりつゝ、顯身（ウツソミ）の世の暇ある時は、且つ見且つよみつゝ、此の中に遊ばひをる程に、古の心詞のおのづから我心にそみ口にもいひならひぬめり。いでや千五百代（チイホヨ）にも變らぬ天地にはらまれ生ふる人、古の事とても心言葉の外やはある。しか古をおのが心詞にならはし得たらんとき、身こそ後の世にあれ、心詞は上つ代にかへらざらめや。世の中に生きとし生けるもの、心も聲もすべて古今ちふことの無きを、人こそならはしにつけさかしらによりて、異さまになれる物なれば、たちかへらんこゝ何か難からむ。かくしつゝかの二書にあなる哥をもよく見よく解きて後、立ちかへり君が御代々々の書の八十隈もおちず、神の御代の事をもさかのぼらひ見とほらふには、おのれしやがて其世々にありて見聞なしてん。（中略）こを思ふにすめらみ國の上つ代の事を知りとほらふ業は、古き世の歌を知るゆ先なる物はなかりけり。

と言つてゐる。眞淵の學問の態度はこれでやゝ推量することが出來よう。祝詞考の附言にも、

古事記も日本紀も、神代の事はあやにいひつちねたる古言にて、傳れるめり。故みやびかなる詞をみづから得てこそよくは解つべけれ。よりてまづこのゝりとごとをとき知て、我もなずらへ書て、文ちふものゝさまを知り、萬葉の哥を解得て、かつみづからもそれにならへる哥をよみ、いにしへ人の詞のみやびたる事をしり、同じくなほきこゝろ、直き代の手ぶりを知る時ぞ、神代をもおしはかりたらむ。

と言つてゐる。眞淵の萬葉集研究は畢生の事業であつた。然しそれはこれらの文でも知られる通り、一の方便であつて、眞の目的は他にあつた。即ち古語を明にして古事記にいたり、神代の精神を見極めようといふのであつた。賀茂翁家集の序に加藤千蔭が、

あまた年夜書と無く古言をのみ心に染めて、家居より調度に至るまで古に據りて、いさゝめにも後の世の事を耳に觸れ心に留め給はざりし、

といつてゐるが、そのいかに上代にあこがれてゐたかを推量すべきである。

眞淵は門人は頗る多く、三百餘人といふ。その中に、本居宣長、荒木田久老、楫取魚彦、加藤千蔭、村田春海、等のすぐれた學者が出て、國學の隆盛を來した。

さて眞淵の語學上の意見を窺ふべきは、語意考である。明和六年(一七六九)の自序があるが、出來たのはもつと前らしい。

「寶曆のとゝせかみな月に、賀茂眞淵がしるしぬ」とある萬葉集大考に、

古き言は五十の音をよくしらでは解べきよしなし。仍ておのれ語意ちふ物しるして別にあり。故こゝには一わたり言をときつ。

とある語意ちふ物は、語意考のことゝ考へられる。寶曆十年は二四二〇年であるから、約十年前にあたる。その以前いつ頃から出來てゐたかは不明である。

語意考の說は前講でも、音韻については二〇〇頁以下に紹介した。初めに總論がある。その大要は、

一、日本は五十聯(イラヅラ)の音(コエ)のまゝに言を成して、萬事口づからいひ傳へる國である。それは人の心が直であるから事も少く、從つて言も少くてそれで足りるのである。この五十聯の音は天竺にならつたものだといふのはおろかである。ずつと上代からあるので、言葉の分ちはこの五十聯の音の横の音にある。即ち、

(一)言初(オホ)むる音、(二)言動かぬ音、(三)言動く音、(四)言令(オホ)する音、(五)言助くる音である。この別を知つて言葉は明かなるを得る。これは我國の天地の神の敎へ給うたことで、日本特有である。であるから五十聯の音を集成したのも中世の事ではなくて、神代に於て示されたことなのである。

二、支那印度は音を主とするのであるが、日本は音は次で言が主である。で漢字を借りて物を記すやうになつても、音によつて文字をかへることはない。古事記に宇比地邇上神、次妹須比地邇去神とあつて、上聲去聲の注はあるが、文字はかへてない。加茂は平聲、山(ヤマ)も平聲であるが、加茂山とつゞけると去聲になる。けれどもその爲に文字をかへることはない。であるから假名遣を音によつて說くのは誤である。

三、畿內の音は正しく地方の音はちがふけれど、言さへ違はなければ意味は通じるのである。音は正しいに越したことはないが、かういふ譯であるから、えよく言はぬ地方人を、音などにつけて卑むべきではない。但し五十聯の音の中の袁(ヲ)と於(オ)、衣(エ)と惠(エ)等は似た音ではあるが、音が違ふのであつて、斯くあらなくては我國の言を成さぬ故に並べ載せてあるのである。

四　日本は言葉の國であるとしても、文字を借りなくては久しく傳へ遠くに傳へるに困るだらうといふのは、川下の濁つた水になれて、水上のすんでゐるのを謗るやうなものである。我が上代人は心直く、事も言も從つて少いので、いふ言に惑ひがなく聞いて忘れる事がない。從つて遠くにも久しくも傳へられる譯である。然るに異國との交りから、異國の風を愛でゝ文字を用ひはじめたのであるが、それは甚だしい費えであつた。

以上は總論の大要である。次に五十音圖をあげてその竪横について說き、通ふ音のこと、初・體・用・令・助といふ分ちのこと(前講二〇〇頁以下參照)、延言・約言・略言のこと、むつき・きさらぎといふやうな月の異名の語源、淸濁を通はせていふ例等について述べ、最後に音便について一寸のべてゐる。延言約言については、

後世(ノチノヨ)には唐國に反と云ふに由りて、カヘシと云へど、我國には二言(フタコト)を約めて一言とし、一言を延べて二言に云ふ事あれば、カヘシとのみ云ひては足らはざるなり。

といつて、分り易い爲にと、約言から說いてゐる。

淡海(アフミノ)國は、もと阿波宇美(アハウミ)てふ名なるを、其の波宇(ハウ)を約むれば布と成る故に、假字は阿布美(アフミ)と書くなり。是れをアウミの如く唱ふるは言便なり。

これらはもつともな所であるが、極端にこの說を用ゐては、書はそのまゝにを約めて轉じて書はしみらにといひ、釣針(ツリバリ)を約めてチといふなどの例がある(前講七〇頁參照)。延言は約言の逆であつて、

右の約言は、其の言長くして云ひ續け難き時に約め云ひ、此の延言は言短くして其言次(ツ)いでの惡ろき時延べて云ふなるを(下略)

といつて、例には

見ルスクナキのルを延べて見良久(ラク)少ナキと云ひ、戀フル多キのルを延べてコフ良久(ラク)ノ多キト云ヘリ。(これは良久(ラク)の約め留(ル)なると表裏(ウラウラ)なり。)アハムホシキのムを延べて阿波萬久(アハマク)ホシキと云ふ。(萬久(マク)の約武(ム)なり。)此外、花チルを花チラフ、ウツルをウツロフなど云ふ類ひ、皆延べ言葉なり。

二度延べたるあり。萬葉一に家告閇(イヘノラヘ)と有るは、家を乃禮(ノレ)の禮(レ)を延べて良閇(ラヘ)と宣ひしにて、右の類ひなり。名告佐(ナノラサ)根(ネ)と有るは、先づナノ禮(レ)と云ふ禮(レ)を延べて良世(ラセ)と成るを、其世(セ)を又延べて佐根(サネ)と訓みませり。是れを約言もて約むる時は、奈乃良佐禰(ナノラサネ)の佐禰(サネ)の約は世(セ)なり。其世に上の良(ラ)を合せて、良世(ラセ)を約むれば禮(レ)と成りて、名ノレてふ言なり。此をもて延言、約言のある事を知るべし。

などがある。現在ではこれらは延べたのでなく、添加したものであると解するのである。

語意考は眞淵の晩年に出來たもので、考へ改めなければならぬことをそのまゝにしてあるので、そこには思ひあやまりも多く、世に弘むべきものではないと、村田春海はいつてゐる(前講七四頁參照)。とにかく完全に整つたものとはいはれないやうであるが、初・體・用・令・助の說などは後の學者の研究に暗示を考へてゐる點で注意されねばならぬ。

語意考に見える初・體・用・令・助の說と似て、動詞の活用を五十音圖に配當して示した人がも一人ある。即ち谷川士淸(コトスガ)で、その說は日本書紀通證の卷一の附錄の中にある。この書は例言の終に延享戊辰三月と日附がある。即ち延享五年(二四〇八)であつて、語意考の序の明和六年(二四二九)よりは前ではあるけれども、前述の如く語意考の出來たのが何時頃であるか〻明かでないので、何れが前であるか、互に關係のあるものか否か等については疑問のまゝ殘されてゐるのである。(その說及び語意考の說との差異等については、前講一九八頁以下に述べた所に讓る。)

士淸は伊勢の人である。祖先は長曾我部氏に仕へてゐたが、大阪の陣に敗れて伊勢にをり、世々醫を業としてゐ

た。士清は名は昇、號は淡齋、士清はその字である。二十四歳の時京都に出て、玉木葦齋といふ人に山崎闇齋派の神道を學び、後、有栖川職仁親王にお事へして和歌を修めた。和漢の諸書を渉獵し、博覽多識を以て稱せられてゐる。著書では日本書紀通證三十五卷と辭書の和訓栞とが有名である。安永五年(一七四三六)十月十日に年七十歳で歿した。

和訓栞は九十三卷、本居宣長の序をつけて、前編の首卷と一卷から十三卷までとの十四册が、安永六年九月に、江戸の須原屋茂兵衛の手で發行されてから、明治十六年に、後編の十八卷が、岐阜の三浦源助に刊行されるまで、數回に分けて異る人に刊行された。この書は五十音順に言葉を集めた辭書で、前中後の各編が、アより始めてオに終つてゐる。前編の終に、

此書、士清大人あらはしたまふ處にして、五十音を阿行より佐行まで刊行しおかれしを、士逸大人、父翁の遺稿を本とし、翁の學の友季鷹縣主諸共にかうがへ正して、さきに多行より波行までを刊行したまひき。こたび其校正しおかれしを刊行して前編に終る。しかはあれど、言語浩繁なれば、此書に洩しは中編後編つぎ〳〵刊行するをまちて合せ見給ふべし。近頃「を」「お」のつらねかたにたがへるよし、本居宣長大人考出られしかど、此書もはら先人遺稿のまゝを刊行するをむねとすれば、本のまゝにつらねおきつ。

文政十一年五月　　孫　谷川士行　謹記

とある。

前編には古言雅言、中編には雅言、後編には方言俗語が主に集められてゐるやうで、ほゞ時代を逐うて下つたものと考へられる。明治三十一年に井上頴圀、小杉榲邨の兩氏によつて頭書增補の和訓栞(上中下三册)が出たが、これは本文は上中の二編を合せて五十音順に配列したものである。頭書者の凡例に次の如くある。

本文は上中の二篇をとり、五十音の順を逐うて配列せり。後篇はもとより伴氏の校訂なし。又他に版權なるものの持てる人ありて、こゝにもらせり。さりながら後篇は、上中二篇にたくらぶれば、紙數も五分の一にすぎず、その解のおもなるものは、地名草木鳥獸魚介の類にして、それらのものは、地理動植專門の各書に就きて、皆この上欄に收めたり。其他ことばの解も、此書に擧げたるは各辭書にもるゝものなく、猶かつくはしからざるものあることなし。

和訓栞は契沖の門人の海北若沖の著して、古事記、六國史、和名抄、萬葉集等二十數部の書にある和訓を伊呂波順に配列した、和訓類林(七卷、寳永二年(一七三六五)成る、寫本。)に範をとつて作つたといふ。この時代に出た辭書としてはすぐれたもので、後の石川雅望の雅言集覽と共に德川時代の二大辭書といはれる。その首卷には大綱として、音のこと、詞のこと、歌のこと、解釋のしかた、漢字と日本語との關係、古代の辭書のこと、漢字の用ひ方のこと、假名遣、方言、てにをは、五十音、かな反切など、語學に關する意見が雜然とならべてある。それらの意見は、一々斷つてはないけれど、契沖・白石・文雄・眞淵等の先人の說を拔萃したものゝやうで、著者自身の創見といふやうなものは、餘り見えないやうである。日本書紀通證の中にある五十音圖にあてた活用圖の說明さも見るべき說もこゝにあり、その一部は前講一九九頁以下に引いた所である。又假名反しについて、倒反といふことを說いてゐる。

假名反に倒反あり、神漏伎神呂美の如き是也。伎(キ)はひこの倒反、美(ミ)はひめの倒反とす。こひ反き、めひ反み也。

白石の東雅では倒反といふ名はつけてないが、かく見るべき反し方で語源を說いてゐる場合があることは、其條に例

をあげた通りである。

本居宣長の詞の玉の緒と相並んで、テニヲハ研究の大立物であるあゆひ抄の著者、富士谷成章は皆川淇園の弟で、富士谷は養家の姓である。通稱專右衛門、後に京都の北邊といふ地に住んで北邊とも號してゐた。幼年時代からすぐれてをつて、三歳にして書をよくし、七歳にして詩を賦すといふ具合で、神童と稱せられたさうである。富士谷家の養子となつたのは十九歳の時である。はじめは漢學をやつたが、後思ふ所あつて、國學に忠し、和歌をも修めた。國語に就ての研究も深くて、國語を名(ナ)(今の名詞)、裝(ヨソヒ)(動詞・形容詞)、挿頭(カザシ)(副詞・感歎詞・代名詞等)脚結(アユヒ)(テニヲハ)の四種に分けて研究するなど、すぐれた見識をもつてゐたのであるが、惜いかな安永八年(一二四三九)四十二歳といふ若さでなくなつてゐる。その著かざし抄、あゆひ抄はすぐれた書で、宣長も驚いてゐる程である。宣長の玉勝間に、

ちかきころ京に、藤谷ノ專右衛門成章といふ人有ける、それがつくれるかざし抄あゆひ抄六運圖略などいふゝみどもを見ておどろかれぬ。それよりさきにも、さる人有こはほの聞たりしかど、例の今やうのかいなでの哥よみならんと、みゝもたゝざりしを、此ふみどもを見てぞ、しれる人にあるやうとひしかば、此ちかきほどみまかりぬと聞て、又おどろかれぬ。そも〳〵此ごろのうたよみどもは、すこし人にもまさりてもちひらるゝばかりにもなれば、おのれひとり此道えたるかほして、心やりたかぶるめれど、よめる哥かける文いへる說などをきけば、ひがことのみ多く、みないとまだしきものにて、これはとおぼゆるはいとかたく、ましてぬけ出たるはたえてなきよに、この藤谷はさるたぐひにあらず、又ふるきすぢをとらへてみだりに高きことのみいふともがらはたよにおほかるを、さるたぐひにもあらず。萬葉よりあなたのことはいかゞあらむしらず、六運の辨にいへるおもむきを見るに、古今集よりこなたざまの歌のやうを、よく見しれることは、大かたちかき世にならぶ人あらじとぞおぼゆる。(八。藤谷ノ成章といひし人の事)

といつてゐる。

有賀長伯の和歌八重垣にあるテニヲハ研究は、從前の姉小路式を祖述したものである。それより前に出た撰者不明の一歩では、手爾葉違といふ題で、テニヲハのことを說いてゐる。從來のものが和歌を主としてゐるに對してこれは書中にも、

手爾葉違の事是にしるす文體は又常の詞等也。連歌のてにはちがひはそれ〴〵の句を書付侍らでは心得がたし。されぬ共てにをは秘傳の書に委侍る故しるさず。併ことはり聞えがたき所へは右秘傳のうち或は其句或は心ばかりを少々書加ふるもの也。(中略)但連歌俳諧のてにはちがひも過現未自他疑治定にもれたるはまれなるべし。此品々をもつて心うべき事にぞ侍る。

といつてゐる通り、普通の文または詞におけるテニヲハの誤り易いのを論じてゐる。

一、常の詞に、きのふさる人のいふは。

「是も過現の相違也。いふたはといはでかなはぬてにをは也。又云きのふ共むかし共いはずして、唯去人のいふはそれではないなど云も過現の相違なり。是もいふたはといふべし。さる人といふは過去の詞也、目の前にて物いふ人を、さる人とはいはれざるものなればなり。

一、或人茶椀をとりおとし打くだいて云、よいちやわんじやにおしい事じや。

「をろかに見侍らばてにをは相違有まじとおもふべき所也。よく〳〵吟味して心うべし。無事にあるちやわんをほむる時はよいちやわんじやといふ。くだけたるをおしみていふ時は、よいちやわんであつたにおしい事じやといはでかなはぬてにをは也。

一、昔のせうそこに、於御同心者本望也。

「於はと云は未來也、又落着せさる詞也。也は治定にて現在の留りなる故、てにをは違ひ侍る。御同心にをいては本望たるべし、本望たるべく候など〻書てよし。べしべくは治定にあらで、未來のてにをはなる故於に相應せり。

一、或書に云、文帝は文を好む、吾は武を好めり。

「このめりは他の詞なる故、自他の相違也。このむといふは自にも他にもなる詞なれ共、少しさげていふ詞と聞ゆ。このめりは少しあがめていふやうに聞ゆ。殊に他の詞なるにより文帝は文をこのめり、吾は武をこのむと書べき所なり。

一、連歌の句に、吹風に高ねの花やちりはてゝ。

「疑と治定との相違也。花やとうたがふ時は、ちりぬらんとうたがひのてにをはにて留る也。ちりはてゝと治定にとめたき時は、花のちりはてゝとすれば無相違。

これらの例で、過現未自他疑治定等の意味は推察せられること〻思ふ。とにかく和歌からはなれて、然もかういふ説き方をしてゐるのは、姉小路流とは樣子が變つてゐて面白い。和歌八重垣以後では、テニヲハの用法を歌にして記憶に便した和歌童翫抄(寶暦四年刊)があり、主として係結びをといた雀部信頰の氏邇乎波義慣抄(寶暦十年に成る)があり、又あゆひ抄の成る三年程前に刊行された榊井道敏のてには網引綱のやうな、テニヲハについてかなりはつきりした概念をもつて、テニヲハの性質意義等の研究に力をそゝいだものも出るやうになつて、テニヲハ研究は次第に進んで來たのであるが、成章のあゆひ抄に至つて、また一段の進歩を示したのである。(以上の書については、前講一六一頁から一七二頁を參照。)

6 あゆひ抄は總論(おほむねといつてゐる)一册、本文五册、成章の口授を門人吉川彦富・井上義胤の二人が筆記したといふ體裁で、總論の終に、「安永二年」(二四三三)とかいてある。總論上には、あゆひの分類、歌の詞が時代によつてかはつてゆくこと、歌の詞に里言をあてる困難等が説かれ、下には、まづ

裝の事は其抄あれども、あゆひの例はよそひによりてさだむべきを、此抄をよまむ人裝にくらくしては心えがたかるべければ

といつて、裝に關して略説し、裝の圖をあげてゐる。これで見ると裝抄が出來てゐた筈であるが、現在に傳つてゐないので、今はこれが成章の裝の説を知る唯一の材料である。その説については前講二一七頁以下を參照してもらひたい。次には、この書を讀むに必要なだけを名目抄のうちから注すといつて、たちゐ(立居)、おきふし(起伏)、たてぬき(經緯)、もとすゑ(本末)、かうぶり(冠)等の術語の説明をしてゐる。その經緯は五十音のことで、そこにはオヲの所屬を誤らぬ五十音圖があげてあるのであるが、その頃本居宣長もまたオヲの所屬を正してゐるので、この二つの間

の關係の有無如何といふ問題が起るのである。これについては前講八二頁以下に述べた所にゆづる。

かざし抄は上中下三册、あゆひ抄より前で、明和四年(二四二七)に出來てゐる。これも成章の口授を門人吉川彦富山口高端の二人が筆記したといふ體裁である。これは、

一、あはれ　二、あは　三、あな　四、あまり　五、あやに、あやにく
六、いかゞ、いかゞは……　七、いく、いくら……　八、いさ、いさや
九、いさ　十、いさゝめに　十一、いと、いたく　十二、いたづら
十三、いつ、いつか……　十四、いづこ、いづく、いづち…　十五、いで、いでや
十六、いな、いなや　十七、いとゞ、いとゞしく　十八、いま、いまは……
十九、いまだ　二十、いや、いよ〳〵　廿一、うち、うちつけ、うちはへて
廿二、うたて　廿三、うたかた　廿四、うつたへに　廿五、え、えぞ……
廿六、をりはへ　(以上上卷)

の如く、かざしに屬する言葉を五十音順(但し「を」がア行にある點は注意すべきである。)にあげて、一々里言をあてゝその用法をとき、用例を和歌にとつて示してゐる。

あはれ　古語拾遺曰阿波禮言ニ天晴一也。これにつけてふかき心あり、くはしくは古歌かざしに釋する故に略レ之。上古はおほく句の末におきてうちながめたるを、中昔よりは句の上にのみおきならへり。古今などにもあれど、拾遺以後の作者、ことにこのみてよめり。うれしき事にもせよ、うき事にもせよ、いひ出さんとするに、まづ心にふかく感じてうちなげきたる詞也。俚言に思ひまはせば、あゝさてなどいふ心也。さゞ今めのまへにある事にふれて、外の感情を引いだしたる心あり、さて昔をも思ひ行きをもかね、一を見て二を思ひやり、面を見て心をしるたぐひ、みなあはれといふことをおけり。昔を思ひたるは

古、思ヒマハセバ　あはれむかしへありき(タ「ヂヤトイフ」)てふ人まろこそは(何ヨリモ)うれしけれ(イ「ヂヤ」)ゆくさきをかねたるは

後拾　ながむれば月かたぶきぬあはれわが(テシマフタ思マハセバ)このよのほども(コレホド)かばかり(デヤハサテ)ぞかし

一を見て二を思ひやれるは

新、アアサテドノヤウニ　あはれいかに草ばの露のこぼるらん(ルデアラウゾ)秋風たちぬ(テシマフ)宮きのゝ原

面を見て心をしれるは

古、テシマフタ「ヂヤ」アアサテ　あれにけり(ダデアラウ)あはれ(アアサテ)いくよの宿なれや住けん(ヂヤヤラ)人の音づれもせぬ

いづれも心はひとつなり。又句のかみに置たれど、句の末をうけたるもあり。これはあはれといふ詞をまはしたるもの也。

拾、思マハセバ　あづまぢの野ぢの雪まを分てきてあはれ都の花を見る哉(「カナ」)

あはれといふもじを、あづまぢの上へまはして心得べし。又中ごろの世に、あつぱれといふ詞あるは、すなはち古あはれといへる心也。今里にあつぱれといふはかなはず。又哀なりといふ詞は、かざしにはあらず。ゆめ〳〵混ずべからず。

あな　古語拾遺曰、古語事之甚切(ナルラ)皆稱ニ阿那(アナト)一。俚言にあら、おゝなどいふ詞なり。

秋の丶になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一とき

いと　いたく　いみじ　なども、甚しき事をいへど、皆もの丶うへに打まかせていへり。あなは我心にあたりていふ也。故に古は痛の字をあなとよませたり。目のいたきを小町集に「あなめ、腹のいたきを源氏に「あなはら〳〵とあるもおなじ。又里にあらあつやさむやとやもじをくはへていふは、昔にかはれり。昔はかならずそのものをいひいだして、下にやもじをつけたり。「あなあやにくの春の日や、「あなしほたれの波のうきねやなどよめり。

まづこんな調子である。あゆひ抄も同樣であるが、かうして歴史的變遷に注意して研究してゐるといふ點が、本書を研究として價値あらしむる主な點である。

古言梯の著者楫取魚彦は、下總の香取郡の人で、本姓は伊能であるが、稻生ともいひ、通稱は茂右衛門、茅生庵と號した。楫取といふはその生地に因んでの稱である。延享二年(二四〇五)頃から賀茂眞淵の門に入つて古學を修め、特に萬葉集を貴んで研究した。眞淵の門人としてはむしろ作家としてすぐれてゐる方で、萬葉風の歌をよみ、加藤千蔭、村田春海、如藤宇馬伎と相並んで、縣門の四天王と謳はれ、天明二年(二四四二)三月二十三日に年六十で歿した。

古言梯は一册、假名遣の辭書ともいふべきもので、明和元年(二四二四)に成り、翌年刊行になつた。著者の附言に、

言の上中下に、いゐゑえをおなどのたがひ、又言の下に云波を和の如く、比を伊爲の如く、倍を延惠の如く、保を乎於の如く唱へ、或は治自頭受などの分ちまで、古の書てふ書にすべて違ふ事なく正しくなんありける。こゝに近き時、和宇正濫抄とて、さる言ども書つめたるあり。まことにその心させるさまでたくして、古の書らひろく相對へ記せし事、後の世人の私に思ひはかりていへるもの丶類にあらず。よるべき事も多かり。しかるにほ思ひはかりの少き事、且いまだ考たらはざる事の多かるをいぶかりて、その方人に問へば、彼抄はいまだ一わたりの案なるものを、或人しひて世に弘たるとぞいへりける。さこそありなめ、其言の出る所ゆゑよしなどを記せしは十が三つ四つなり。此度考とれる言すべて千八百八十三言、悉故よしを擧たり。

といつてゐるので、本書の目的や抱負は大體推察出來よう。語の配列は、附言にも

次は五十音にしたがひ、條は一言より四言五言とわかちぬ。

といつてゐる通りであるが、ヲオの所屬は誤つたまゝであつて、これは後の增補者に依つて訂正せられた。

この書は、古事記・日本書紀・續日本記・續日本後記・延喜式・萬葉集・新撰字鏡・和名抄等に根據を求めて、一々出典を示してゐるから、契沖の歴史的假名遣はこゝに於て十分にその基礎を固められたといふべきである。而してこの書が學界に及ぼした影響が如何に大であつたかは、この書の增補訂正を試みた學者が非常に多かつたことで考へられる。その增補に就ては前講四五頁以下を參照願ひたい。

眞淵門から出て、國語學上に偉大な功績を殘した學者は、いふまでもなく本居宣長である。宣長は通稱を舜庭といひ、享保十五年(二三九〇)五月に、伊勢國松坂に生れた。その誕生は父母がかねて子のないのを憂へて、吉野の水分

神社に祈つた結果であると信ぜられた。宣長の父は宣長が十一歳の元文五年(二四〇〇)に死んだので、其後は專ら母の手で養育せられた。母は宣長が商人には不適當であることを見て、醫師にしようと決心して、寶暦二年(二四一二)宣長二十三歳の時京都に上せた。そこで宣長は醫書をよむ準備として、堀景山について儒學を修め、ついで堀元厚についで醫書の講義をきいた。後、寶暦四年元厚が歿してからは、典藥武川幸順の門に入り、後にはその家に寄寓した。幸順は京都の人で小兒科の一名醫であつた。宣長は寶暦七年十月までこの門にあつて學んだ。この間にも宣長はもとより好きで讀んでゐた和歌や國文の方面にも、獨學ながら熱心な研究を積んだのであつた。ことに堀景山を緣として契沖の著書に接した事は最も注意すべきで、これが宣長をして生涯の學問に入る端を開かしめたものともいふべき程に影響したのであつた。

さて宣長は寶暦七年京都から松坂に歸つて、醫を開業し傍ら國典を研究した。その頃刊行して間もない眞淵の著書冠辭考を見ることを得て、眞淵の名を知りその學問に敬服した。寶暦十三年(二四二三)五月二十五日は宣長の學問上注意すべき日であつた。近畿の旅をして松坂に宿した眞淵、宣長が平生思慕の情を捧げてゐた眞淵に、面接することが出來たのである。當時六十七歳の老學者眞淵と、三十四歳の少壯學徒宣長とは、旅館新上屋のほの暗い燈下の下に相會して、一夜の物語に肝膽相照し、忽ち相許し相投ずるに至つたのである。其夜宣長はかねての計畫を打あけて、古事記の研究をしたいといふ念願をのべた所、眞淵は、自分もそれを志したのであつたが、楷梯としての萬葉研究に手間どつて、遂に成しとげられなくなつてしまつたことをのべ、宣長によつて自分の志が大成されることを喜び、學問には順序のあることを述べて、やゝもすれば年少氣鋭、才にまかせて先ばしらうとする傾きが宣長に見えることを警告した。かくて宣長は眞淵の言に感激し、愈々志を固め、眞淵は圖らずも我が學問を傳ふべき有望な學者を得たことを喜んだ。眞淵は江戸に歸つて後、門弟を集めてその祝賀の宴を催したといふから、以てその喜びを思ふべきである。かくて宣長は其年の末に名簿を送つて眞淵の門に入り、その後眞淵の死まで六年間、面接の機はなかつたけれども、絶えず書翰を以て教をうけ、その研究を進めたのであつた。

天明二年(二四四二)五十三歳の時、二階に書齋一室を增築した。四疊半の茶室風の部屋で、鈴の屋の名を負うた有名な間であるが、その名は、床の柱から机の傍へ絲をわたし、その絲にかねて愛玩の鈴をかけて、仕事に倦いた時はその絲をひいて鈴をならして慰んだからの名である。

宣長は素志たる古事記研究は、前後三十五年を費した大著古事記傳四十八卷といふ實を結んだ。時に寛政十年(二四五八)年六十九歳であつた。その後三年、享和元年(二四六一)九月に七十二歳を以て歿したのであるが、それまでも、研究に講義に著述に日も足らぬ有樣であつた。殊に晩年は、諸方に旅行して、講演によつてその學問を普及せることに忙しかつたが、中でも、歿する前、享和元年の三月の末に松坂を立つて京都に入り、滯留七十日間の活動は、七十歳の老年とは見えぬすばらしいもので、その講筵に列した堂上人も多く、京師に古學を布かうといふ宿志が十分に達せられ、彼の仕事の最後の花々しい場面をなしたものであつた。後年公卿の間に多くの勤王家を出した一つの素因は、こゝにあるといはれる。

宣長の著書は、古事記に於ける大著古事記傳をはじめ萬葉集には玉の小琴一卷、祝詞宣命等には大祓詞後釋三卷、出雲國造神壽詞後釋上下、歷朝詔詞解六卷、源氏物語は紫文要領二卷、源氏物語玉の小櫛九卷、古今和歌集には遠鏡

六卷、歌論には石上私淑言二卷、古道説には直毘靈一卷、馭戎慨言四卷、隨筆には玉勝間十四卷等を主として、なほ頗る多い。國語學關係のものでは、

紐鏡一表……明和八年(二四三一)に出來た。テニヲハの係詰の呼應を圖解したもの。前講一七三頁。

漢字三音考一卷……次に記す字音假字用格に、「凡ッ字音此方ニ古ヘヨリ傳ヘ用ルトコロ漢字ノ二ツアリ。又是レニ近世傳フル唐音ト云モノヲ加ヘテハ三ツ也。此三ツノ音ノ事ハ、予別ニ漢字三音考ヲ著シテ委ク辯ゼリ」とある。天明四年(二四四四)五月の小篠敏といふ人の序をつけて、翌年二月に刊行された。この書は皇國の音の正しいといふことを主張したものである。前講七六頁—八〇頁。

字音假字用格一卷……安永四年(二四三五)の自序があり、翌年春刊行。字音かなづかひの理論と用例とを記したもの。その中に、おを所屬辯が、五十音圖のおとをとの所屬を從來誤つてゐたのを正しきに復して學界に大いに貢獻したものとして注意される。前講八〇頁以下。

呵刈葭二卷……二卷であるが、語學關係のはその前編で、天明七年(二四四七)に出來た。ンの音を中心として上田秋成との論議を記したもの。前講八八頁—九〇頁

詞の玉緒七卷……安永八年(二四三九)十二月に出來た。紐鏡を詳説してテニヲハの法則を明かにしたもの。富士谷成章のあゆひ抄と並べて、當時のテニヲハに關する二大研究とせられてゐる。前講一七三頁—一七七頁。

(附記、前講一七四〇九行の「ゆか何について」のゆはやの誤。同十三行の「文章の部」は前の「古風部」とならべて七の卷の下に入る。)

言語活用抄(御國詞活用抄トモイフ)一卷……天明二年(二四四二)には出來てゐたといふ。活用に關する研究で、その子春庭の詞の八衢に至つて大成せられた。前講二〇三〇—二〇六〇。

玉あられ一卷……寛政三年(二四五一)には既に出來てをり、寛政四年春刊行。歌の部と文の部とに分けて、後世の亂れた用語を正したもの。種々の言葉について、その用ひ方や意味などを詳しく論じてゐる。

玉あられ學びの窓に音たてゝおどろかさばやさめぬ枕を

とはじめに書いてある。

地名字音轉用例一卷……寛政十年(二四五八)十一月には既に出來て居つたといふ。刊行されたのは寛政十二年である。地名に漢字の音が變轉して用ひられた例を示したもの。前講九一〇—九四〇。

等がある。

要するに宣長の國語の研究は、頗る多方面にわたつてゐるが、音韻テニヲハ活用等が主なもの、中でも八代集を中心とし、廣汎な材料によつて係結の呼應の法則を明かにし得た、テニヲハの研究はその最もすぐれた業蹟でなければならぬ。さうしてこの法則を中心に、個々のテニヲハの用法意義を論じ、その微妙なる點を說き明らめて、いかにも周密精確な點は、從前の語學者が未だ究め得なかつた所を究め得たといふべきである。活用の研究は、テニヲハの研究に關聯して注意されたもので、漢字三音考にも

假令バ言(タトヘイフ)・思(オモフ)ノ如キハ、ハ‖ヒ‖フ‖ヘ‖ト轉用シテ、イハム　イヒ　イフ　イヘ、オモハム　オモヒ　オモフ　オモヘト活(ハタラ)キ、往(ユキ)還(カヘル)ノ如キハ、往(ユク)ハカ‖キ‖ク‖ケ、還(カヘル)ハラ‖リ‖ル‖レ　ト轉用シテ、ユカム　ユキ　ユク　ユケ、

カヘラム　カヘリ　カヘル　ト活ク。諸ノ言皆此格ニテ、第一ノ音（アカサタナハマヤラワ）ハ未ダ然ラザルニ用ヒ、第二ノ音（イキシチニヒミイリヰ）ハ方ニ然ルヲ下ヘ云ヒオクルニ用ヒ、第三ノ音（ウクツヌフムルウ）ハ方ニ然ルヲ云ヒサダムルニ用ヒ、第四ノ音（エケセテネヘメエレヱ）ハ然セヨト令スルニ用フ。（又、上ニコソノ辭アルトキハ、第三ノ音ト同意ニナルナリ）タダ第五ノ音（オコソトノホモヨロヲ）ノミハ如此クナル活用ノ例ナシ。又上件ノ外ニモ種々ノ活用アリテ、千言萬語各皆其例格違フコトナシ。

といつてゐるこれは眞淵や士清の說（前講一九八〇―）よりもすゝんでゐるものである。さうして御國詞活用抄に至つて、あらゆる活用の形式を集めたのであつたが、それは草稿的なもので、その子春庭が詞の八衢に大成した研究の端を開いたといふ程のものであつた。音韻の研究に於ては、五十音圖のオヲの所屬を正したことが最も大きな功績である。我國の言語音聲が、外國のに比して優秀であることを說いた說は、要するに學問的基礎のない獨斷的な主張で、鼻音や半濁音を上代の國語には無いものとしてゐる說は。後の學者によつて訂正せられた。地名字音轉用例などは、その鼻音に關する說を訂正する材料を提供してゐたのであつた。

この他に、古事記傳一にある古事記の假字の研究、訓法の研究は注意すべきものである。殊にその假字の研究の中で、

さて又同音の中にも、其ノ言に隨ひて用ふる假字異にして、各定まれること多くあり、其例をいはゞ、コの假字には普く許古ノ二字を用ひたる中に、子には古ノ字をのみ書て許ノ字を書ることなと、メの假字には普く米賣ノ二字を用ひたる中に、女には賣ノ字をのみ書キて、米ノ字を書ることなく……

といふ說が、その門人石塚龍麿をして、假字遺奥の山路（前講五二〇以下參照）といふ詳細な研究をなさしめたのは、注意すべきである。

宣長に就ては簡單であるがこれで筆をおく。村岡典嗣氏著本居宣長昭和三年岩波書店發行は傳記及び學問についての詳密な研究で、宣長を知らうとする者の讀まねばならぬものであることをつけ加へたい。

以上、大體歹年を以て次第して、契沖から宣長までの主な人と研究とを述べた。宣長以後に歿した學者でも、その著書が宣長の生前に出てゐる者があることはいふまでない。それらを次にまはして、上述の所で一時期をまとめるのは不自然な譯であるけれども、個々の學者の傳を中心に記述して來たものとしては、やむを得ない不自然ではないかと思ふ。今はこの不自然はそれとして、今までの所を概觀して次に進まうと思ふ。

契沖から宣長まで、この間で通例國語學の第二期とする。この時期は概していふなら國語學の勃興時代ともいふべきものである。契沖以前の所謂第一期は、年代は頗る長いけれども、學といふべき程のものを見ることは出來なかつた。字書は相當に撰ばれて後代に貴重な國語資料を殘してはゐるけれど、假名遣とかテニヲハとかの研究は頗る幼稚であつた。然もそれが和歌に導かれた研究であつた、要するに詠歌の資に過ぎなかつた。また當時の歌は宮廷が中心であつたので、それらの研究も堂上家を中心に行はれ、當時の風潮から師傳口傳が重んぜられて、自由研究といふことは許されなかつたのであるから、說は後世になる程詳細にはなつても、その骨子は變ることなく、假名遣に於て所謂定家假名遣、テニヲハに於ては姉小路式より外には出なかつたのであつた。中には定家假名遣に反對した說をのべ

るものがあつても、

然れ共にはかに此つかへ（定家假名遣）をあらたむべきにあらず、又ひとへに是を信ぜば音義に叶べからざるにより て、此一帖（仙源抄）には文字づかひをさたせず。（仙源抄跋）――前〇一六〇。

僕きたかの式（定家假名遣）を專として用ゐ來ること年久し、今時又亦これに背かず、將來又以て然るべきものなり。たゞ特地萬葉集に於いて、和字を漢字の右に書き加ふるに至つて、いさゝか愚性の僻案を引發し、偏に當集の音義に任せて、これを點ぜしむる所なり。（萬葉集跋）――前〇二八〇。

といふやうに、徹底的に反對してゐるのでもなければ、またその說の勢力も小さくて、大勢に影響するまでには至らなかつたのであつた。

然もこの後に來たのが戰國亂離の世の中で、文學は全く地におち、國語の研究も同樣に荒凉の觀を極めた。契沖以前に見るべき研究の出なかつた理由である。

元和偃武以後天下はやう〳〵靜謐に歸した。德川家康はしきりに文事を奬勵した。かくして文藝復興の曙光あらはれ、二千三百年代の中頃の元祿の盛時は來たのである。この時文學は既に堂上からおりて平民の手に移つたのであるが、國語の研究もまた平民の手に移つて勃興し、まづかの圓珠庵契沖の上代文學の註釋的新研究となつてあらはれた。その研究に得た古書を基礎とした假名遣上の意見は、和字正濫鈔として發表されたが、それは獨斷の多い從來の定家假名遣に對する爆彈であつた。たま〳〵楠成員のこれに對する反對は、たゞ契沖をして、歷史的假名遣の基礎を固めしめたに過ぎなかつた。その後定家假名遣をうけた著書も出るには出たが、國典の研究が普及すると共に、大勢は古典に根據をもつ歷史的假名遣に有利に展開して、遂に楫取魚彦の古言梯となり、多くの學者の支持を得て、歷史的假名遣が學界を支配するに至つたのである。

さて國語學上では契沖がまづ假名遣の上に歷史的研究法を起した。これについで語源研究の上に、また文字研究の上に、歷史的研究法をたてゝすぐれた業蹟を殘した新井白石に注意しなければならぬ。著書はすなはち東雅と同文通考であるが、何れも時には餘りに歷史的根據を重んじ過ぎて、はつきりした自己の意見を出すことを妨げられてゐる所もある程、それ程に、古書から有力な根據を集めて、然る後愼重に之を解決しようとした態度は立派なもので、今日なほその著書が學問的價値を認められてゐるのもこの故である。

かうして國語の研究は正しい方法を得たのであつたが、荷田春滿が出て國學が開け、眞淵之を受けて規模を大にし宣長更に眞淵を受けて一層規模を大にして國學を隆盛ならしむるに及んで、國語の研究はその影響を受けずには居られなかつた。一體契沖の學問は古學とよばれて、中世の傳承を離れて古文獻そのものについて自由に研究するのが目的で、そこには唯あるものをあるがまゝに理解しようといふ心だけがあつたのであるが、春滿以後の國學に至つては、契沖の研究法によつて古道を明かにし、國體の精華を發揮することを目的とするに至つたのである。同じく古典の研究ではあるが、目的がかう變つて來ては、その同じ人々によつてなされた國語の研究もまた、國學の色彩を帶びざるを得なかつた筈である。かくてまづ眞淵の意見を聞くに、彼は上古に文字無しといふ說をのべてゐるが、その說き方は次の如くである。

これの日出づる國はしも、人の心直かれば事少なく、言も從ひて少なし。事も言少なかれば、惑ふ事なく凝るゝ

時なし。故天地の自らなる五十聯の音のみにして足れり。何ぞも人の作れる字を待ちて物をなさめや。（語意考）

さうして五十音は神代よりあるものとし、その横の音によつて言葉が分たれることをのべて、

抑も此國の上つ代より用ゐ來りて定めある言葉の分ちは横の音にこそあれ。其一つは言初むる音、二つは言動かぬ音、三つは言動く音、四つは言令する音、五つは言助くる音なり。こを分ち知る時こそ此國の言は明かなれ。しかあればこれぞ此の言葉の國の天地の神祖の教へ給ひし言にして、他國には有らぬ言の例なる事を知るべし。かゝれば此の五十聯の音を集めなせしも、顯しき人草習ふ中つ代のわざならず、いとも尊き神習ふ代に、天御孫命の御代の千五百代にも變らぬ言葉の國の本を示さへ賜ひしものになもある。（語意考）

といふのであつた。又、宣長がテニヲハや活用の研究も、その法則の儼然たるに驚いては、これを以て外國の語に對してすぐれた點であるとして、

皇國ノ古言ハ五十ノ音ヲ出デズ。（中略）如此ク用フル音ハ甚少ケレドモ、彼此相連ネテ活用スル故ニ、幾千萬ノ言語ヲ成ストイヘドモ、足ラザルコトナク盡ルコトナシ。ソノウヘ一言ノウヘニモ活用アリテ、例令バ言・思ノ如キハハヒフヘト轉用シテ云々　又上件ノ中ニモ種々ノ活用アリテ、千言萬語各皆其ノ例格違フコトナシ。又言ヲ連ネテ語ヲナスニハ、ハモゾコソテニヲヤカム等ノ辭アリテ其意ヲ分ツ。凡テ如此ク、活用助辭ニ因テ其義ノ細ニクハシク分ルルコト甚ダ妙ニシテ、外國ノ言語ノ能ク及ブ所ニ非ズ。凡ソ天地ノ間ニカクバカリ言語ノ精微ナル國ハアラジトゾ思ハルル。（漢字三音考、皇國言語ノ事）

といつてゐるのである。けれどもテニヲハや活用の如く、その資料が一方の解釋をしか許さないものは、その詳細な研究によつて、その間にある法則は誤なく認められたけれども、音韻の研究の如きものになると、上代の國音を正雅なものとしようとする餘りに、意識的にではなかつたにしても、資料を都合のよい方に解釋して、鼻音や半濁音を不正な音とする心から、これを上代の國語の音には存在しなかつたものとしてしまつたのであつた。

かうして國學の影響は受けたけれども、宣長の國語の研究は頗る多方面にわたつてをり、且つその門人も頗る多かつたので、次期の全盛を來したもとは宣長にあるといはねばならず、國語學史上に於ても、その功績は、國學の影響の故に何程を減ずべきものではないのである。

國學の勃興したこの時代にも、谷川士清や富士谷成章のやうに、それからは全く離れて、國語そのものを研究したものもあつた。殊に成章は言語を、名・裝・挿頭・脚結の四つに分類して體系的研究を企てたすぐれた學者であつたが、四十二歳といふ若さで歿したこと、京都に住んで堂上家の束縛のため學説の自由な發表が出來なかつたこと――そのかざし抄やあゆひ抄が、成章口授門人筆授といふ形式で出されたのは、その爲だといふ。――その分類が所倒こ術語がむづかしかつたこと、門人も僅かであつたこと等のため、その後を繼承して大成するものもなくて終つたのは殘念なことであつた。

第三章　宣長以後守部まで

本居宣長以後、橘守部の歿するまでの間は、國語學史上第三期といはれる所である。第二期に勃興した國語の諸方面の研究は、この期に至つては益々深く進められ、前期の研究の缺點は補正せられ、遺漏は塡充せられて、殆ど完成するに至つたので、概して國語學の完成時代といはれてゐる。以下前章の例によつて、主な學者とその研究とを見て

行かうと思ふ。

宣長歿後五年、文化三年(一四六六)に七十四歳でなくなつた伴蒿蹊は、近江國八幡の富家に生れ、京に出ては大佛の邊に住んだ。はやく家庭に於ても歌などを習つたのであるが、後には有賀長伯に學び、長伯の死後は武者小路實岳についたが、この人もなくなつてからは獨學で進んだ。その居を閑田廬といひ、歌文を以て名あり、小澤蘆庵等と共に當時京都に於ける和歌四天王の一人に數へられた。近世畸人傳五卷、同續編五卷、閑田耕筆四卷、國文世々の跡三卷その他種々の著がある。學者といふよりは文人といふべき人である。その國文世々の跡は、簡單ながら我國に於ける文國史の元祖ともいふべきものであるが、言語と文脈との上から國文の變遷を論じたもので、語學にも關係がある譯である。この書は文體を古體・中古體・近體の三つに分け、古體の例としては祝詞宣命をあげ、古今の國語には著しい相違があり、文體に近古の別を生じてゐる所以であるから、古體に學ぶにはまづ古言に熟さねばならぬことを說き、中古體には中古の物語・日記・歌序等の文をめげ、其の特質は敬語法の發達、字音を國語化して發音したこと、吳音を多く用ひたこと等であるといひ、中古體を摸倣するには、物をおぼろげに記すべきよしをのべてゐる。又近體には藤原基俊の抄物以後のものを屬せしめ、概していへば中古體は雅、近體は俗に近いといつてゐる。安永六年(二四三七)の刊行である。

宣長の音韻論に大反對をした上田秋成は大阪の人、父は不明、母は曾根崎新地の茶屋の女(むすめ)といふ生れで、四歳の時上田といふ家に養子となつたが、養母にも早く死別し、養父にも廿六歳の時別れた。三十八歳の時火事にあつて家財を失ひ京都大阪の間に移轉すること十數回といふ。醫術を習つて四十二歳の時大阪で開業し、相當にくらしゐたが、後やめて田舍に引込み、六十歳の時京都に出て、著述などをしてくらし、文化六年(一四六九)に七十八歳で死んだ。青年時代は放蕩で過したが、四十歳の頃から國學に志し、眞淵の門人加藤宇萬伎について學んだ。素性であつた爲か性質は極めて狷介で、人を容れずまた人にも容れられず、交游は少なかつた。記憶力のつよい人で、一讀した書は殆ど忘れることがない位で、從つて藏書といふものはなかつたといふ。怪談を扱つた名著雨月物語の著者である。

宣長に反對した音韻上の意見は、主として鼻音が上古にも存在したことを主張したもので、宣長の駁論と共に呵刈葭の中に並べてあげてある。(前講八八頁參照)。又假名遣に對する意見をのべたものに、靈語通一卷(前講四七頁以下參照)がある。門人越ノ魚臣等の、寛政七年(一四五五)十一月の序をつけて、同九年に刊行された。要するは

假字は言語を聞がまゝに書して、其假字のまゝに讀むぞ本なる。たとはゞ梅は宇米なるから、萬葉集にも爾書きて、只一首牟米と書ヶり。是は横に通はせて作出せしが有ッを、其を其がまゝに書ヶる也。げに云しまゝに書さずば、何をもて轉語を傳へんや。粟をあはと書ヶるも、古くはあわとはいはで、あはと云たる故なり。

といふ或御說(岡本保孝は田安宗武の說であらうといつてゐる。)を可として、古書にも假名の法則の違つてゐるのがあると、例をあげて論じ、假名遣は人爲的法則なのだから、契沖流にしろ定家流にしろ、好きな方をとればよいのだといふ意見をのべたものであるが、古書に求めた語例は、その語釋に至らぬ點があつて、適例でないのが多く、從つて牽强附會の說が出てゐるのは失敗である。

秋成にはまた眞淵の冠辭考をついで、その遺漏を補ひ、三代集古今六帖の頃までの歌文に見えた枕詞を集めて解釋した、冠辭考續貂といふ書の著もある。

縣門の四天王とは、萬葉集略解の著者加藤千蔭、上田秋成の師加藤宇萬伎、古言梯の著者楫取魚彦、それに村田春海の四人で、何れも歌人として有名であるが、中にも春海は、學和漢をかね、唐宋八家の文法に則つて國文を作り、縱横自在に言葉をつらね、本居宣長をして、京に歌人盧庵あり、江戸に文人春海あり、わが企て及ぶべき所にあらずと、嘆稱せしめた才人である。その歌文集は琴後集といふのである。春海は江戸の豪商の家に生れたが、豪放の性質で家業をかへりみず、終に產を傾け、文筆をもつて立つに至つた。兄は春鄕、父は春道といひ、三人共眞淵の門人であつたが、兄は三十歲で早世した。かくて春海はむしろ文學の人であるが、語學の上にもまた種々の著書がある。彼は眞淵や宣長が、我國に固有の道ありとした說には反對で、周公孔子の道以外に、我國に固有の道といふものはない、それをあるとするのは、國學者の牽强附會であるといふ意見であつたから、眞淵の語意考の說にも、從つて、贊成しなかつた。彼には五十音に關して、五十音辯誤一卷の著がある。これは寬政五年(一二四五三)三月に出來たもので

一、古言をとくに五十音になづむまじきこと(前講六九頁參照)。

二、五十音は神代からあつたものではないこと。

三、をおえゑの所屬のこと(前講八五頁參照)。

等について述べたものであるが、その五十音は神代からあつたものでないことを述べて、

此五十音を我くにに神代よりありこしものゝやうにいふ人あるはこゝろ得ず。さる事何の書にいでたるかいぶかしき事也。東麿(記者云眞淵の師荷田春滿のことである。)のしるされしものに、その家に古き傳のありしといはれしは、さもありつらめど、いかで上つ世よりの傳なるべき。(中略)今考るに、我くにに此五十音ある事は、むかし音博士などの唐よりつたへしものとぞおもはる。(中略)その本は天笠より起りし事なるべし。(中略)今吾くにの學する人の、わが國をたふとむあまりに、ことくにの事をこゝにとり用ふるを口をしき事におもひて、神代よりありしなりなどしひていふめり。いかでかしこの事をこゝにかりたりとも、吾はぢ也といふことわりあらん。とまれかくまれあるをありとしなきをなしとして、事を正しくいはんこそよけれ、なか〳〵にこゝろせまくてまけじだましひならんは、ひが〳〵しき業なるべし。

といつてゐるのは、大部分眞淵の語意考の說に對する反對と見られる。後に平田篤胤は、古史本辭經の中で春海のこの說に對して、

こは荷田の宇斯(ウシ)と縣居の宇斯とに甚く當たる言にて、一わたり然る事にも聞ゆれども、裡(シタ)には國を貶しむる意あり。

と攻擊してゐるが、なほ捉はれた考へであることを免れぬ。

古言をとくに五十音によつて延約をいふのは、眞淵が喜んで用ひた手段であるが、その流を汲んで隨分亂暴な應用がなされたことは、前講七〇頁に引いた淸水濱臣の泊酒筆話の話にも察せられる。春海のこれを誡めた考へは頗る適切であつた。彼はいふ。

さてこの五十音もてとくべきは、例をおし類ひ考て古言の意大かたにしられたる時、猶その言の本のつまびらかなるわかちをしらむとするに、此五十音もてしらるゝ事あり。（中略）かく例をもて其言のおほよそのしられたるを、猶くはしう其本をしらんとする時こそ、この五十音をば用ふれ、さるを白きとも黒きとも考へわかちがたき事を、たゞ五十音のみもてはじめよりとかんとするは、いとたがへり。又例と類とによりて、おほかたの心おもひ定むべけれど、其言の本のくはしくしりがたきもあるべし。そはしひてとくべからず。又二たびも三たびものべつゞめてしらるゝもあるべし。そも專ら例によりていふべきなり。いまみだりに古言をのべもしつゞめもして、あらぬことばをわがわたくしにいひいでゝ、これなにをのぶればかくいふ詞となり、なにをつゞむればかくなるなどいふは、いとたがへり、その延約（ノベツヅメ）たる言古書に例なくば、古言といふものにはあらざるなり。さる類はわたくしにつくれる詞とぞいふべき。このわたくしにつくれる詞をとりて、古言の本なりといふは、人わらへなる業なるべし。されば師の常に此五十音になづむ事をばいさめいはれし也。

又、假名遣に關しては、假字大意抄といふ著がある。これは享和元年（二四六一）八月に出來たもので、或貴人の問に答へて、古書を中心とする歴史的假字づかひはいかにして定むるかといふ點を中心として、假名づかひを論じたもので、

一、假字に定りのあること

二、古書について假字の例を考へること（前講五〇頁參照）

三、五十音によつて假字の例を考へること

四、世に行はれてゐる假字遣に二種あること（前講四六頁參照）

五、歴史的かなづかひを考へ出したのは權少僧都成俊からであること

等についてのべたものである。

字說辯誤も春海の著である。これは享和二年（二四六二）のもので、平澤元愷といふ人の謨微字說に對して書かれたものである。辯誤の終りに、享和二年の九月に平澤元愷の門生某が、その師の遺著だといつて、謨微字說の校正を乞うて來たが、辭退出來ぬわけがあつて、やむを得ず一通り目を通し、畢つてその誤を辯じてものしたといふことが書いてある。謨微字說は、片假名平假名の字源の研究であるが、その說に、平假名四十七字、一も訓によつたものなく皆音をとつたとしてゐるなど、强ひた說があるので、その誤を辯じたものである。即ち、

四十七字和草　一無下取二之訓讀一者上

此說此書ノ一篇ノ主意ニテ、伊呂波ノ字體ヲ新ニ製造スルニハ、訓讀ノ字ハ交ヘ用フベカラズ、皆字音ノミナルベシト思ハレタリト見エタリ。此ハ正キ事ノヤウナレド、本伊呂波ノ字體ト云フモノハ、ワザト新ニ製造セルモノニハアラズシテ、草書ヲ轉々シテカキ來レルガ、オノヅカラ一種ノ字體ノヤウニナレルモノ也、ソノハジメ草書ニテ和語ヲ記セルハ、萬葉集ナドノゴトク訓讀ノ字ニテモ音ニテモ、通ズルニマカセテ常ニ用ヒナレタル字ヲツカヒ來レルモノナレバ、訓モ音モ相交リテアルハモトヨリサルベキコト也。音バカリナリトイハンハ、其イハレナキコト也。

といつてゐる。さていろは文字の作者に論及して、

サテ伊呂波ノ字體ハ新ニ製造シタルモノニテ、弘法大師ノ作也ト云ハ、古書ニハソノ沙汰ナキコト也。

として、古筆に殘された假名字體の研究から、平假名は草書から發達したものだといふ說をのべ（前講一二二頁）、更にいろは歌の作者についても、弘法大師說を否定して、遙に後なるべしとし、

但シ伊爲乎於衣惠ナドノ用ヒヤウ、古ノ假字ノ法ニタガハザルヲ思ヘバ、假字ノ法イマダ亂レザリシ時ノモノナレバ、花山一條ノ御時ナドノ前後ニ出來レルモノナルベシ。決シテソレヨリ古キモノニハアルベカラズ。初句ヲ七言ニ云ヒ出セルナド、今樣ノウタヒモノノ句法ニテ、フルギ長歌ニハナキコト也。

といつてゐる（前講一二七頁）。これらいろは文字及び歌に關する說は、何れも春海が新しく發見した根據によるもので、從來のこの方面の研究に對して、指針とすべき光をなげたものであつた。

春海にはまた、古言梯を補正した假字拾要一卷、加茂季鷹の正誤假名遣を批評した若かつら一卷等の著もある。文化八年（一二四七一）六十六歲で歿した。

林圃雄は常陸水戸の生れで、江戸に出て四谷に住んでゐた。本居宣長の門人で、その著に詞の緒環がある。この書は、上卷の終に、

文政九とせといふ年の長月旅衣の日もみじかきころ庵に歸りてしるす。

とある。自序は次の如くである。

（前略）その中にも詞の玉緒、詞の八衢のふたふみはいともたふとゝ、たれも〳〵始はこのふみどもによりて、此道のくはしきにもいたる業なれば、なほいく度も操かへしよみ明むべし。されど濱の小貝のひろへどもつきず、ながるゝ水の世々を經てたえざるがごとく、この二書にいひはつべきにもあらねば、おもひよることあらむには、いはでやむべき業にもあらじ、言の葉の綾はも、をとめらが五百機たてゝおる機の糸よりもしげく、幾ちゝにもわかれて、そのたてぬきのはたらきは、かの言靈によれるものなれば、さきにあらはせる皇國の言靈によりて、こと葉の綾緒もただすべくなむ。かくいふは常葉居の主源圃雄

于時天保七年孟春

天保七年は二四九六年、常葉居は圃雄の號である。皇國の言靈は一卷、五十音についてことたまを說いたもの、眞淵の語意考にもとづいた由をのべてゐる。文政八年に出來た。

さてこゝに問題なのは、圃雄は文政二年（二四七九）に六十二歲で歿したといふことである。そこで福井久藏氏の日本文法史には、「詞の緒環は圃雄の著か」と見出しをつけて、

この書天保九年の刊行にして、上卷は夙く詞の綾緒と稱したるを後改めたりと。而して上卷の終には文政九年に成るに見えたり。按ずるに圃雄は文政二年六十二歲にて歿したれば、時代の相違あるを認む。恐くは門人が筆記しおけるを、手を加へて世に出しゝなるべし。（一〇一頁）

と言つてをられる。

この書は前掲の自序でも察せられるやうに、詞の玉緒詞の八衢の二書の遺を補ふつもりのもので、上卷は、テニヲハに就てはのに對する結びの研究、ぞこなん、つとぬ等の區別をのべ、活用に就ては、上中下一言の活の圖といふも

のをつくつて、一段の活用について說き。下卷は主としてテニヲハの法則を記憶に便するやうに、

はも徒のよつの言の葉ありてこそ現在のしに過去のきとしれ

ぞのや何上におきては現在のきと過去のしと入替る也

現在のこその結びはけれ　しけれ過去にはしかと結ぶとをしれ

といふやうな風にして、例をあげて說明してゐる。

上卷ののの結びの研究では、まづ、のに輕いのと重いのとあることを述べて、

さてその輕重のわいだめを、くさ〴〵に思ひはかれど、いまだたしかには思ひさだめず。しひて考ふるに、始は過去と現在にやとも思ひ、自と他にやともおもひて、おほくの歌どもにおしわたしみるに、いづれにもわたる事ありて、さゞめかねつるを、とし月を經て、今ひとつの考あり。ぞや何に屬(ツク)のは第五音おこそとの云々の横のかよひにて、ぞにかよふのなり。かれのといふ所をぞといひてもおなじく聞ゆるなり。はも徒に屬(ツク)のはなにぬねのと竪のかよひにて、な又にに通ふのなり。かれのといふ處をなまたにといひて聞ゆるなり。しかれども、ぞ又なにといはんよりは、ともにのといへるかたかならずしらべよろしきがゆゑに、おのづからにのといはるゝなり。

といつてゐるのであるが、例にあげてゐるなにふ通のとは、

さゝ波やしがの都はあれにしを昔ながらの山さくら(ナル)かな

にに通ふのとは、

みやまには松の雪だに消えなくに都はのべの若菜つみけり(ニ)

といふやうなのであるから、驚かざるを得ない。

一言の活については、福井氏の日本文法史に、

動詞に下一段を立てしは林圓雄に始るか。詞の緒環には上中下一言活の圖を揭げ、上一段に對し中一段下一段を設けたり。上一段にては鑄るをや行に移したる外は八衢に同じく、中下一段は左表に於けるが如し。蹴るを下一段と立てたるは善けれど、來・爲・寢・經・得の將然形及連用形を捨てゝ中一段とし、そが中の將然形若くはこれに助動詞の添へるものなどを以て、下一段となせるは大なる誤謬に陷れるものなり。

といつてゐる如くである。即ち次の如くである。

來	く	くる	くれ	蹴	け	ける	けれ				
爲	す	する	すれ	爲	せ	せる	せれ				
寢	ぬ	ぬる	ぬれ	寢	ね	○	○				
經	ふ	ふる	ふれ	經	へ	へる	へれ				
得	う	うる	うれ	得	え	○	○				
中一段				下一段							

あゆひ抄の著者富士谷成章の子は御杖といひ、父の學をうけて家聲をおとさなかつた。その語學に關する著書には、詞葉新雅、俳諧天爾波抄などがある。詞葉新雅は一卷、辭書で、寛政四年(二四五二)に出來て刊行されたもの、俗語をいろは順にならべて、それに雅語をあてたもので、俗語から雅語をもとめるといふ珍しい組織である。多く歌

によむ詞を集めたのである。一卷といふのは初編だけで、二編以下は出なかつたやうである。俳諧天爾波抄は六卷、御杖の口授を門人浦井有國が筆記したもの、文化三年(二四六六)に成り、翌年刊行された。これはあゆひ抄の說にもとづいて、俳諧に用ひるテニヲハの意味や用法を說いたもので、七部集から資料をとつてゐる。

この人の隨筆には北邊隨筆といふのがあつて、語學に關する說も散見してゐる。この人は文政六年(二四八三)に五十六歲で歿した。

文政七年(二四八四)に四十九歲で歿した淸水濱臣は、江戸の人で、不忍池の畔に住んで醫を業としてゐた。眞淵門の文人村田春海について學び、泊洎舍と號し、また歌文に名を得てゐた。國語學關係の著書には據字造語抄がある。この書は二卷、文政五年六月に出來た。初編の提要に、

中昔よりこのかたのものに、文字のまゝによりて、しひていへることばあり。あながちにあげつらひたださでもありぬべきことのやうなれど、さてあらぬことなり。いかにとなれば、中昔の人のくちよりいひ出しことながら、今となりては、歌よむ人たち、それをためしとなしてまねびよみ、うひまなびのともがらはた、何のわきまへなくならひよみて、はてはてはあやまりをつたへぬべし。又例あるからはしさいなきこととのみ、かたおもむきに思ひひがめたる人もあるべし。これはおほきなるあやまり也。たとひ例なりとも、ことわりたがひ詞いうならざらんをば、いかでまねぶべき。いまこれかれとぬきいでゝ、部門をわかちてことゝく證例をあげ、そのことわりかなひ詞いうにてとり用ひらるべきと、ことわりかなはす詞いうならずしてとり用ひがたきを、あげつらひぬ。(下略)

とあるので、內容や著述の目的は大體推察せられるであらう。天象・地儀・人倫・人名・身體・居處等の部門をわけ、その各部門の中では五十音順に配列してゐる。目次の一部分を示せば次の如くである。

天象　あそぶいと　遊糸　いとゆふ　かみのその　祇園　ぎをん
地儀　いはのうへ　石上　いそのかみ　きなるいづみ　黃泉　よもつくに
附地名　かせぎのその　鹿苑(しかのその)　ろくをん　くものゆめ　雲夢　うんぼう
くにす　國栖　くす　ちかつえ　近江　あふみ
たつのかど　龍門　りうもん
(中　略)
もしせばき　若狹　わかさ　やすな　安那　あな
ゆきのやま　雪山　せつせん　よくのぼる　能登　のと
よろこびくはふる　加賀　かが　よつのうみ　四海　よものうみ
わしのやま　靈鷲山(わしのみね)　れうじうさん　わたりあひ　度會　わたらひ
人倫　くはのかど　桑門　さうもん　しらなみ　白波
のりのすべらぎ　法皇　おりゐのみかど　まうけのきみ　儲君　ひつぎのみこ
みどりのはやし　綠林

19146

次に本文の方を一例をとる。

あそぶいと　遊糸　イトユフ

永久四年百首　遊糸

うちみだれすめるみそらにあそぶいとに天の河せの水をひかばや（かすめる夫）　顯仲

ひばりあがるイ光あるきさらぎの日にあそぶいとにみどりの空もまがひ見えけり　仲實

さゝがにのくもらぬ空のいとなればあそぶけしきのたえずもあるかな　俊頼

しづけくて吹くる風もなき空にみだれてあそぶ糸ぞ見えける　忠房

空晴てあまつみ空に遊ぶ糸のよる〳〵はなど見えぬなるらん　兼昌

はる〴〵と淺みどりなる大空にあそぶ糸をやながめくらさん　常陸

つれ〴〵とのどけき空にあそぶ糸を我より外に人やみるらん　大進

按ずるに、ふるくはいとゆふとのみ歌にもよみ來れるを、此永久四年百首には七人みな遊ぶ糸とよめり。是よりさきにありしや、大かた見あたらぬやう也。遊糸の字にすがりてよめれど、ことわりかなはず。近頃の歌にはすべてよむことながら。心あらん人は庶幾すべからぬことにこそ。（此百首に七人みな遊ぶ糸とよめるは、ことさらにいひあはせたるなるべし。此うちにて顯仲・仲實・俊頼などは堀川百首よりの作者にて、先輩なれば、此人たちのふとめづらしきによりてかくはまうけよめるならん。（下略）

もしせばき　若狹　ワカサ

藤原清輔朝臣家集　重家若狹より能登にうつれる頃悅申とて

もしせばき國にやしづむと思ひしによくのぼりぬと聞ぞ嬉しき

按ずるに若狹能登を字によりてかくよめり。すべて國名は借字にてあれば、國名に文字の義はなきことなり。されば字のまゝによみては、ことわりかなふべくもあらねど、いひかたのみやびならんは、ひとつの例としてまねびよむもあしかるまじき也。もと此清輔朝臣の歌は躬恒家集に、いづみにてしづみはてぬとおもひしを、けふぞあふみにうかぶべらなる、とよめるをまねびしものなり。されど躬恒のは和泉近江ともにことばのまゝにて、字にかゝはらずいひかけしかば、いはんよしなし。清輔のは後なる故に、わざとたくみにいひなしたるより、中々にみやびおとりたり。よくあぢはへ心得べし。

かうして、一々例證と批評とをつけてゐる。要するに作歌の資料に供する爲のものであるが、文字によつてわざとこしらへられた言葉の辭書といはばいふべきである。

濱臣にはまた、主として中古の物語中の言葉を五十音順にあつめた、語林類葉といふ著もある。據字造語抄もこれも、寫本で傳つてゐるだけである。又、人の問に答へたものを集めた、答問雜稿寫本三卷といふのがあるが、これにも語釋に關するものが多い。玉勝間卷一に宣長は田中道麿の、物をほめていふ場合のおかしは、おむかしの約でおの假名、笑ふべきことをいふをかしは、をことといふ言葉から出來たのでをの假名であるといふ說をあげて贊成し、これに從つてゐるのであるが、これに就て、答問雜稿卷二、「をかしの假字」の條には次のやうに述べてある。

此假字、笑ふ心なる時は、をにて、めづる心なる時はお也といふ說は、山岡明阿、羽倉御風などがいひ出たる事にて、本居宣長も此說にしたがへり。田中道麿が始て考出たりといへるは、玉かつまの誤なり。今按におかしと

をかしと二ツに書分んとするは、いみじきひがごとにて、必をかしとのみ書べき事也。其故を委しくいはんに、をかしとかける假字の證は古書に多し。おかしとかける假字の證はたえてなし。宣長が說に、於牟加之の略語ならんと思へるは誤なり。いかにこなれば、萬葉集に於牟可之といふ詞を略して牟可之とばかりいへれど、於牟可之を略して於可之といへる事は何の書にもなし。阿伊宇衣於の字はすべて略きやすき字なれば、於を略して牟可之と云べきはことわりさること也。牟を略して於可之といはん事わりにもそむき例もなき事也。若古書に於可之とかける假字書のものあらば、於牟可之略語ならんかともいはるべきを、古書みな乎可之とのみあるをば、いかで於牟可之の略にて於可之の假字なりとはいはん。さて乎加之の笑ふ心なるは日本紀私記、新撰字鏡に明證あれば、誰もしれる事也。めづる心なるは語の轉ぜしものにて別語にはあらず。物をめづる時はおのづから打ゑまる物なれば、しか轉ぜし物也。（下略）

濱臣の隨筆には泊洒筆話二卷があり、東條義門の指出の磯に對する評といふべきものも載つてゐる。

宣長の活用研究を承けて大成したのは、宣長の子本居春庭である。春庭は寶曆十三年（一七六三）二月に生れた。父宣長が三十四歳の時の子である。幼少の時から餘り健康ではなかつた。その上二十九歳の頃から眼を患ひ、治療に手を盡したが遂にその効なく、寛政六年、その三十二歳の時失明してしまつたのである。で、翌年京都に出て針術を稽古し、滯京二年、歸鄕の後はそれを以て世に立つた。かうして肉體的には甚だめぐまれてゐないのであつたが、記憶力は非常にすぐれてゐて、幼時から學問に志し、家學を承けて造詣頗る深く、妻伊伎子、妹美濃子等に助けられて、著述や添削をなした。元來記憶がよいのが、失明後は更によくなつて、その門人の文詞等を添削するに、數枚にわたる長文も、讀むのを聞いて悉く暗記して添削し、自ら書を講ずるにも、他書の引用に當つて、某書の何頁といつて、誤ることが無かつたといふ事である。その最も精しかつたのは語學であつて、名著詞の八衢が出來たのは、文化三年（一八〇六）四十四歳の時である。著書は僅かで、この他に詞の通路や家集等があるだけであるが、語學の書としての八衢と通路とは、國語學史上忘れることを許されぬものである。

詞の八衢は二卷ある。前講二〇六頁以下に大略紹介をしておいたが、宣長の御國詞活用抄に比べてみると、一躍非常な進歩を示してゐる、實に周到な研究であるといはねばならぬ。まだ活用形に將然とか連用とかいふやうな名をつけるには至つてゐないが、

さて圖にしるしたるてにをは五ツにわかれたり。そは四段の活の第一の音よりうくると、第二の音より受くると、第三の音の切るゝ詞よりうくると、又つゞく詞より受ると、第四の音より受るとなり。此五ツおの〳〵全くして、他にまじはり混ずることなき也。

といふやうに、はつきりと承接するテニヲハを研究することから活用を明にしたといふことは、大きな功績で、活用研究の基礎はこゝに定つたのである。

各活用形については、例へば四段の活について、

四段の活はあ|な|や|わ|の四行にはなし。第一の音かさたはまらはそのまゝにては未ダ語をなさず。たとへば、あかん・あかず・あかじ・かさん・かさず・かさじなどを、あか、かさとのみにては語をなさゞるなり。其下に受るて

にをはの、んずじにて語をなすなり。これは四段の活にかぎれる事にて、一段の活・中二段の活には、この語をなさゞる活なし。さて此第一の音よりうくるてにをはは、ずでじぬんましなどなり。

第二の音きしちひみりは用言へつゞく詞なり。うくるてにをはは、てつゝけりきけんなばぬるつるししかなどなり。

第三の音くすふむるは切るゝ詞と體言へ續く詞とをかねたり。受るてにをはも二ツをもちひて、切るゝかたより受るてにをははめりらんべきらしとも、續く詞よりうくるてにをははかなまでにをよりなどなり。

第四の音けせてへめれはこその結詞なり。受るてにをはばどともなどなり。

といふやうな調子で、以下、一段の活、中二段の活、下二段の活、についても說いてゐる。後に活用形の名前のつけられるもとは、既にこゝに出來てゐるといふべきである。眞淵の初體用令助の說などに對してまさること萬々、それは歸納的歷史的研究のたまものでなければならぬ。

この書は動詞の活用のうち、四段・一段・中二段・下二段の四種の活について研究したもので、變格活用については、五十音の各行について、それ〴〵その行に活用する言葉を研究してゐる際に說明してゐる。四段一段等の名は春庭がはじめてつけたので、五十音圖にもとづいて命名である。五十音圖で活用に關係あるのはアイウエの四段であり、その中の二段(イウ)に關するのを中二段、下の二段(ウエ)に關するのを下二段と名づけたのである。一段に上下を分けなかつたのは、前講(二一〇頁)にも述べたやうに下一段活用を認めてゐなかつたのである。かうしてこの書の研究が動詞に限られたこと、下一段活用を認めなかつたこと、及びラ行變格の事實は認めながら、一の活用として獨立させなかつたこと等は、この書の缺點の主なものとせられてゐる。なほ小さな點では、ナ行變格に文語と口語とを混じてゐること、おはすをサ行變格と斷じたこと等もある。おはすといふ語は春庭がサ行變格とした爲に、ずつと後までさう信ぜられ、大槻博士も廣日本文典に於て、別記に於ては疑をはさんでをられながら、なほ春庭の說によられたので、山田孝雄氏が日本文法論に於て、四段活用と下二段活用とあつたと見るべきであることを主張せられるまでは、一般にサ行變格として考へられ用ひられたのであつた。然しかうして缺點は數へるものゝ、そのためにこの書の價値がどうといふ譯のものではない。吾人は春庭がどこまでも歸納的に歷史的に綿密な研究を施して、動詞の活用をこれだけに明かにしてくれたことを、感謝しなければならぬ。

詞の通路は三卷、出來たのは明かでないが、文政十一年(二四八八)の太平の序がある。上卷は詞の自他に關しての研究で、自他について纏つた研究の最初のものとして、通路の重んぜられる所以をなしてゐる。これについては前講二一二頁以下に述べておいたが、春庭の自他の考へは頗るひろくて、その上現在使役の助動詞、受身の助動詞といつて、動詞から區別して見てゐるものを、すべて動詞の語尾と見てゐるので、一層複雜になるわけである。詞の八衢に於ても

右に擧たる外、四段の活詞の其第一の音より、おどろくをおどろかるゝ、くらすをくらさるゝ、くむをくまるゝ、など活かし、又一段の活詞、中二段の活詞の其第二の音より、きるをきらるゝ、見るを見らるゝ、おくるをおきらるゝ、戀ふるをこひらるゝなど活かし、下二段の活詞のその第四の音より、うくるをうけらるゝ、いづるをいでらるゝ、とがむるをとがめらるゝなど、るゝらるゝと活かしたるたぐひなほいと多し。

といふやうにいつて、る〻らるをテニヲハと見てゐないのである。これは或は、る〻らる〻す〻さすは夫々承接する言葉を異にしてゐて、他のテニヲハのやうに四種の活詞に通じてつくといふものでないから、テニヲハと見なかつたのでもあらうけれど、その爲に通路に於ける自他の說が複雜不明瞭になつてしまつたのは殘念なことである。

中卷には詞の兼用と詞の延約との研究がある。詞の兼用とは、例へば

つれもなき人をやねたく白露のおくとは歎きぬとはしのばむ

のおくが、歌の上では起くの意であるが、白露のに對しては置くの意であるといふやうに、一つの詞に二種の意味を兼ねさせて用ひる場合が歌などには多いので、それに就て研究したもので、かやうな例歌を澤山集めてその樣々な兼用の狀態を說明し、最後に、置く(四段)と起く(上二段)、降る(四段)と經る(下二段)といふやうな、活用の異なる詞をかけ用ひる場合の注意を述べてゐる。又、詞の延約は、所謂延言と約言との研究で、これについては既に眞淵が語意考に於てのべてゐることは、前にも大體紹介した通りであるが、今はこれを多くの材料によつて整理し、組織立てて說いてゐるのである。延言では、

1、サ行にのびて四段に活用するもの

吾をまつらむ　吾をまたすらむ

逢ひしをとめ　あはししをとめ

菜つむ子　菜つます子

2、ハ行にのびて四段に活用するもの

言ひつぎけり　いひつがひけり

舟よぶ　舟よばふ

家のれ　家のらへ

3、ラ行にのびるもの

命もちぢむ　命もちぢまる

よみをへて　よみをはりて

4、――くと延びるもの

人のきくに　人のきかくに

いふもしるく　いはくもしるく

雨のふるに　雨のふらくに

相思はぬに　相思はなくに

降らむは後　降らまくは後

老ゆる惜しも　老ゆらく惜しも

惜しく　惜しけく

といふやうなものを主として說いてゐる。はじめに、

そも〳〵延りたる詞は、佐行と波行と雜行とにのばはる事なり。其うち佐行と波行とに延りたるはいと多かれ

ど、羅行にいへるはいとすくなし。其外の行には延りたる例なし。

といつて、前例4、の所謂加行延言は、本文中には說いてゐるが、ほんの附けたりのやうにしてゐるのは、これは「く」だけで活用がない故であらう。そしてこれらについては、春庭も

さて四段の活詞の延りたるが多くて、其外の活詞のばはりたるは少し、

といつてゐるやうに、多く四段活用の動詞に起る現象であること、又その用ひられたのが、

古く古事記書紀萬葉集に、詞ののばはりたるたぐひさま〳〵あり、又つゞまりたる言語もいにしへは多かり。こののばはりつゞまりたること、古今集よりこなたはやう〳〵いとまれになり行て、それより後々はいと〳〵まれ〳〵なる事となれり。

といつてゐるやうに、平安朝以後には少いこと、且つもとの詞とのびたといはれる詞との間に、意義の差が大して認められなかつたこと、(「佐行にのばはりたるは、おのづから尊みたるさまに聞ゆる多し」とは言つてゐるが)、等のために延言といはれ、長い間この解釋が認められてゐたのであつた。これに對する現代の學說は、前の講座に於ける木枝講師の文法及口語法を參照せられたい。即ち1、については一八七頁(七)す、2、については二一九頁(4)所謂波行延言なるもの、4、については二〇二頁「まく」に關しての說にとかれてゐる。

次に約言では、

1、のどけくあらまし　のどけからまし
2、惜しからむ　惜しけむ
3、ならはずあらなむ　ならはざらなむ
物にぞありける　物にざりける
4、梅咲きてあり　梅咲きたり
死ぬといふこと　死ぬちふこと
5、秋にあらで　秋ならで
6、咲きあり　咲けり
待ちあり　待てり
遠かれども　遠けども

といふやうなものについてのべてゐる。カ行からはじめて、五十音の各行について例をあげてゐるので、ある單語だけの約言の例が多くあげられてをり、說き方がどちや〳〵してゐる感がある。

通路の下卷は、詞やテニヲハのかゝる所についての研究である。

すべて詞にもてにをはにも、こと〴〵く其かゝる所あることなり。(中略)そは次の詞へのみかゝるもあり、あるは一首のうへにこと〴〵くかゝるもあり、あるは句をこれかれへだてゝかゝるもありて、其かゝりざまもさま〴〵なれど、おのづから其定まりある事なり。

といつて、そのかゝり方を、〉〉〈〈　＝　＝　〔　〕等の記號を以て示してゐる。即ち次の如くである。

みよし野は山もかすみて白雪のふりにしさとに春は來にけり

「ちはやふる」神代もきかず＝立田川からくれないに水くゝるとは

前の例でいへば、山も　白雪の　ふりにし　春は等は夫々すぐ次のかすみ　ふり　さと　來にかかる。又みよし野ははは山もをへだててかすみてに主としてかかり、またかすみて　さとに　と共に後の來にけりにかかる。來にけりのけりは春はのはの係りに對する結びである。後の例でいへば、ちはやぶるは枕詞、神代もきかずで切れる、水くくるとは上へかへつてきかずにかかる等のことを示してゐるのである。

かくて最後には、歌を習はうとする者への注意、詞八衢の説明學び方等をつけ加へてゐる。そこには

んのてには四よりうくるは下二段四段は一の音よりぞいふ

一段と中二段とは二の音にんのてにをはをそへていふなり

といふやうな、活用の見分け方を敎へた歌などもある。詞の通路三卷、內容は大略上述の如くであるが、その最も注意すべきは、前にも述べた通り上卷の自他の研究である。春庭は文政十一年(一八二四)六十六歳で歿した。

宿屋飯盛といふ狂名で狂歌師として世に鳴らした石川雅望は、江戸小傳馬町の旅館の子であつた。和書は佐竹侯の用達津村三郎兵衛といふ人について學んだといふことであるが、頗る古語に通じ、殊に源氏物語を愛讀して、湖月抄補正の意味で源注餘滴を著し、雅言辭書として雅言集覽を編むなど、學問上にも立派な業蹟を殘してゐる。

雅言集覽は、前にのべた谷川士清の和訓栞と共に、德川時代の二大辭書と稱へられてゐる大著で、原本は五十卷二十一册、いからかまで六册は文政九年に、よからなまで三册は嘉永二年に板になり、以下は寫本で傳はつてゐたのであるが、後に中島廣足の增補したものが明治に至つて刊行せられ、明治二十年に全部の落成を見た。語彙はいろは順に配列してある。凡例に、

此書に出しつる雅言どもは、延喜よりこのかた歌にも用ゐなれたる詞どもなり。ちかき世となりて、あやしく耳なれざる詞どもをとりまじへて、文などつづる人あれど、さるはいみじきひがごとなれば、ここにはさやうのたぐひはうちはぶきて、用ふべきかぎりの詞をのみとり出てしるしつけつ。

雅言はよくあじはひて我ものとせざれば、用ゐざまたがひて大にあやまることあり。たとへばそゞろかといへるは、人の身のたけたかきにいへる詞なるを、そゞろといへる詞におなじ意なりと思ひあやまれるがごとし。此たぐひあまたあれば、詞の例どもをあはせ見つゝ、よくく思ひえざらんには、一歩千里のたがひとやなりぬべからん。さればこゝにはみな人の常にいひなれて、あやまるまじと思はるたぐひをさへ、わづらはしきまでとりならべたるは、なか〳〵にちかきことのまがひやすく、俗にいふはすべりの誤りといふことのなからむためにとてなり。

といつてゐる。一語一語の解釋は簡單であるが、例は頗る多くあげてある。

萬葉集略解の著者加藤千蔭の門人に大石千引といふ人があつた。武藏龜井戸の湯屋の主人であつたが、名利に淡く、野々舍、又は星盧と號して、學事と風月とに身を委ねて、大鏡短觀抄などの著がある。この人の著の言元梯といふのは語源研究に關するものである。その書の大略には著者の國語上の意見がうかゞはれる。そこに於て彼は、神代は音ばかりで文字がないこと、五十音は吉備公の作とはいふが、實はそれよりずつと以前のものであらうといふことをのべてゐるが、これは眞淵の語意考の說を承けたものである。次に、

雅言ト云ハ、後世次第ニ歌文章ナド作ルニ隨ヒ、其詞ノ遣ヒザマノヨロシキニタヨリテ、悉曇韵鏡ナドニ合セテ、愛クナセルナルベシ。辭ハカヘリテ俗言ガ上古ノ儘ナルベシ。

といふ變つた意見をのべてゐる。なほ語源の解釋については、

詞ハ一方ニ思ヒ定ムマジキ也。其故先アラマシヲイハン。譬バ曉ハ明著、明時、曙ハ明彷彿、明始、徒跣ハ肌足、徒足……如此サマ〳〵ニ通フガ辭ノ靈妙也。然レバ此ガ是彼ガ非ト云ガタシ。心スベシ。

といふ意見である。かういふ次第であるから、

皇國ノ神代ハ知ラズ、橿原ノ御世ヨリ今ニ二千五百餘年ノ後、四海穩ニシテ何レノ學ビモ古ニマサレリトハイヘドモ、イマダ言語ノ元ヲ委シク尋エタル人ナシ。適予愚才ヲ以テ中々探リエタルトニハアラネド、年久シク嘗神ニ祈ヒテ晝夜思ヒメグラシ考ヘツルコトドモヲ書ツラネ、並ビニ古書ノ中ニ稀々殘レル語釋ヲ拾ヒアツメテ、言語ノ元ノ梯ニモナレカシト、斯ハモノセルナリケリ。

といつてゐる本書も、今日では成功したものとは言はれない。

これでは循環してゐるだけで何にもならない。

天（アマ）　青間（アヲマ）　青（アヲ）　天居（アチ）　藍（アヰ）　天居（アヰ）　青ニ同ジ　天色（ソライロ）トモ云也

搔（カユシ）　搔忌々（カキユユ）シ　雷（イカツチ）　光祇（ヒカツチ）　髮（カミ）　毛群（ケム）

これらでその一斑は推察せられるであらう。要するに常識的語源說である。

千引は天保五年（一四九四）九月に六十五歲で歿した。言元梯の大略は文政十三年（一四九〇）十一月二十五日の日附であるが、出版は天保五年十二月で、著者の歿後であつた。

宣長の門人で、上代の假名について丹念な研究を殘した石塚龍麿は、遠江國敷智郡細田村の人で、通稱を安右衞門といつた。天保六年（一四九五）に歿した由であるが、享年は明かでない。著書には古言清濁考、假字遣奥の山路等がある。何れも宣長の研究をついで大成したものである。

古言清濁考は三卷、寬政六年（一四五四）の自序があり、本居宣長の序文もあつて、享和元年（一四六一）に刊行になつた。はじめに古事記等に於ける假名の清音の字、濁音の字をあげ、次に清濁通用の字をあげて、さて五十音順に言葉を配列して一語每に清濁を示したもので、宣長も玉勝間四に、古言清濁考の事と題して、古書の假名遣の正しいことと、古言の清濁が今言のそれと違ふものは、古へと今と發音が變つたのであつて、通じて書いたのではないことなどをのべて、

そも〳〵おのれ、此清濁の、古へ今とかはれることに心つきて、いかで今のならひにかゝはらず、古書のかなにしたがはばやと、はやくより思ふことにて、すでに古事記傳のはじめの卷にもいひつれども、いとまなくて、もろ〳〵のことばの清濁をあまねくかんがへわたすことあたはずして、いとくちをしく思ひわたれば、友だちにも此事つねにかたりけるに、おのがをしへ子に、遠江の國ふちの郡細田村の人石塚の龍麿なん、この事に心おこして、古書どもをあまねくくはしくかんがへわたして、此ちかきほど古言清濁考といふふみをあらはしたりける。此考によりて見れば、おのれさきにあらはしたりつる神代正語などにも、なほまれ〳〵にはかんがへ及ばざりしこともある也。いにしへまなびせむともがらは、此清濁考、かならず見べき書ぞかし。

と賞讃してゐるのである。

假字遣奥の山路は、前講五二頁以下にものべた。寫本三卷、寛政十年(二四五八)九月の本居太平の序があるから、その年までには出來てゐたものと考へられる。假名遣の研究としては極めて特殊なもので、古事記傳一にある宣長の說にもとづいて、古事記・日本書紀・萬葉集の假名用法を、極めて詳細に丹念に研究したもので、或は資料とした諸書の校合が不十分であつたり、或は文法上の考が十分に明かでなかつたりした爲に、例外が多くなつてゐるといふ不完全は免れないが、どこまでも事實に忠實に研究をすゝめて、エキケ以下十三音の假名遣には二樣あつて、その一方に用ひられる假名どもと、他方に用ひられる假名どもとの間には、儼然たる區別があつて、其間に混亂がないといふことと、その他の音をあらはす假名は、種々の文字が用ひられてゐても、皆相通じて用ひられてゐるといふことを明かにしたのは、その大きな功績である。この書は最近までその眞價が那邊にあるか知られなかつたのであるが、橋本進吉氏によつて、その眞價が明かにせられた。最近には日本古典全集第三期の刊行書の中に加へられて、版になることも出來た。それには大正六年十一月の帝國文學誌上にのせられた、橋本氏の研究が卷頭に轉載せられてゐる。

同じ宣長門で、語學にすぐれた見解をもつてゐた人に、鈴木朗がある。名古屋の人で、儒學にも造詣深く、尾張藩主には儒を以て仕へた程である。國學を研究して一家の見を立てゝは、漢籍を說くにも皇朝に參考して、特異な說を立てので、愈々その聲譽は高くなつたといふ。國語關係の著書には、雅語音聲考、雅語譯解、言語四種論等がある。天保八年(二四九七)に七十四歳で歿した。

雅語音聲考は語源に關する研究として異色あるものである。文化十三年(二四七六)九月十五日附の本居太平の序があつて、

この音聲考は早く太平が見しは十年あまり五年ばかりをちつかたになもありけるを、したがきながら久しくたゞ同じ心の三人四人に見せられけれど、さてありけるを、近きころは古事學び世にみちさかりとなりて、さま〳〵心々にたてゝはげむなるもあれば、又同じ心なるもおほかるべく、見まほしがるもおほからましを、摺卷ならましかばとすゝむるもあるにより、こたび板にゑらせられたるになもある。

と言つてゐる。これでみるとその三十七八歳の頃出來てゐたものと考へられる。

言語ハ音聲也、音聲ニ形アリ姿アリコヽロアリ、サレバ言語ニハ音聲ヲ以テ物事ヲ象リウツス事多シ。下ニシモ□ジトモジノ附ク詞ハ本ヨリニテ（キラ〳〵シ、スズシ、フト入、サトカヲルノタグヒ）サラヌ詞ニモ亦多ク是アル事

ヲ、人多クハ心ツカズ。今其大概ヲ顯ハサントシテ、ソノ類ヒヲ四ニ分ツ。一ッニハ鳥ケモノノ聲ヲウツス、二ッニハ人ノ聲ヲウツス、三ニハ萬物ノ聲ヲウツス、四ニハ萬ッノ形有樣意シワザヲ寫ス、是也。

といつて、その四種類について例をあげて說いてゐる。その大略は次の如くである。

1、鳥獸蟲の聲をうつした言葉

郭公のホトトキ、鶯のウクヒ、きぎしのキギ、鶏のカラ、鶏のカケ、雀のスス、いばゆ・いなくのイ、の類

郭公は、今はホゾンカケタカ、又はテツペンカケタカなどと鳴くといふが、古人はその聲を、ホツトツホト、キとか、ホツトツトキトキとか聞いたのである。鶯も今はホオホケキヨときくが、ウ、ウクヒともきけばきこえる。きぎしは今はケンケンといふが、古人はキイキイと聞いたのである。雀の聲も古人はシュ〳〵ときいたのである。萬葉集には、「馬聲」の二字をイの假名にあてた所がある。馬の聲をイと聞いたので、いばゆ、いたなくなどの語が出來たのである。

2、人の聲をうつした言葉

吹くのフ、吸ふのス、咬むのカ、吐くのハ、うめくのウ、笑ふのワラ、の類

咬む音は今カリカリといふ、そのカである。吐くのはバットはく、そのハである。

3、萬物の聲をうつした言葉

瓦のカハラ、ゆするのユス、さやぐ・そよぐのサヤ・ソヨ、とよむのトヨ、たたくのタタ、ふためくのフタ、の類

瓦は相觸れる時の音である。ゆする音は今ユサユサなどいふそれである。とよむ音は今ドヤ〳〵などいふ。ふためくのフタは、あわててバタバタやる音である。

4、萬の形有樣意しわざをうつした言葉

明、赤、有、鮮等のア、

晴、張、原、平（ヒラ）、開（ヒラク）、

これらは皆開口音で其有樣こゝろばへを寫したのである。

雲、曇、限、潛る、黑し、暗し、

これらは皆合口音で、クの音に意味があるのである。

初の三つは、聲をもつて聲をうつしたのであるから、了解し易いが、最後のは、形有樣こゝろを聲にうつしたのであるから、了解に困難である。

著者は終りに次のやうな意見を添へてゐる。

凡テ下ヲトモジニテ承テ、漢語ニ何然（ゼン）、何乎（コ）ト云タグヒノ詞ハ、大カタ音聲ニテ形容シタル詞ナリ。又下ニツクテニハノシ＝ケシ＝ヤカ＝ラカ＝メクノ類ヒノ上ノ詞モ亦同ジク、皆々音聲ニヨレル言カト尋ルニ、多クハサモアラヌハ如何トイフニ、音聲ニ因テ言語ノ出來ルヨリ、言語ニハオノヅカラ言語ノ意アルヲ、ヤガテ其言語ノコヽロヲ以テ物事ヲタトヘ象ドル事アリ。音聲ノコヽロハ本ニシテ事セバク、言語ノ意ハ末ニシテ事廣シ。タトヘバキラ〳〵シ、スヾシナド云ハ音聲ノ意ニテ象リタルヲ、ミチ〳〵シ、物々シナドハ、言語ノ意ニテ象リタルモノナ

リ。此二ツノ別チアル事ヲシルベシ。

然ラバ言語ノ本ハ專ラ音聲ノ意ニヨルモノ歟、答云、音聲ヲ以テ言語トスル時ニ、コヽロアル音聲ト心ナキ音聲トアリ。二ツ共ニ言語トナリテノ後ニハ、言語ノ上ノ意アリテ、其コヽロ輾轉變化シテ萬事ノ用ヲナス。心ノナシニテ言語ノ意カヘリテ音聲ニウツル事アリ。カノ道々シ、物々シノタグヒナリ。サレバ盡ク音聲ノ意ト思フハ頑シ。サレド世ニ雅語ノ意ヲ解ク者、タヾ同ジ詞ノタグヒヲアゲタルノミニテ、本語ヲトキ得ツト思ヒ居ルメル、ソレハ猶本ニハアラズ。言語ノマコトノ本ハ音聲ナリ。

要するに、言語の本は音聲で、種々の音聲を象つて言語が出來る。その言語は自然言語として特別な意味をもつやうになり、其言語からまた種々の言語が發達してゆき、それらは言語からの發達で、音聲を象つたものとは言はれないが、言語發生の根本は自然の音聲を象つた所にあるのだといふ、所謂言語の擬聲的起源說を主張したものである。

言語の起源に就ては西洋に於ても種々の說が行はれた。或は神の賜物だといひ、或は人間には自然に言語を生み出す能力があるのだと考へ、或は苦痛恐怖愉悅等に際して反射的に發する聲が起源であると考へた。然し國によつて同じ思想に對してそれを表はす言語が違ふのはどういふわけか、生來の聲は必ず啞であるのはどういふわけか、反射的に發する聲が如何にして意識的に發する言語となるか、右等の說は夫々之等の問題を解決しない。感情的叫聲や自然的音聲を、模倣した音聲が語根となつて、種々の言語が發達したといふ擬聲的起源說は、小兒が如何にして言語を學ぶかといふことも說明出來て、言語の起源に關する一部の眞理を闡明したものとして、現今の言語學者に承認せられてゐるのであるが、これに關する有力な研究が我國に於てもかく鈴木朗の手によつてなされたといふことは、偉とすべきことである。

雅語音聲考は本文が十二枚ほどのものであるが、その研究はかくの如く注意すべきものである。今はこれに二十七枚ほどの希雅といふ書を合せて一冊になつてゐる。希雅といふ名は、

希ハ老子ニコレヲ聽テモ聞エザルヲ希ト云ト有ニ因テ聲音微妙ノコヽロ、雅ハ爾雅ノ雅ニ本ヅキテカヽルモノニハ多ク名トスル事也。

といふわけで附けたもの、その內容は、

此書ハ漢語ノ音聲ノ考也。明ス所ノ事スベテ三アリ。一ニハスベテ何レノ國ノ言語ニモ、音聲ノ音イロトヒヾキトヲ以テ、物ノコヽロヲ寫シアラハス事ノ多キヲ、漢國ニハ殊ニ是オホシ。サレバ急ハ早ク緩ハユルク、清ハスミ濁ハニゴル。鳥獸ノ啼コエ、萬物ノ鳴ル音ヲ直ニ寫セルハイフモ更ナリ。二ツニハ其本一ノ詞ヲバ音ヲ其マヽニシテ韻ヲカヘ、或ハ韻ヲ其マヽニシテ音ヲカヘナドシテ、種々ノ言語トナリ、文字ノ形モ樣々ナレドモ竟ニ本語ノ意ヲハナレズ。三ニハ漢國ノ言語ハ聲スクナク意多キ故ニ、文字ヲタノミテ分チトス。サレドモ文字ニ假借ノ用ヒ方多キニ因テ、或ハ迷ヒ或ハ惑ル。今其音聲ニ據テ本語ヲ尋定ム。

といつてゐるやうに、漢語の音聲を研究したものである。

陽、暘、　煬ハ揚也。

陰、霠、　暗、　湮、　淪、　泯、　深、　死、　澌、　雌ハ沈也。

是等ハ其意韻ニアリ。

といふやうな風である。

雅語譯解は雅言を俗語で解釋した、いろは引雅言辭書ともいふべき一冊の小形の書である。文政三年(一八四〇)の市岡猛彦の序がある。刊行は文政四年である。

言語四種論は文政七年の刊行、一卷、言語全體を四種に分けて論じたものである。一體從來の國語研究はテニヲハとか活語とか特殊のものゝ研究ばかりで、國語全體を何種かに分類研究するといふことは、富士谷成章が、名・裝・脚結・挿頭の四種に分けた外にはないのである。賜のこの研究も成章の影響を受けた所があるかも知れないが、分け方は必しも同じではない。即ち一、體の詞　二、手爾乎波　三、形狀の詞　四、作用の詞の四種で、體の詞は今の名詞に當り、作用の詞はラ行變格を除いた動詞に當り、形狀の詞は形容詞とラ行變格とを含め、手爾乎波は頗る範圍が廣くて、成章の脚結ばかりでなく挿頭までも一緒にしたものゝやうである。彼はいふ。

體ノ詞ヲ二ツニ別クレバ、形アル物ト形ナキ物トノ違ヒアレドモ、總テ物ニテモ事ニテモ形狀ニテモ理ニテモ一方ニ定メテ指シ呼ブ名目ノ詞ハ皆是ナリ。用ノ詞、ハタラク詞活語ナンド、古來一ツニ言來レルヲバ今形狀・作用ト分チテ二種ノ詞トセルハ、終リニツキテハタラクテニヲハノ、本語ニツキテキレ居ワリタルモジノ、第二ノイノ韻ナルト、第三ノウノ韻ナルトノ差別ナリ。

つまり終止形がイ列の音であるか、ウ列の音であるかによつて分けたので、美し、遙なり　等は前者であるから形狀の方、書く、見る等は後者であるから作用の方といふことになるのである。

テニヲハと他の三種の詞との區別は次の如くのべてゐる。

（三種の詞）

サス所アリ

詞ナリ

物事ヲサシアラハシテ詞トナル

玉ノ如シ

器物ノ如シ

テニヲハナラデハ働カズ

（天爾乎波）

サス所ナシ

聲ナリ

詞ニツケル心ノ聲ナリ

緒ノ如シ

器物ヲ使ヒ動ス手ノ如シ

詞ナラデハツク所ナシ

その類別は次の如くである。

獨立チテ詞ヲ離レタルテニヲハ

アヽ、　アハレ、　アハヤ、　アナヤ、　ヤ、　ヤヨ、　ヲ、　イナ、　ヲヽ、　ウ、　幾、何、誰、

詞ニ先ダツテニヲハ

ハタ、　イデ、　アニ、　ナドカ、　ソモソモ、　マタ、　ナホ、

詞ノ中間ノテニヲハ

ノ、　ツ、　ニ、　ヲ、　ハ、　バ、　モ、　カモ、　ゾ、　シ、　ヤ、　コソ、　イ、　ト、　ド、

詞ノ跡ヲウケテトムルテニヲハ

カ、　カモ、　カナ、　ガ、　ガモ、　ガナ、　ナ、　ゾ、　ヨ、　ネ、　モ、　ハモ、　ヤ、　ハヤ、

ヤハ、　バヤ、　カシ、　ラシ、

活語ノ終ニツキタルテニヲハ

形狀ニハ　シ　リ、作用ニハウ韻十二、

附クニハアラデ跡ヲウケ、又中間ニモアリテ切レモ續キモシテ動クテニヲハ

ゴトシ、　ベシ、　マシ、　リ、　タリ、　ナリ、　ケリ、　メリ、　ラン、　セン、　テン、　ヌ、　ツ、　ス、

かうして種々雜多なものをテニヲハとして一括してゐるのである。中で最も不思議なのは、前の形狀の詞と作用の詞との區別を述べてゐる所でも、今の「活語ノ終ニツキタルテニヲハ」といつてゐる所でも考へられるやうに、所謂用言の語尾をもテニヲハと見てゐることである。これでは言語四種の分類の標準がぐらついて來る。山田氏の日本文法論に、この點を評して、

既に其の語尾が豆爾乎波たらば、かの形狀作用の詞は正に二分せられて、一は豆爾乎波として存し、他は氏の所謂體の詞か何かになりて存すべく、形狀作用の詞といふは、二者の合せ用ゐらるゝ偶然の現象にすぎずして、單語分類上の實體として取扱はるべきものならぬにあらずや。この點に於いて、氏の說は自らの手にて致命傷を負へるものと斷言するに憚らざるなり。

といつてをられるのは、もつともなことである。

さて四種の言葉の起源について、著者は次のやうにのべてゐる。人心活動の狀態が音聲に顯はれたのがテニヲハの始めであつて、これは言葉の骨髓精神である。次に音聲を以て萬物に名稱をつけて之を區別するのは體の詞である。體の詞にテニヲハをつけて之を活かして用ひる時、形狀と作用の二種の言葉となる。要するに根本はテニヲハの聲と、萬物の名目の聲との二つに過ぎない。

言語四種論は本としては僅か十二三枚の薄いものであるが、かうしてとにかく言語全體を分類して論じてゐるといふ點で注意すべきものである。

德川時代の國語學者の中で、最も純粹に國語のための國語研究をしたものとしては、何人も義門師を逸することは出來まい。義門は若狹國小濱の妙玄寺第五世傳瑞の季子として天明六年(一七八六)七月に生れた。その祖が三河國東條の出なので、東條義門ともいふのである。幼い時から學問好きで、父には九歲の時死別したので、叔父慶海について宗書經論の學をうけたが、分陰を惜んで勉强し、夜ねむくなると烟草のやにを目につけて睡氣をさましたといふ話もある。長じて丹後國田邊の願藏寺の住職となつたが、文化四年その二十二歲の時、兄の實傳がなくなつてから、妙玄寺の住職となつた。生れつき弱々しくて、常に藥にしたしみ衞生につとめてゐたが、病中に於ても每朝行ふ佛祖の給事は之を怠らず勤めたといふまじめな人で、學問以外にはまた事もなく、技藝の方面には一切手を出さなかつたといふ。

國語の方面では、宣長や春庭の著書を愛讀して發明する所が多かつた。文化八年その二十六歲の時、宣長門の逸才藤井高尙の門に入つたが、奈萬之奈の初稿はその三年前に成り、この年には活語指南の前身である詞の道しるべの稿も出來てゐたのである。藤井高尙は松屋と號し、備中國吉備津神社の宮司で、源氏物語などの研究深く、消息文例と

いふ中古の消息文を研究した著書もある。天保十一年義門五十五歳の時七十七歳で歿した。さて義門の研究は、僧侶としてとらはれたかげがなく、全く公平冷靜に、事實に對して忠實であるのがすぐれた點で、宣長や春庭の研究の補正せられた所が多く、國語學上頗る大きな貢献をなしてゐる。天保十四年(一八四三)八月十五日に、五十八歳をもつてなくなつたが、その著述の主なものは次の如くである。

指出の磯　一卷　文化十二年成。

磯の洲崎　一卷　文政三年成。天保十二年九月補。天保十四年指出の磯と合せて一册として刊。前講二二九頁參照。

友鏡　一鋪　文政六年刊。前講一八三頁參照。

玉の緒繰分　五卷　天保二年起稿、同十二年刊。前講一八四頁參照。

於乎輕重義　二卷　文政十年成。前講八六頁參照。

活語雜話　三卷　第一編は天保四年起稿。同九年成、十年刊。第二編は天保十年成、十一年刊。第三編は天保十一年成、十三年刊。前講二二七頁參照。

山口栞　三卷　天保四年成、同七年刊。初稿は早く文政の初年に出來たのである。前講二二二頁參照。

和語說略圖　一鋪　天保四年成、同十三年刊。前講一八四頁參照。

奈萬之奈　三卷　天保六年成、同十三年刊。前講九〇頁參照。

活語指南　二卷　天保十一年成、十二年刊。これは平井重民撰、東條義門訂とでもいふべきもので、義門自身の撰にかゝる初稿本は別にあり、これより三十年程前に出來たのである。前講二二〇頁參照。

活語餘論　三卷　第一卷は天保十三年成。前講二二八頁參照。

宣長が漢字三音考や字音假名用格に於て、我國の字音にはンの韻について舌內唇內の差別はないと說いたあやまりは奈萬之奈に於て正された。宣長の字音假字用格中の卓說である「おを所屬辨」は、於乎輕重義に於て十分の根據を與へられた。その他宣長の紐鏡に對するこの友鏡、詞の玉緒に對する玉の緒繰分、何れも前者の補正である。また春庭の詞八衢はこの山口栞によつて正され、かつ八衢にかけてゐた形容詞の研究は、これによつてみたされた。かうして義門の事業は、本居宣長と春庭との研究の補正にあつたといふ事が出來よう。概していへば總合的研究といふ方面には缺けてゐるけれども、國語に關する部分的の研究は精微を極め、考證の確實、論斷の公平といふ點に於て、後世の國語研究者を益することは尠少ではない。殊に活語雜話山口栞、活語指南、活語餘論等の書に於ける研究で、活用の形式上の研究は殆ど完成せられたといふべく、明治の文典はこれらに負ふ所が頗る大きいのである。

最後に一つ注意することは、玉の緒繰分に於て言語の分類を試みてゐることである。これより以前この方面には、富士谷成章の分類法があり、鈴木朗の分類法があつた。義門の分類は鈴木朗の言語四種論を見て後の說である。即ち次のやうにある。

わが右四種論をばよしとは諾ひながら、少しみちかへてわけ行やうは、一切言語を先二にして體と用となりとい

ひ、其體の中に有形のと無形のとわかるゝ、其無形のゝ中自らいはゆる語辭なるあるあり。さて用の中に形狀作用相別れ、其形狀四に別れ四の中に初の一が又別れて二となるとし、さて作用すべて三十五箇の活きとする中に、自ら八ちまたの四種幷變格等皆攝まる事、一ひらの紙だにひろぐれば一目瞭然とか云らん樣に識られぬべう物したるが和語說略圖なり。かくていはゆる體用とわけ有無形と名づくるやう、又形狀作用のけぢめ等は、活語指南に辨ぜるが如し。

さてその「活語指南に辨」じてゐるのは次の如くである。

活クトハ、タトヘバ思ト云ハ思パン・思ヒ・思フ・思ヘ、斯樣ニはひふへト動ク類、スベテ略圖ヲミテ曉了セヨ。

活カヌトハ、君ガ思ヒ我思ヒナドト云トキハ、思ヒト云ガ一名目ナレバ、コレ即體ノ言バニテ、活動セヌ詞トナル、コレヲ體言ト云。思ヒハ元來ハ用言ヲ體言ニセルニテ、原ヨリノ體語ナラネド、物ノ名事ノ目トナリテ活動セヌトキハ、全コレ體言ト云物也。產ヨリノ體言ト言ハ雨土人鳥ナドト云モノ是也。斯ク分ルガ本體ノ分レ也。ソレニ又上ニイヘルスベテ物體ナキ詞ニテモ、タトヘバ語辭ノ中ニのやナドハ體ト云ヒ、けりぬるナドハ用ト云如キヲ心エ置テヨ。けりハけら・けり・ける・けれト動クユヱ活用スルカタニマカセテ用ト云フ。コレハキコエタレドのやナドヲ體ト云ハ、ツマラヌト難評スル人モヤアラン。サレド此レハイハユル活用セヌ方ヨリ、シバラク體トイヒオク也。トガムルコト勿レ。

これによれば次の如き分類となる筈である。

- 語
  - 體言
    - 有形…雨、土、人、鳥、などの名詞。
    - 無形…思ひなどの名詞、代名詞。助詞までも。
  - 用言
    - 形狀
    - 作用

さて「形狀四に別れ」といふのは、和語說略圖によれば(一)形容詞、これが更にク活用とシク活用の二に別れる。(二)過去の「き」、(三)打消の「ず」「じ」義門はこれを一つと見てゐる。(四)「有り」で、有りの中には、なり・たり・けり・めり及び四段活用とサ行變格活用とが、書けり・せりなどなる形をふくめてゐる。「作用すべて三十五箇」といふのは、四段活用、二段活用、一段活用、變格活用の各行、助動詞「む」「まし」「んずる」等の合計である。かうして見るとき、まづ體用の二言に分け、その各々を有形無形、形狀作用等に二分したありさまは、いかにも秩序整然といふべきであるが、これに實際の言語をあてはめて活用しようとすると、頗る妙な不便な分類でなければならぬ。山田博士の日本文法論にこの分類說を批評して、結局、

氏は活語及亙爾乎波に精通せられたれど、言語全體の分類に關してあまりに力を盡されざりしが故に、其の研究は目立ちたるものゝなきなり。而して氏の說の難點は實に語辭の處置如何にあり。

と言つてをられる。西洋文法の分類の如き手本とするもの無しに、混沌たるものをそれ自身について分類するといふことが、いかに困難なことであるかを思ふ。

宣長の學問を承けて、國學を宗教のやうなものにまで擴大させた偉大な人物は、平田篤胤である。この人は秋田の藩士大和田清兵衛祚胤といふ人を父として、安永五年(一七四三六)八月に生れた。八歳の時から藩儒中山青莪について漢學をうけたが、幼少の頃からすぐれた才をもつてをり、容易に人に屈せない志氣をもつてゐた。弱冠、家庭の事情から意を決して單身江戸に出たが、賴るべき親戚故舊もない所とて、或は大八車夫となり、或は消防人足となり、或は俳優の許に寄託するなど、生活の爲に種々なくるしみをなめたが、常に學問の事を忘れず、閑を偸んでは讀書してゐた。遂にすゝめられて常盤橋外の某家の炊夫となつたが、こゝでは飯を焚き終れば別に仕事がないので、刻苦甚だ勉めてゐた。所が偶々備中松山の城主板倉侯が常盤橋見付の勤番に當つて、彼の讀書の聲をきいて異とし、その臣平田藤兵衛をしてその素性を糺さしめたのが緣で、平田家に寄食することになり、ついでそこの養子となつたのであつた。時に二十五歳で、これから平田篤胤と稱することゝなつたのである。

篤胤は一日古紙の中から古事記を發見してよみ、はじめて皇國の古學の研究に志し、二十六歳の七月に伊勢に行つて、宣長に刺を通じて入門した。しかし宣長の門人中には篤胤をにくむ者が多くて、宣長の生前には親しく敎をうけることが出來ず、とかくするうちに宣長の歿するにあひ、遺憾の涙に沈んだのであつた。かういふ次第であるから、學統は宣長にうけてゐても、その古學の上の造詣は獨學によつて得たものゝやうである。二十八歳の時には太宰春臺の著書を辯駁して「呵妄書」といふのを著し、二十九歳の時から門戸を張つて敎授し、以後年々著述も出さぬことなく聲望次第に高くなつた。

文化八年その三十六歳の時、門弟柴崎直古の鄕里駿河國の人々の請ひに從つて、直古の家に寓して諸子に敎授せられたが、その年の末、暮や春のいとなみのためにと敎授を休み、自身は直古のえらんだ靜かな一間にこもつて著述に耽つた。その時古史徵の稿を成したのであるが、彼はそれを書くに、八日七夜といふもの夜の衾を近づけないで書き上げた。さて暫く眠るべしといつて一日二夜をねつづけたといふ。以てその精力と熱情とを察すべきである。かうして篤胤の著書は頗る多いが、その多くは敬神尊皇を本領として國學を稱道したものであつて、幾つかある語學に關する著書も、さうした精神にわざわひされてゐる所が多いのである。天保十四年(一八五〇三)閏九月に六十八歳で歿した。

國語學史上から篤胤といへばすぐ思出されるのはその神代文字論である。神代文字論については前講にも大略のべた所であるが、彼は最初は神代無文字論者であつたが、古史徵開題記から有文字論にかはつた(前講一〇六頁)。そこには、太古の龜卜などの兆が文字の濫觴で、思兼命が文字を製作し、それには象形のものと音標のものと二種あつたのであらう。そしてそれは漢字が渡來して盛に用ゐられるやうになつて次第に隱れてしまつたものであらう。弘法大師のいろはは、漢字の草書から、神世文字の形にならつてこしらへたものであらう、といふやうな說をのべてゐる。

さて上古には其神世の假字をもて物は記つるを、漢字渡りて後に、その神世字と同音の字を撫ひて記すことを始つれど、本より麗美き書風を止て、詰詘しき漢字を書ことは、皇國の風に合ざる故に、漢人のごと書とはすれど、自然に優美くなだらかに草書にものして、雲の如く煙の如き手法の止ざりけむ故に、後に空海法師がその草書を撫ひて、以呂波字を製れると通えたり。其は上に引ける文に、伊呂波者弘法大師作之由申傳歟、此者自昔傳

來之和字作成伊呂波之起也と見え……

古史徵開題記に於ける神代の文字の說は、推測ばかりで、神代文字の實例は見せてゐない。それはまだ彼が神代文字と信じて人に示すべき材料をもつてゐなかつたからで、要するに神代に日本固有の文字がなくてはならぬといふ考へを根本において、古人の記錄を都合よく引用して推測を加へてゐたのである。が、やがてその實例とすべきものを集めて世に示した。即ち神字日文傳である。古史徵には文政元年(一二四七八)十二月の山崎長右衛門の序がある。日文傳には、文政二年五月八日に考へをへたといふ記事が終にある。

日文傳は本文は上下二册、彼が確なものと信じた日文、即ち神代の文字十三通について考證してある。それに疑字篇が一册附錄してあつて、合せて三册、德川時代の神代文字存在を說いた書中の最大なものであるが、その根本とする所、即ち朝鮮の諺文はこの神代文字の日文から出たのであるとして、諺文と類似してゐる點を辯明したのが全くの謬りで、却つてその所謂日文の方が諺文から出たものだらうといふことに現在はなつてゐる。要するにこれは篤胤の國體に對する熱情が、あやまつた方面に働いて、それにわざわひされたものである。

古史本辭經も篤胤の著であるが、この中の所說も學術的とはいはれぬ所が多い。これは一名を五十音義訣と云ひ、四卷、天保十年(一二四九九)に成り、嘉永三年(一二五一〇)に刊行された。五十音によつて國語の起源を述べたもので、書名については次のやうにいつてゐる。

古史とは古事記日本書紀の二典を云ふ主とは此の二典の古訓に據らむと欲ればなり。さて本辭とは、古事記の序なる大詔命に、朕聞諸家之所賫帝紀及本辭旣違正實多加虛僞云々と有る帝紀は歷朝の御紀を詔ひ、本辭とは古き辭書(コトバブミ)を指せる御語なれば、即ち此の御語に據れり。さて本辭の二字はこゝに取て、其の古語の本辭と稱(イ)ふべき語を稽ふるに、必ず二言の語に極りて、其の語凡(スベ)て二千二十五言ぞ有ける。姑く是に五十聯(イツラ)の音の一言なるを合すれば、二千七十五言、これ本辭にして、此の餘に三言四言五言六言なる語いく千萬づの限り無らむも(此の本辭の外なるは)異國の語を除ては、唯一つだに有こと無く、今集むる言ども即ち有ゆる言語の經言(タテゴト)なるが故に、乃ち經とは名くるなり。

といつてゐる。右の文中二千二十五言といふ數は如何にして出たか、これについては五十音活用第四に次のやうにいつてゐる。

十行五十の每音に各々五十音を重ねて二言に作り、章々類聚すれば、古書なる例を强ひて探索(アナグリモト)むるに及ばず、有ゆる言語盡く出來て、其の本義及び活用の格例共にいと炳(アキラカ)焉に所(シラル)知めり。

かういつて、例へばア行でいへば、

第一章				
阿	加	加	加	加
久	伎	伎	伎	伎
伊	祁	祁	祁	祁
久	古	古	古	古
宇				
久				
延				
久				
於				
久				

○初段は明、二段は活、三段は受、四段は●、五段は置の活機なり。

阿行に加行の從ふ諸言はすべて是章に就て考ふべし。

といふやうな圖をア行にサ行、ア行にタ行といふやうに順次にこしらへて、

上件の本章すべて十章、その章ごとに五五二百五十言にて、十章都(スベ)ては二千五百言なるが、是にて皇國の有ゆる本辭は更なり、夫日放る國、彼の日の沒(イ)る國及び宇宙萬國の音韻言語をも網羅し竭せり。

……さて右本章合せて二千五百言の中に、皇國に是なき下に阿行の从ふ二百二十五言と、上に良行のつく二百五十言と、合せて四百七十五言を除けば、二千二十五言となる。

かうしたやり方であるから、そこに無理があることは言ふまでもないことであらう。さうして彼はいふ。

抑々是の二千二十五言はも、天地初發の時より神の御世經て傳はり來りし天つ語の、皇國に有ゆる言語の限りなるが、此をまた神ながらに、諸の外國にも普ねく傳用せしめ給へりとは所聞(キコユ)る物から、憐むべし、其國々の民等素より蠢化の鈍口(ニブクチ)にして、皇國の如く音韻明亮ならず、其の上に轉(ウタ)さの本言を訛(ヨコナマ)りつゝ、竟に皆共に侏離鴃舌の音とも成終(ナリハテ)たりける

こゝに至ると眞淵や宣長に一層輪のかゝつた議論である。

この書の目次とその説の大要を述べるならば、卷一、發題叙言第一は眞淵の語意考の説を祖述したもの、五十音古圖記第二は宣長の漢字三音考や字音假字用格を祖述したもの、五十音圖訂正第三には五十音圖は宜しくワ行とラ行と入れかへて、ラ行を最後におくべきことを説き、五十音活用第四には語意考の初體用令助の區別を説いてゐる。卷二に入つて、喉音三行辨論第五では、字音假字用格中の喉音三行辨に基いて之を補正し、五十音義解上第六及び卷三の五十音義解下第七では五十音の音義についてといてゐる。次に古言清濁説第八、卷四に古言延約通略等の説第九、古言學の由來第十があつて終である。

五十音義解に次のやうにある。

實や五十音の義解は如此もやと思ひ設たりしは今の天保十年巳亥の歳より指をりて數ふれば、早く四十年餘りの昔、享和と云ひける年頃にて、尾張人鈴木朗が江戸に在りしほど、互に語り相ひたるが始なりき。後に朗が雅言音聲考とて少(イサ)か書たる物も有けり。其より後に見しは、賀茂の宇斯の敎子と聞えし、信濃人光枝と云へるが國辭解とも辨とも云ふ物なり。是らは少か見つべき説も無きに非ず。今し世に語釋家、言靈家など稱ふ末輩らの、何くれといふ説等の往々耳に入る事も有れど、意義の起りを釋得たる説は一つだに聞えずかし。

次に篤胤の説き方をア行について少しく抄出してみるなら、

阿阿良 阿— 伊伊理 伊— 宇宇流 宇— 延延禮 延— 於於呂 於— 是の行の五聲は日文傳に云へる如く、彼の喉音の元なる宇の聲其の父聲となり、五母韻と相ひ偶して齊(トヽノ)へる聲(ドモ)等なるが、其の音象(オイロ)を按ふに、阿は阿良理としたる聲、伊は伊理々(ア)としたる聲、宇は宇流理としたる聲、延は延禮理としたる聲、於は於呂理としたる聲にて、共にかく良行の五聲その形象(アリサマ)を助けて、先其合口言なる宇流てふ言の出來しよりぞ、其の音義を成たりける。……さて阿—といひ阿—と打出ることは、見る物あり聞く物ありて、其の情(コヽロ)中に感(ウゴ)き、其を指し歎くより發る聲なる故に、自然に現在の義あり。亦その指云ふ方より遂に彼の字の義を成せり。本篇の阿良より阿和に至る九段の阿、みな此の義に漏るゝ事なし。其は是の阿の聲に上の件の譜の如く、良行の五聲相副へば、阿良・阿理・阿流・阿禮・阿呂と活きて、新(アラ)・有(アリ)・荒(アル)・被(アレ)・主(アロ)などの祖言なるは更なり、加行の從ふは彼日(アカ)・赤(アカキ)・明(アク)・飽(アク)・彼所(アコ)、佐行の從ふは朝(アサ)・葦(アシ)・淵(アス)

汗・遊……是等の阿みな彼ア の義なるを以て知るべし(下略)。

古言學の由來には古學の歴史が概説してあるが、その終に、村田春海の五十音辨誤と伴信友の假字本末とについて春海や信友の攻擊をしてゐる。前講八五―六頁、一〇七―八頁、及び一四五頁にその一部分が引用してある。

伴信友は若狭國小濱の藩士で、山岸次郎太夫惟智の第四子として、安永二年(一七七三)二月に生れた。幼名は鋭五郎、後に州五郎と改めた。伴平右衞門信當に養子となつたので、伴氏を冒したのである。藩主酒井忠貫、忠進の二君に歴任し、厚く用ゐられたが、文政四年四十九歳の時、病によつて致仕し、以後は志を和漢の學に潜め、敬神尊皇の志篤く、專ら國史神典を研究した。平生本居宣長の學風を慕ひ、享和元年その二十九歳の年の十月、村田春門といふ人を介して入門を乞うたが、春門の書面がついた時は宣長は既に沒してゐたので、宣長の嗣子太平はその志に感じ宣長の靈前にその名簿をそなへて門下の列に加へたのであつた。信友はその後屢々書を贈つてその遺説を問ひ研究をつゞけた。その資性溫厚篤實、謙遜であつた。門弟となることを希望する者が多かつたが、皆これを辭し、吾が學人の師となるに足らずといつて、學友と呼んだ。紀州藩の加納諸平に贈つた書に、

(前略)　生涯博士だちたる心を持ち玉はず、人にも書にも問ふ事をな忘れ玉ひそ。自ら師とならんと思ふ一念あれば、直に學事に損なり。師と稱し候は人より恭ふ稱なり、弟子と稱すれども教を受くるものの稱なり、師と云ひ弟子と云ふも、自らの口より云ふべき詞にあらず。殊に御國の學は漢などとは樣子異なれば、師弟の別はなき趣なり。講習討論の上座とか長座とか云ふべきものか。但しこれは小子が私論なり、考へ玉へ。(下略)

といつてゐるので、その心持は推量される。著書などの容易に版にすることを肯ぜず、校合穿鑿の不足から後生を誤ることを恐れて、反覆精錬して後行ふといふ風であつたから、著書は頗る多いが、世に知られないものが多かつた。今は全集五册にまとめられてゐる。

篤胤と信友とは一時は非常に親しい間柄で、篤胤は次のやうな手紙を信友によせたこともあつた。

(前略)　此間も門人ども五六輩を机前に集候節……さて御名と予とは火と土との如し。予は火に屬き御名は土に屬く。夫故かくの加く書入たる物など皆予にゆづりて功をなさしむ。又御名と予とは荒魂和魂予は荒君は和一體分身也、と申きかせ候ひきこゝに於て以來交通の名例を正しく、予より君に奉る書には、

伴大兄雅兄といふはカラメキテいやなキミありと申し候半

君より賜はらん書には

平田雅弟是も雅の字おかしからねど、大弟ト云は畏く、賢弟はカラメキたり。さればかく云より外なし。

と標し玉ひね。　(後略)

かうした間柄の二人が、後には仇敵のやうになつてしまつたのである。その原因は那邊にあらうか。伴信友全集にのせた山岸惟和の信友傳には次のやうにいつてゐる。

篤胤偶〻古史徵ノ著ニ從フ。翁モ亦古史ノ考説アリテ曾テ之ヲ示ス。而シテ古史徵刻成リ翁ニ一部ヲ贈ル。卷中往々翁ノ考説ヲ載セ又翁ノ説ヲ取テ名ヲ顯ハサヾルモノ多シ。翁之ヲミテ大ニ恚テ曰ク、余ノ肯諾ヲ得ズシテ漫リニ上木ス、況ヤ未定稿ヲヤ。世ノ誹リヲ奈何セント。直ニ書ヲ贈リテ其ノ説ヲ删リ去ランコトヲ求ム。篤胤曰

ク、天下ノ國學者タヾ大兄ト予トアルノミ。誰カ其ノ說ニ容喙スルモノアランヤト。翁益々其ノ倨傲ヲ慣リ、斷然交リヲ絕チ、一學友ニ委シテ篤胤ヨリ贈ル所ノ書中、翁ノ說ヲ悉ク删リ去ラシメ、更ニ定說ヲ記シ家ニ藏ス。故ニ坊間ニ行ハル、所ノ古史徵ト自カラ異同アリ。篇胤乃チ書ヲ作リテ之ヲ難ンズ。而シテ翁ハ知ラザルモノ、如シ。蓋シ窃ニ謂ラク、後世公論アラント。其ノ寬洪此ノ如シ。

篤胤の方では、古史本辭經の古言學の由來の終りに、信友と中たがひした經過を詳細にのべ、

是の人の著述といふ物、己が見し限りを都て云はゞ、佗人の創意せる說を取りて、かの校合增補を用ひて敷延しつゝ、創意の人の名を覆ひて、其を意に我が有となせる說等多かり。是また己れと氣質の合ざる所なり。然れば中善かりし程も、常に快(コヽロヨ)からぬ事ども有けり。濡ては已に露も厭ふべきに非ねば、今その一ツ二つを云はむに……

といつて、信友の非行を數へ立てゝゐるのであるが、その是非は何れがどうかといふことは、遽には定め難い。前にあげた篤胤の手紙にも、「御名と予とは荒魂和魂(予は荒君は和)」と自ら云つてゐるやうに、篤胤は氣象荒く感情の强い人のやうであるから、信友との性質のちがひが長い間に種々な原因を釀し出したものであらう。だが信友の學問について述べてゐる篤胤の言は、中たがひ後の惡口といふばかりでなく、一面の眞實を語つてゐるものゝやうに考へられる。信友は考證家としては實に稀有な才能をもつてゐたが、創見といふやうなものには乏しかつたやうである。といふものゝその殘した多くの著述は何れも立派なもので、有用の書ならぬは無い。弘化三年（二五〇六）十月に京都所司代屋敷に於て歿した。七十四歲であつた。

國語學關係の著書では、假字本末がある。これは前講第四章に於て屢々引用したが、文字に關する研究で、上卷二冊下卷と附錄で合せて四冊あり、篤胤の日文傳の出來た後、その出版以前に成つたものだといふことは、日文傳の序や古史本辭經の記事で察せられる（前講一〇八頁）が刊行は信友の歿後、嘉永三年（二五一〇）の冬であつた。上卷は平假名、下卷は片假名、附錄は神代文字についての研究で、その考證該博、この種の研究では當時これに及ぶものはない。其論は、研究の資料も多くなつてゐる現在から見れば、改訂を要する點も相當あるがそれはやむを得ない。平假名については前講一二三頁にのべたやうに、空海が整理していろは文字をつくつたといふ說、片假名については同じく一四三頁に引いたやうに、吉備眞備が創製したといふ說になつてゐる。また神代文字については、同じく一〇八頁にのべたやうに、存在說を否定し、所謂神代文字は朝鮮の諺文から出たものだといふ說で、これによつて篤胤との間が全く仇敵のやうになつたのであつた。

また應聲考といふのがある。「天保四年稿、文政八年正月二十五日舊稿を出して中書しをへぬ」と終に識してある。これは應答の聲の研究で、はじめに、

應答(イラヘ)の聲は、並(ナ)べての語言とは異にて、彼方より言ひかゝる時、その事情にしたがひておのづからなる喉音、阿伊宇衣於の五音の中の聲を發(イダ)して應ふるなり。さるは此五音はあらゆる音聲の本なるが故に、いらへにもなげきにもおのづから此五聲を發せるなり。かくてこの五聲を文(アヤ)なして千萬の言語とぞなれりける。さて其聲々をとりすべて、數ふるときは大よそ五十音ばかりありて、いと奇しき活用ある趣をば、既に先生たちの次々に考出られたる說どものおほかた定まりて、今は誰も知るがごとし。しかはあれどよろづの語言の義をわきまへむとするには、此應答の聲の自然出る趣を意得あぢはひおくべくおもはるゝ由あれば、まづいま古書共に見えたる應答の聲

ども を書あつめて證(アカシ)とし、はたおろ〳〵考へたる趣を記し試みむとす。

といつてゐる。かうした計畫で、アといふ聲のいらへ、イの聲のいらへ、以下ウ・エ・オの夫々の聲のいらへを、廣く物語などから例證をあげて說き、アイ、イナ、イラフ、エイ、ヘイ、オイ等の語のこれから出來たといふことを述べてゐる。

篤胤、信友、香川景樹と共に、天保の四大家に數へられた橘守部は、天明元年（二四四一）四月伊勢國朝明郡小向村に生れた。父は飯田長十郎元親といひ、谷川士清に國學を學んで、相當な見識をもつた人であつた。が守部は頗る晩學であつたらしく、十六歲の時父に死別したが、學問をはじめたのは二十歲を越してからの事のやうである。十二歲の時から從兄の杉浦信英といふ人の許に大阪にをつたが、父の死後一年して江戸へ下り、芝の新錢座に居を定めた。そこでは乳母や家僕などの內職で、守部は氣樂に遊んでゐたが、暇のあるまゝにホツ〳〵假名附の四書などを讀みならひ、次には字引を引きひき五經などを讀むやうになつた。さうして七八年たつうちに、そこで死ぬものもあり、國へ歸つて死ぬものもありして、次第に身の周圍が淋しくなるにつれて、遊里耽溺の生活を送ることもあつたが、最後に全く一人ぼつちになつたとき、はじめて學問の世界に目ざめて、それからは渾身の力を盡して突進した。守部の話をその女濱子が書きしるした橘の昔語（この書は上だけで、守部二十五六歲までの記事しかない。）に當時のことを、

いさ是より身をこらして憂き瀨をしのぐ下馴ししがてら、世々の軍書諸家の系譜宇治大納言物語今昔十訓抄著聞集等の雜書どもを、悉く讀み見むと思ひ立てる比なりければ、人をも置かで大鍋一つ掛け置きて黑米に湯をさし

て出で來次第にまかせつれば、……それすら期夕二度に省き、折にふれては一度にて事足はして足はずとも思はざりき。……かくして馴るればなれ行くものなりや、後には二日三日づつも食はずにありし事もありつれど、さして物ほしとも思はざりき。一日ものに出でけるついでに、土橋の岡田平吉がり立寄りて、今日にて三日半日物食はず、といひて笑はれける事ありき。其の日も多くの道をありきたれど、疲れもせざりしにこそ。

と記してある。その身體の丈夫であつたことも思はれるが、物事に熱中し得る性質も思はれ、後年本居宣長に對抗すべき一家の見識をそなへ、博覽多識を以て稱せられるに至つたのも偶然ではないことを知るのである。

文化六年八月、その二十九歲の頃、武藏の幸手に移住したのであるが、その頃は既にその學問も相當の基礎が作られてゐたやうに思はれる。幸手には二十餘年間すんで、そこで結婚し、長男冬照、長女濱子をまうけた。文政十一年四十八歲の時再び江戸に出て、初めの一年程は深川に、その後は淺草寺境內の辨天山にをつた。その家が池に臨んでゐたので池庵と號したが、この頃からが守部の實力を發揮して大名を成した時代になるのである。即ちその語釋上の新說のみを集めた山彥册子が天保二年五十一歲の時出版せられて、その語釋上の天才に天下を驚かしたのを始めとして、神樂催馬樂入綾、助辭本義一覽のやうな、注目すべき著書がどん〳〵と公にせられたのである。かうして晩年に多くの著述を殘して、嘉永二年（二五〇九）五月二十四日、六十九歲を以て世を去つたのである。その著述は今は橘守部全集十二册に纒められて、國書刊行會から出版せられてゐる。その首卷に曾孫にあたる文學士橘純一氏が小傳と年譜とをものしてをられるので、以上の記述は大體それによつたのである。

守部は神典の解釋などに於ては、宣長とは異つた態度をとつて、彼が古事記を主としたに對してこれは日本書紀を

本としてをり、彼が神典を言葉通りに解釋して、後代の人の常識に矛盾した事柄も、ただ古傳說の神祕不思議としてこれを默信しようとするのに對して、これは稚言（ナナナゴト）、談辭（カタリゴト）、幽（カミ）、現（ウツ）等の考の上にたつて合理的解釋を施し、宣長以上に奧深い意味を神話に與へたのであつた。その說は難古事記傳、稜威道別、神代直語等の中に見られるのであるが、殊に難古事記傳はその書名の示す如くに、宣長の古事記傳の論難で、その神代卷の解釋に對して眞正面から攻擊をしたものである。

守部の語學上の著書は、助辭本義一覽をはじめとして、てにをは童訓、佐喜草、五十音小說等がある。助辭本義一覽は卷頭にある冬照の言葉によれば、守部が先に助辭本義考七卷を撰んだが、それを板にするに當つて冬照が、「繁を省き要を採て、只しか云音義の一端のみを、かつ〳〵抜出」したので、書名もそれによつて一覽と名づけたのであるが、助辭本義考七卷なるものは、今橘家にもその草稿らしいものも見當らず、本當に出來てゐたのではないと見えるといふことである。一覽は上下二卷、テニヲハの本義を極め、その上に立つて意義用法を說いたもので、上卷にはもぞや何こそ等彼の所謂指辭について、下卷にはそれをうけて結ぶ、彼の所謂受辭について說いてゐる。天保六年十一月の冬照の序があり、天保九年に開板された。その順序は、

今あらたに格をたてんよりは、はやく世に普く弘りてたれも聞なれ見なれたらん名目によらむ方、たよりありなんとて、三轉の辭どもの次第はすべて紐鏡により、其他の事どもは詞の玉の緒に對へてものせり。

といつてある通り、宣長の紐鏡や玉の緒によつて次第したのであるが、冬照の言葉にも音義とあるやうに、その說き方は音義說によつて、例へば、「は」の音は刃（ハ）齒葉（ハ）羽（ハ）端（ハ）などの如く物を切離つ意があるので、テニヲハの「は」も同

樣に二つの物の一つを、是はよろしといつて取分ければ殘る一つは惡いやうに聞え、今日は寒しといへば、昨日までは暖だつたやうに聞えるのである。といふのである。（前講一八五頁以下參照）

守部がテニヲハの解釋に音義說をとつたことに就ては、橘純一氏が守部全集の解題に、

蓋し山彥册子其の他に於て、難解の古語の釋に腐心した翁は、音通說、延約說、音義說等あらゆる援助を借りて、語源研究に立入らざるを得なかつた。而して、古語の解釋から一轉して、助詞の意義を究めようとした翁は、音組織の極めて單純な助詞に對しては、どうしても音義說によつて解決を求めるより外、道がなかつたのであらう。

と言つて居られる。

音義說といふのは、或種の音にはその固有の或意義があるといふ說で、かういふ考は、木（キ）・黃（キ）・酒（キ）・生（キ）・葱（キ）・城（キ）などの單音節語が多いことや、香（カヌカ）・幽（カスミ）・霞（カゼ）・風（カゲ）・影などのやうに、或共通の音節をもつてゐて、何かしらその間に關係があるやうに思はれる言葉が多いなどいふわが國語の性質が、起り易からしめたものと考へられるので、神道家の間には隨分古くからさうした考があつたのであるが、それが一般に盛になつたのは江戸時代も後の方で、國學が盛になつて言語の解釋に五十音圖が應用せられ、そこに或神秘なものを認めた人々が主として唱道したもので、前にのべた平田篤胤の古史本辭經などもこれである。篤胤の說は主觀的に傾いてゐるやうであるが、それに對して守部は客觀的に歸納的に說明しようとしてゐることは、前講に引いた一例でも推量せられるであらう。守部全集の首卷に、保科氏が「國語學史上に於ける守部翁の地位」といふ題でのべられてゐる中にも、

守部翁は出來るだけ多くの類語を集めてさうして歸納的に解釋しようと努められて居るのであります。是が音義說を一歩進めた所以でありますが、其の解釋法はハとかモとかニとか云ふやうな一音のものでもあると大變都合が好い、處が助動詞になりまして二音以上の結付いたものになつて、ケリであるとか、ランであるとか云ふやうなものになると、今のやうな解釋で進むのに非常に困難である。從つて其處に矢張り常識を以て主觀的に解釋しなければならぬやうになつて來ます。さう致しますと其の結果が餘り穿ち過ぎて居る。或は附會に傾いて居ると云ふやうな批評が起つて來る所以だと思ひます。

とあるやうに、無理な說明（前講一八六頁の例參照）も出てはくるが、歸納的に行かうとしてゐる努力は買はねばならない。なほこの書については、同全集の解題に橋純一氏が、

本書の特色は、勿論音義說の代表的著述の一たるに存するが、然し其の音義上からの說明を除き去れば、あとには何物も殘らないといふやうなものではなく、守部翁の言語に對する鋭い直覺力は、助詞の上にもはたらいて、其の本義を根柢から說明し得たものが甚だ少くない。蓋し後世から見れば、その音義說が珍しく感ぜられるので、これを以て本書の特色とするのは無理ならぬ次第であるが、守部翁の此著編述の心的經過の上からいふならば、先づ助詞の意義についての領會が心中に存し、それを音義說的取扱方によつて說明したものであるからである。

といはれたのは、もつともなことである。何故守部が音義說によつてテニヲハを說明したかについて、保科氏は、次のやうに忖度してをられる。

尙ほ守部翁が音義說を基礎としてていにをはを研究されたと云ふことは、或は宣長翁の詞の玉の緒と全く別天地を開拓しよう、玉の緒と全く違つた道を執つて、ていにをはを說明しようとされたのではないかと思ひます。即ち總ての點に於て宣長翁と違つた道を取らうと云ふ考を有つて居られたやうであります。當時詞の玉の緒の勢力が非常に盛んな時でありますから、其跡に隨從すると云ふのでなくして、全く違つた方面を執つて行かうとされたので、音義說から互爾遠波の說明に苦心されたのであるまいかと思ひます。

「今あらたに格をたてんよりは、はやく世に普く弘りてたれも聞なれ見なれたらん名目によらむ方、たよりありなん」といつて、玉の緒の順に從つてはゐながら、その係結の格をあまりに細かに分ち過ぎて煩に堪へないところから、宣長の玉の緒著述の動機を忖度して、

玉の緒に擧げたるケ條のあらましをいはば、次のぞを三十五種に分ち、のを二十六七種に分ち、やノ部などにいたりては六十七八種に分てるが如き也。是を委しといはゞ委きやうにもあれど、其中には全同じ事なるも多かるに、殊更に分ち出で、何の格くれの格としひてものせりしこそ、返々も煩はしくはたうるさけれ。……適加へそへたる言どもゝ、只むづかしくのみいひなして、わざと人に難きものかなと思はしめん下がまへさへぞ見えたりける。猶さても彼の大人にしていかなる事にてかくはものせるにかといぶかしみ思ふに、此書を出せるほどは、京に蘆庵、蒿蹊、江戸に千蔭、春海の主達、何れも其比まではかゝる方にはうとくものせられながら、ともすれば本居翁をそしれるくせのありつれば、翁も又かたへにさる人々をおどろかさばやとて、わざとかまへて然かしたゝかにはものせられたるにぞありけん。即同じ比ものせりし玉霰と云書に、「おどろかさばやさめぬねぶり

を」とよめりしぞ、元より彼翁の心なりつると今ぞ思ひ合されぬ。あはれさる下がまへなく、只さとり安かれと眞情もてつくられましかば、めでたき書のいで來なましものを、あやしき方の心くらべより、初學の爲にいとまどはしく、難儀なる書とはなりぬるはや。

といつてゐるのであるが、これが必ずしも宣長に同情しての言葉だとはいひ得ないならば、神典の解釋などで宣長反對の態度を著しく見せた守部のことであるから、テニヲハ研究の態度についても、保科氏の推量を否定し去ることは出來ないであらう。

五十音小說には終に守部の女濱子の、天保十三年二月の跋がある。その頃板になつたものと思はれるが、出來たのは跋によればずつと前だといふことである。小さな折本で、はじめに五十音の作者及びその靈妙なることについて、

此五十連音は誰が作など云べき物にあらず、神世のはじめより天地萬物の聲の限りは茲に盡して、其方位等次は如此次第せるものぞとて、自然に傳來し物にぞ有ける。彼ノ上古に言靈と指せりし其本源は、即五十連音の事にして……此連音の纒か五十にして天下古今の聲韵を包括し、萬變に應じて餘す事なき靈妙を稱せし言なりけるが……實に言靈とも稱すべき物にして、言語の學に是より出ざるはあらず、恒に語の延約、活用、助辭のかゝりに至るまでも、是を以て推すに、即規矩準繩ともなる事の多かれば、歌學せん世の人は、此五十連音に依て言の統をもとめ行程の捷徑もあらじと今童蒙のために簡約して其一端をさとすなり。

といつてゐる。次にいろは文字について

弘法大師の眞蹟のいろは假字の體を見てつら〳〵按ずるに、もと漢字を借て、さて其字形は漢の筆法には拘ハらず各其音聲の本體に隨て製し給へるもの也。此に其事を一二いはゞ、先づ阿和などの如く圓體なる音には其形をあ|わとやうに圓く作り、和都等のつぼやかなる音には|ちつとやうに少く丸く作り、細長き音には|しと作り、纒は|り廻れる音には|むめもとやうに作り、口鼻を兼て出安き音には|うとやうに作り、牙の間際より出る音には|いとやうに作り、唇の反て出る音には|へとやうに作り給へるが如し。此他も是に准へて知べし。そも〳〵音義を解には、其音を口に唱へ試て、其形より考へ行が肝要のわざなるから、かくは物し給へるなるべし。

といつてゐる。次に五十音圖について、五音十行の等次は縱も横も圓く連るもので、縱でいへば「あ」と「お」、いと「え」は夫々相對し「う」は中央にあり、横でいへば、あ行とわ行とは相隣るといふ具合で、この位置の關係が音の延約相通に大いなる關係をもつことを說き、次に反切と延言のこと、次に十行の大意を說いてゐる。例へばあ行は言語の始祖で、言葉の下にいふこともテニヲハに使用することもない。言葉の中にあれば省かれることが多いし、他の音を長く引くと韻が皆あ行に收まる。か行は、かの——あの——かれ——あれ、うれしき——うれしい、からくして——からうじて、の如くあ行と通ふ場合が多い。これはか行とわ行とはあ行の前後にあつて、羽翼の如きものであるからである。といふやうな說である。その十行を物にたとへては、

あ行は君王也、か行以下は侍臣也。やわの二行は棟梁の輔佐なり。かくて其わ行は君の前驅して先きに進み、其や行は後殿して蹤を押へ、ら行は徒隷の如くにして最終に從へる也。

といつてゐる。次に四等活用圖をあげ、次に躰用に二種あること、次に詞の活用の格についてのべてゐる。躰用の二

種といふのは、みそぎ（躰）とみそぐ（用）との如き關係のが一種、竹（タケ）、風（カゼ）（躰）と竹（タカ）、風（カザ）との如き關係のが一種であり、四等活用といふのは、起、未定、既定、命令の四つで、カサタハマラの六行の四段活用の動詞とナ行變格の動詞とが例示せられてゐて、カ行の例をとれば次の如くである。

解行	起	未定	既定	命令	休
か（とかん）（ゆかん）	き（とき）（ゆき）	く（とく）（ゆく）	け（とけ）（ゆけ）	こ（延とかも、ゆかも 俗とこう、ゆこう）	

また最後の詞の活用の格を示した圖は、未然詞・續詞・絶詞・續詞・已然詞といふ活用形の名稱をつけて、助辭の連續の格も示されてをり、大體は詞の八衢に準據したものと考へられる。この方面の研究は守部はあまりしてゐないのではないかと考へられる。

てにをは童訓は二卷、天保十五年十一月の自序（前講一八八頁に引く）がある。宣長の紐鏡と詞の玉の緒とに基づいて、係結の呼應を童蒙のためにさとしたものである。上卷は紐鏡の表に俗語譯を施したものと、詞の玉の緒卷一二の要約、下卷は玉の緒卷三以下の要約であるが、玉の緒の分類配列を幾分變へたところもあり又補つた條項もある。ぞのや何の係から、のは結びに關係しないとして之を省き、玉の緒に變格としてゐる係詞なしの連體、止めの例は、餘韻を殘すためにさうしたので、變格として扱ふ必要がないといひ、玉の緒の誤を正さうとしてゐる所が見える。これは音義說によつたものではない。

佐喜草は一卷、さへ・だに・すらの三語について、その意義用法のちがひをのべたもので、多くの證歌を引き、その證歌にはこれらの語の傍に俗語を添へて解し易からしめてゐる。要するにさへは其上（ソヘ）の義で、ある事の上に更にそひ加はる心、だには事の缺けてゐる時の辭でセメテとかデモとかいふやうな心、すらは「ひたすら」の上略で、ソノマヽとかナホとかいふ心であるといふのである。例歌を少しづゝあげるならば、

梓弓おして春雨けふふりぬ（ソノ上ニ）　あすさへふらばわかなつみてん（古今集一）

ほとゝぎすなく聲きけば別れにし故里さへ（マデ）ぞこひしかりける（古今集三）

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時のおもひ出にせん（古今集一）

夢にだに（デモ）見ゆとは見えじ朝なあさなわが面かげにはづる身なれは（古今集十四）

いとまなみ五月をすらにわぎもこが花橘も見ずか過ぎなん（萬葉集八）

一重のみ妹がむすばん帶をすら（ソノマヽ）三重むすぶべくわが身はなりぬ（萬葉集四）

さき草は一莖から三枝分出するといふ草で、三枝ともかき、「さき草のみつばよつばに殿造りせり」など、枕詞にも用ひられてゐるので、今だにさへすら三語についての研究であるから、それを以て名としたものであらう。

以上で大略ながら語學關係の守部の研究は紹介を終つたのであるが、彼はこの方面よりはむしろ言葉の意味、語源の解釋に於てすぐれてをり、神樂催馬樂入綾、稜威の言別、山彦册子、鐘の響等にあらはれたそれには、獨創的な前人未發の卓見が頗る多いことをつけ加へたいと思ふ。

以上で大體この所謂第三期の主な學者とその研究の所産とについての紹介は終つたから、以下例によつてこの時代

の概觀をしてこの章を終らうと思ふ。

國語の研究は元來和歌に導かれて、歌學の方便として起つたものであることは既に述べた所であるが、契沖も和字正濫要略の序で、

かなづかひは俗にも渡ることながら、まさしくは和歌をもてあそぶ人の事なり。

といつてをり、かうした氣持はその後も全然失はれたわけではなかつたのである。所がその後國學が勃興して、國語の研究はまたその手段に供せられたかの觀があつた。眞淵や宣長の音韻論などにその悪い影響が見られることは、前章の終に述べた所である。國學は國語研究を進めた點でその功績は頗る多いが、研究の目的が國語研究そのものにあるのでないから、その材料とする言語も古代語の方にとられた。和歌もまたその性質上近代語を材料としない。そんなこんなで國語の研究は平安朝時代までの言葉が材料とせられたのである。さうしてその言語の中に、宣長は此上もない整然たる法則の存在することを發見した。即ち詞の玉緒に述べられた係結の呼應の法則の整然たる美しさであつた。

そも〳〵此とゝのひはさらに後の世に定めたる物にはあらず、神代の始より人の言の葉にしたがひておのづから定まれる物にし有ければ、ことさらに心せざれどもおのづからよくとゝのへりければ、いにしへはことにこれをさだし學ぶこともなかりしを、後の世になりてやう〳〵ことばいやしく、みやびごとは物うとくなるまゝに、たがふふしもあるによりて、とかくさだすることもはじまりしを、まことに今はことさらにたづねもとめざればあきらめえがたくなん成にける。

これは詞の玉緒七の卷にある言葉であるが、かうして後の言葉をいやしいものと見て、法則整然たる昔の言葉にあこがれるところに、近代語の研究が起らないのはむりもないことである。これらの人は日常使用の言語はとにかく、古來文學の精髄と考へられてゐた和歌の上では昔の言葉を用ゐることをつとめ、散文に於ても同樣であつた。

そも〳〵言の葉の道はうるはしくみやびやかなる古をこそならひまねぶべきわざなれ。今の世のやうに心詞のさとびあやしきをもえらばずて歌文のみやびを好むは、たとへば花鳥のなさけをしらでくれゆく春ををしむがごとし。

と宣長の玉霰の序に三井高蔭が書いてゐる。

かうして一方には國學の手段として、一方には文學心を滿足させるために、國語の研究が行はれてゐたのが第二期の狀態であつた。この狀態は第三期にもそのまゝつゞいてゐる。が、第三期に於てはさういふ何等かの手段としてゞない、たゞ研究のための研究といつてよいやうな研究が多く出てゐる。これはこの期の特色の一つでなければならぬ。かくて學者としても、全く國語の研究家としてだけで名をなしてゐる本居春庭や東條義門の如きものが出るやうになつた。中には平田篤胤のやうに、國學の影響をうけて學問的でない議論を試みたものも無いではないが、概していへば國語の研究はたゞ國語の研究として獨立し、他の影響から離れて本當に公平な見地から、眞理を見出さうとするやうになつたのである。かういふ態度の上に、前代に於て擴げられた研究の各部門は、益々細密に研究せられて、テニヲハ・活用・音韻等の研究は大いに補正せられた所があり、それらの研究の一通りはまづ完成せられたといつてもよい程度に達したので、この章の初にも述べたやうに、この期を國語學完成の時代と見るのである。然しその研究せられた言葉は前期からの引つゞきで、平安朝及びその以前が中心であつたのは、やむを得ないことであつた。

第三期に於て最も光つてゐるのは、いふまでもなく、前にあつては活用語の研究をまとめた本居春庭、後にあつては宣長や春庭の研究の補正を以て任とした東條義門の二人であらう。而して前期にあつては、まづ假名遣の新研究起り、テニヲハの研究が之についだのに對して、この期に於て活用語の研究が勃興し完成せられたのは、この期の特色の一つに數へられることであらう。今日の文語文典が組織せられるに當つて、活用語やテニヲハに關する法則を定めた材料は、多くこの時代の學者の研究の結果に得たものであつたのである。

假名遣は前期に魚彦の古言梯が出て、契沖の研究を一層鞏固にしたので、學者間では殆ど之に對して反對を唱へるものはなくなつた。たゞ秋成の靈語通が否定的な議論をなしただけであるが、之に對する反駁といふやうなものも別になかつた。それほど歴史的假名遣が普通のものになつて來たのである。古言梯は春海、濱臣、山田常典等の增補をうけて益々世に行はれ、加茂季鷹の正誤假名遣、市岡猛彦の雅言假字格のやうな、古言梯の變形ともいふべきものも出た。かうして假名遣を教へようとする本が多かつた中に、假名遣の概論ともいふべきものが一つあつた。それは春海の假字大意抄で、歴史的假名遣は如何にして定められるかを中心として說かれたものである。秋成の靈語通も、假名は言葉をきくまゝに書き、書くまゝに讀むのが本體であるといふ或御說を、合理的に主張するやうにしたら面白かつたのであるが、さう行かなかつたのは殘念であつた。これらに就てはなほ前講四五頁以下を參照願ひたい。

音韻の研究として注意すべきは、義門の奈萬之奈と於乎輕重義である。前者は宣長の字音假字用格の誤を正して、上代人が漢字の韻に舌內音と唇內音とを明に差別してゐたことを示し、後者はそのおを所屬辨に動かすべからざる證據を與へたのである。韻鏡の方面では太田全齋がその著漢吳音圖に於て、釋文雄の磨光韻鏡の研究を更に一歩進めたことは前講六五頁に述べた。

この他には、小冊子ではあるが、はじめて言語の起源といふ事を考へたものとして、鈴木朗の雅語音聲考が注意せられる。平田篤胤の最も力をそそいだ神字日文傳における神代文字說を、伴信友が假字本末で否定してから、存在論者の反對が起つてにぎやかはしかつたが、存在論は結局無理であつた。篤胤は國學を神道にまで發展させた熱情の人で、神代文字說ばかりでなく、その國語研究は國學の弊を最も多分にあらはして、學術的價値の乏しいものとなつたのであつた。

第四章　守部以後明治初年まで

この期間は國語學史上第四期といはれてゐる。政治的には、德川幕府がほろびて明治維新が來るといふ時代で、內外多事多端、頗るあわただしかつた時代で、學術の研究の起るには、極めて不適當な時代であつた。從つて國語の研究も、餘り振はなかつたのは殘念であつた。

宣長の古事記傳にも比すべき大著、萬葉集古義を著はして、萬葉研究の上に偉大な功績を殘した鹿持雅澄は、土佐の學者である。寛政三年（一七九一）四月に生れた。當時鹿持家は藩主山內氏につかへて微祿で生計豐かとはいはれなかつたが、その中で刻苦學問にはげんだので、藩老福岡氏がその篤學を愛し、家藏の群籍を閲讀せしめたばかりでなく、雅澄の欲する書物を購ひ求めてまで之を助けたといふ。名聲やうやく揚つては教を受ける者も次第に多くなつ

て、後には藩黌教授館の師範に任ぜられ、弘化三年特に士分に列した。安政五年（一八五一）九月、六十八歳で歿した。その畢生の大著萬葉集古義は、久しく寫本で傳へられたままであつたが、明治に至つて宮内省に於て上梓せられるといふ光榮に浴した。

雅澄の國語學上の著書としては古言譯通、雅言成法、永言格等八種ほど、いづれも萬葉集古義の附卷、別記とも見るべきものである。宮内省版の古義にはついてゐるのであるが、その後の複刻本はいづれもこれらを除外してゐるので、最近（昭和五年）これを寫眞版で縮刷複製したものが萬葉閣から出版せられた。

古言譯通は萬葉集を中心とした古言辭書で、本文は春夏秋冬の四卷、五十音順に配列して、一々例歌をあげて解說してゐる。目錄一冊、これは本文にあげた雅言とその譯語とを抄出したもので、用例ぬきの雅俗辭典といふ形のものである。萬葉閣複製本では、一冊に收められてゐる。春の卷につけた諸言の終に、天保四年六月六日としるしてある。

雅言成法は上下二卷、終に天保六年三月十一日としるしてある。雅言の成立に關する法格といふやうなものを考察して、解釋に資したもの。

假略　阿行の音の語中に在る時自然に省かれるものと、音の通ひによつて自然に省かれるもの、（例、長雨をながめ、吾家をわがへといふ類）

非略　音が省かれたやうに見えて實はさうでないもの、（例、彌をやといふ類）

訛略　言便で訛り略されたもの、（例、狩場など、庭をばといふ類）

相通　音の相通ふために通はしていふもの、（例、たづきをたどきともいふ類）

訛通　音の相通ふために訛つていふもの、（例、眉をまゆ、夢をゆめといふ類）

轉換　必ずさうなるべき語勢によつて、うつしかへていふもの、（例、動詞の語尾變化、酒杯などの酒をさかといふ類）

清濁轉換　熟語となる場合に清音と濁音との轉換、（例、里人を散度人、夜降を夜具多知といふ類）

轉訛　上の轉換以外のもの、（例、女ををんな、行きてをゆいてといふ類）

清濁互訛　清音を濁音に訛り、濁音を清音に訛るもの、（例、山の枕詞あしひきをあしびきといひ、瀧をたきといふ類）

約言　言を約めたもの、（天降をあもり、荒磯をありそといふ類）

舒言　用言をのべていふもの、（例、散るをちらふ、聞くをきかく、摘むをつますといふ類）

以上十一ヶ條を多くの例によつて說いてゐる。この最後の舒言について、一層詳細にのべたものが、舒言三轉例一卷である。舒言は普通には延言といはれてゐるものであるが、ただ延びたのではなく、そこにはそれだけの趣が加はつてゐることを、著者はよく會得してゐた。現在では山田孝雄博士の說く所に從つて、散らふのふ、摘ますのす等は、夫々ハ行四段、サ行四段に活用する助動詞と說くものが多い。聞かく等のくについても種々說はあるが、延言といふべきものでは無いと一般に考へられてゐる。雅言成法にはなほ終に軼事として、山高みなどのみや、助詞とも其の他種々の語の研究がある。

永言格は三卷あり、對句その他の、歌の修辭的研究である。終に天保八年五月十三日とある。言靈德用は一卷、宣

長の漢字三音考の說を可として、我國の言語の正しいことを主張したもので、學術的價値は乏しい。「翁が熱烈なる尊王愛國の精神は上下に感孚して、爲に幕末に於ける土藩の興起を促したり。」と井野邊茂雄氏が雅澄の傳記に記してゐるが、その熱情をおもはせる書である。

鉞囊は上下二卷、上卷の前半は正格別格偏格等の結びの研究である。結びの研究には別に結詞例一卷がある。用言變格例は一卷、これは雅澄の國語學上の意見として最も注意すべきものであらう。諸の用言は四段に活用するといふことをまづとき、恐る、隱る、忘る等下二段に活用するものも、四段に活用したことがあることを注意し、種々の例から、四段以外の活用は四段活用から轉化したものではないかといふ、動詞活用の起源について、四段活用一元論とでもいふべき意見を出してゐるのである。活用の起源については明治以後には種々に論ぜられたが、その魁をこれがなしたのであつて、古語をいかに仔細に觀察したかもうかがはれるのである。

次に土佐に於ける萬葉學と雅澄の研究とについて、正宗敦夫氏の文をかりて參考に供したい。

土佐に於ける萬葉集の研究が盛んで有つた事は、今村藥、横田美水が、白文の萬葉集を木活字にて印刷して、舊訓に累さるる事なく、新に訓を考へんとした一事に據つても知る事が出來る。土佐に於ける萬葉集研究は、谷眞潮が眞淵の門人で、又眞潮の父垣守も眞淵に交はつてゐたから、土佐の萬葉學はやはり眞淵に源を發してゐる。其から眞潮の門に學んだ宮地仲枝は即ち雅澄の古學の師であつて、其宮地仲枝の父は宣長に萬葉の疑門を一々正したのである。其の宣長の答は仲枝が整理して一書とした萬葉集私考で一斑は知る事が出來る。斯くて土佐の萬葉研究は、眞淵、宣長、其に土佐人の研究、其が集大成せられたものが雅澄の古義である。其古義の附卷と見るべき數種の書は種々な方面の研究がせられてあるが、其内では宣長の紐鏡、玉の緒、其の研究を受續いだと見るべきが大部分をしめてゐる。又新に舒言例の如き研究を發表してゐる。何れも萬葉集の例を根本として、記紀宣命はもとより、八代集にまで及ぶ語法、歌格等の研究である。何れも實例に重きを置いて確實なる調査をしてゐる事は注意すべきである。新に問題を提出してゐる點も少くはない。只だ其結論には多少の疑點が無いでもないが、もとより其は誰にも有る事である。雅澄をのみとがむべきではない。（萬葉集古義附卷複製に就いて）

前講一〇九頁にあげた鋟木文字考、嘉永刪定神代文字考の著者鶴峯戊申は、豐後の人、天明八年（一二四四八）に生れた。神官の家柄で、平田篤胤の流をうけて國學を主としたが、蘭學などの知識もあつて、頗る博覽な人であつた。三十歳大阪にうつり、四十五歳江戸に行き、五十一歳の時水戸烈公に謁し、以後水戸家の錄をうけて、安政六年（一五一九）七十二歳で木郷駒込の水戸邸に歿した。國語學上劃期的の著書として語學新書がある。

語學新書は天保四年（一二四九三）に出來た。二卷一冊であるが、もとはもつと大部なものであつた由である。序說に、

此書もと詞の品定と名づけて、九品に九卷、九格に九卷、附錄に二卷、すべて二十卷なりしを、さては受業のもの謄寫もたやすからねば、同盟あひはかりて、師にこひて本書のしげきを節して二卷となしつるを、名をもあらためて、語學新書とはせられたるなり。

とある。上卷は九品、下卷は九格を說く。九品とは言語を九品詞にわけたのであつて、（一）實體言（二）虛體言（三）

代名言　(四)連體言　(五)活用言　(六)形容言　(七)接續言　(八)指示言　(九)感動言の九つである。實體言は今の名詞、虛體言は大體今の形容詞、形容言は副詞にあたる。連體言とは活用言が現在、過去、未來の助辭をふまへて實體言につゞくのをいふ。また接續言には今の接續詞の外に助詞もいくつか入れられてゐる。この各々が例へば實體言をゐことば、虛體言をつづくことばといふやうに、國語的によばれるやうになつてゐる。さうして九品の中が夫々また頗るこまかく分けられてゐる。

また九格といふのは、西洋文典の case を土臺にしたもので、(一)能主格　(二)所生格　(三)所與格　(四)所役格　(五)所奪格　(六)呼召格　(七)現在格　(八)過去格　(九)未來格の九つ、前の六格は助詞に關するもの、後の三格は助動詞に關するものである。未來格の中には「ず」「ぬ」「じ」等も入つてゐる。

語學新書の說は戊申の獨創ではなく、藤林淳道といふ蘭學者の和蘭語法解（文化十二年板）に說くところを土臺とし、これを國語にあてはめたものではあるが、國語を文法的に整理しようとした最初のものとして、注意しなければならぬ。

井伊直弼の知遇をうけて、將軍繼嗣問題や外交問題で公武の間に周旋活躍し、安政の大獄までひき起して、幕府の衰運を挽回しようとつとめた長野義言は、一面には歌學語學に長じた學者であつた。文久二年（一二五二二）八月、反對派にはかられて禁錮せられ、ついで國を亂さむとするを名として、死に處せられた。四十八歲。

國語關係の著書には、玉の緒末分櫛、活語初の栞等がある。これらについては前講一八八頁、同二三一頁に略述した。詞の玉の緒、詞の通路等の補正とみるべきである。

萩原廣道は岡山の人、野々口隆正の門に學び、最も源氏物語にくはしく、源氏物語評釋は名著として、花宴までに止まつてゐることを惜しまれてゐる。大阪にうつつたのは三十餘歲のころであらうか。「こたび萩原ぬし吉備のくにより來りてながくこの處にをらむとす。」と西田直養が係辭辨の序にしるしてゐる。それは弘化三年で廣道三十四歲の時である。文久三年（一二五二三）五十一歲で歿した。

廣道の國語學方面の著書としては、てにをは係辭辨（前講一八八頁）が有名である。玉の緒を正したもので「はもの徒」の說に對しては感心せられないが、「ぞのや何」からのと何とを省いてかを入れた點は、現在も從はれてゐるのである。

また初學の便利の爲として、古言譯解一冊がある。鈴木朗の雅語譯解と同形の小本で、雅語譯解が中昔以後の語を集めてゐるのに對して、古事記、日本書紀、萬葉集等の假名がきの語を主として集めて、俗解を附したものである。

嘉永元年（一二五〇八）に出來た。

また小夜しぐれ一卷は宣長の玉霰にならつて、歌文の詞の用ひざま、意味等をのべたもの、自序のはじめに標題をかねて、

小夜しぐれまたおとたてゝいぎたなき學のまどをおどろかさばや

とあるのも、玉霰と同じ仕方である。辨玉霰論評、辨玉あられ論脫漏が附錄せられてゐる。

石川雅望の雅言集覽を增補して、增補雅言集覽を成した中島廣足は、肥後の人、本居太平の門人で、長崎に住んで教授し大いに名聲があつた。樞園文集は今中等學校の教科書中にもとられてゐるが、樞園はその號であつた。元治元年（一八六四）七十三歳で歿した。增補雅言集覽は三冊、明治二十年に、その孫中島惟一によつて刊行せられた。

この他になほ詞玉緒補遺（前講一九一頁）、詞八衢補遺（同二三一頁）、玉霰窓廼小篠等がある。玉霰窓廼小篠は前編三卷後編二卷、前編は文久元年に刊行せられたが、後編は明治二十一年の刊行である。はしがきに左の如くある。

學の窓に晉たてられし玉霰よ、耳とき人はとくきゝ驚きて、いぎたなかりし夢も殘らず、こゝろさやかになりにたるを、猶耳おほゝしきはたしかにも聞しりえずて年ふりがちなるおほかめり。しのやの軒に降る霰も其こたふる物によりておとさやかにきゝなさるゝものなれば、こたび其あかしとすべき歌文どもをこれかれ書いでつらねあげて、初學の友のしるべとなしつるは、これをもてかのあられの音をいよよたしかに聞しらせむとてのしわざなりけり。さるはふるき歌に、さゝ葉にうつやあられのおとたし〳〵にとよめるをおもひてなれば、やがて窓の小篠と名づけつるになむ

嘉永の七とせといふ年の七月の末つかた　中嶋廣足しるす

書名の由來、著作の動機、書の內容等は大體これで知られる。本居宣長の玉霰には證歌があげてない故、それに對する證歌を出して註解を施したのである。但し前編の下から後編にかけては、玉霰と同じやうな趣のことを新に集め補つたので、玉霰とは關係がない。

黑川春村は江戶の人、淺草田原町に生れた。初め俳諧に志し、淺草庵守舍につき、その後をついで淺草庵といつたが、後には和歌に心をよせ、さらに古學を修め、考證を得意とした。慶應二年（一八六六）六十八歳で歿した。音韻考證二十二卷が語學關係の著書として注意せられる。太田全齋の漢吳音圖にもとづき、更に一步を進めたものであるが、刊行はせられなかつた。文久二年（一八六二）に出來たもので、凡例の中に、

皇國の古典を讀解むには、古音をも普く索りて、其易らかに讀得べき限は、異やうならず讀まゝほしき業なり。さるを、假令、日本書紀に茂羅玖毛と見ゆるは、叢雲なるを、もらくもとよみ、宇士多加禮斗呂々岐豆とある古事記の文をば、語格をも按はで、うじたかれとろゝぎてとよみ、萬葉集の眞祖鏡をも、まそかゞみとのみ呼なれたる類、古書どもに許多見ゆるは、たゞ後世の常呼に目なれて、古人の字音に密なりし事をば、さる所以ありとも思ひたらず、古言は今と異なるものなど、なほざりにおもひ過せる先輩の失にぞありける。……音韻の書は數部ありといへども、簡便にして了解易きは、韻鏡にまされるものなし、其韻鏡は數版ある中にも、漢吳音圖を最上と云べし。……然れば今我述ぶる所も、凡て其音圖に基づき、其音徵の體裁に倣へり。但其音徵と不盡と共に、全文を並べ載るは頗うるさき業に似たれど、二書の說と我僻案と、矛盾したるも少からねば、初學の徒通讀せざれば速に會得し難きが故なり。

漢字の古音の研究が國語の研究に必要なことはこれで考へられるであらう。

また活語四等辨といふのが一卷ある。これについては前講二三一頁に述べた。

大國隆正は津和野藩士今井秀馨の子、山本、野々口などとも稱した。大國といふのは明治維新の頃からで、石見國邇磨郡大國村の大國主神に祈請して、氏を大國と改めたとのことである。國學は平田篤胤に學んだが、佛教や漢學や西洋の理學にも通ずるといふやうに、博學な人であつた。篤胤の學風をうけて、國學をもつて尊王愛國の大義を鼓吹し、間接に明治維新の大業を補翼したことが多い。それだけ國語の研究はその弊をうけたところが多かつた。神字原、神字錄等をあらはして神代文字の存在を主張したのもそれである。活用に關する研究として、通略延約辨のことは前講二三二頁にのべた。活語活法活理抄といふのもあるが、これは活語の研究といふよりも、むしろそれによつて自己の哲學を說かうとする方が强い。その一斑を示すならば次の如くである。

あいうえおはことばの下につかず、らりるれろはことばの上にをらず、その下につかぬあいうえおを、上にをらぬらりるれにはたらかせ考ふれば、生れ出て世に在るもの暴るれば廢れ、奉仕るれば長く有るものなり、在りのうらに無しとはたらくことばあり。このはたらきは二行にわたりて、なしなきとはたらくなり。無し有りのふたつは一對のことばにて、幽顯のわかるところ、合離のはじめ、活理のよりておこるところなり。

我に本末あり、これを知るを活理をしる大本としるべきなり。我身にありては心を本とし身を末とす。我が家にありては父を本とし妻子を末とす。從者はその主人を本とす。我が所にありては領主を本とし臣民を末とす。地球上を我がといふとき、天皇を本とし外國の王どもを末とす。これを我國の大道とすることなり。

あいうえおに他行を借らずうえとはたらく言葉あり。又はひふへほにふへとはたらくことばあり。この一對は神理の世にあらはるゝはじめにて、この對格に大かた世の中の大理はそなはりてあるものになん。……うるに三つのわかちあり。身をうると身にうると心にうるとこれなり。父母によりて身をえ、産業によりて田宅財寶を身に得、公儀の法令によりて道をこゝろにえ、この三つを得て人はたれも〳〵世にふるものなり。ふるにまた三つの差別あり。とし月をふるは天につくなり、くにところをふるは地につくなり、つかさくらゐをふるは大君につくなり。かろきものはその所の君につくなり。人は妻をえて子を得るものなり。子をうるによりてその家は世世をふるものなり。君とある人は民に産業を得しめたまふものなり。忠孝貞その外善事をする人を賞したまふものなり。道に背くものあれば世にふることをえざらしめたまふものなり。

隆正は明治四年（二五三一）八十歳で歿した。

富樫廣蔭は紀伊の人、本居春庭に師事し、粗衣粗食に甘んじて刻苦勉學した。師春庭の歿した翌年、文政十二年から桑名にうつり住んで教授のかたはら著述に從事した。著作は多いが刊行せられたものは少かつたので、今あまり傳はらない。「氏は本居派の語學に詣深く、はた卓見も少からずといへども、家計上の必要より傳授料などを定め、束脩の如何によりて講說を異にせるより、その著作は刊行に至らざる者多かりきとかや。」と日本文法史にはいつてゐる。明治六年（二五三三）八十一歳で歿した。

その著書では詞の玉橋二卷が注意すべきものである。その一の卷は文政九年十一月に脫稿、文政十二年と天保十五

年と二回の訂正をへ、二の卷は文政九年十二月の起稿といふことである。この書で注意すべきは語の分類法であつて、言、詞、辭に三大別し更に小分けしてゐる。

言
　形言……月、雪、花、鳥、山、川
　樣言……物、事、是、故、春、秋
　居言……謠（ウタヒ）、宿（ヤドリ）、紅葉、戀、楯
　略言……歌、宿、來（ク）、長（ナガ）、遙（ハル）
　合言……春日、秋山、山川、谷水

詞
　四韵詞……四段活用
　一韵詞……上一段活用
　伊宇韵詞……上二段活用
　衣宇韵詞……下二段活用
　變格詞……變格活用
　普雜詞……形容詞のク活、シク活

辭
　靜辭
　動辭

右の如くである。明治の文典にはこの書の影響をうけたものが多かつた。

以上所謂第四期、こゝに述ぶべき學者はまだあるが、今は省略に從ふことにする。この期の研究は多くは前人の研究の補正を主とするといふ（ヤウ）場合で過ぎた。その中に鶴峯戊申の語學新書、富樫廣蔭の詞の玉橋等は新しい傾向として注目される。即ち一は西洋文典に則つて國語を整理しようとしたもの、一は鈴木朗の言語四種論や、義門の玉の緒繰分中の說を發展させて、言語の分類を試み、在來のテニヲハ研究、活語研究をその下に整理說明しようとしたもの、いづれも、研究が部分的でない所が注意される。弘化二年（一八五〇五）刊行の語學捷徑（又詞の捷徑とも。鈴木重胤著）も從來の種々の方面の研究を一つにとり纏めようとしたものである。蓋し假名遣の研究は第三期で完成し、係結びや活用の研究も十分にしつくされたといふ狀態であつたから、さういふ部分的の問題でなく、これをとりまとめて、國語全體を見て行かうとする機運は當然起るべきであつたらう。かうして次第に文典の形式に入らうとしてゐたのであつたが、それが明治初年に至つて一層促されたのは、明治五年の學制に小學に文法科をおかれた事からであつた。當時それに適當の教科書が無かつたので、その必要から教科書としての文典があまれた。皇國文法階梯（高田義村・西海古海共著）皇國文典初學（黑川眞頼著）は共に明治六年に刊行せられて、そのはじめをなした。かくして文典の著は年と共に多く、內容も次第に整つて行つた。

一方また明治維新の改革的氣風は、森有禮をして日本語を廢して英語をもつて國語としようといふ考を起させた程で、國學者以外に國語の實際問題として漢字を排斥し、或は假名を、或はローマ字を國字としようといふ意見が起つて、國語研究に新しい方面が開けた。

○

明治十九年九月帝國大學に博言學科が創設せられて、はじめて言語學が講義せられるやうになつた。國語の研究に、西洋に發達した言語の科學的研究法がとり入れられるやうになつたのはこれからである。よつてこれ以後を第五期としてゐる。もつとも博言學科が強大な勢力を有するやうになつたのは、明治二十七年に上田萬年博士が獨逸から歸朝して、この科を受持たれてからであつた。明治三十年には國語研究室が設けられて國語關係の書籍が網羅せられ、研究に非常な便宜を得た。國家的には明治二十七八年戰役があつて、一大發展があつたことであるから、この頃を境としてもよいと思ふ。

さて第五期とそれ以前とを比較してみると非常な相違がある。むしろ第二、三、四期を合して第二期とし、第五期を第三期として、三期に大別してもよいことは、前講の序說にも述べたところである。今この第五期について大觀するならば、それ以前に比して研究の範圍と材料とが著しくひろくなつたことが注意せられる。從來の研究は歌學の必要に應じて起り、國學の手段として行はれたといふ狀態で、和歌を中心とし、平安朝時代以前の言語を中心としたのであつたが、現在は平安朝以後の言語、現代語も方言も研究の對象となつて、そこに何等尊卑の差別がおかれてゐないのである。更にアイヌ語、朝鮮語、琉球語等にも目がむけられるやうになつた。

次には從來はやゝもすれば國學的偏見にわづらはされて、獨斷的沒理的な研究が行はれたが、現在はそれがなくなつて、發達した多くの補助學科の力をかりて、科學的研究が行はれるやうになつた。科學的研究は、歷史的、比較的、歸納的の研究の上に立つものである。

かうして國語の各方面にわたつて盛な研究が行はれてゐるのであるが、その實際について述べることの出來ないのは遺憾である。明治以後の實際は、

日本文法史（明治四十年十月版）　福井久藏著
日本語學史（明治四十一年十二月版）　長連恒著
國語學精義（明治四十三年五月版）　保科孝一著
語學關係刊行書目（明治元年ヨリ大正十五年ニ至ル（國語と國文學昭和二年五月號））　時枝誠記編
國語學附言語學參考論文目錄（特に自明治十年至昭和二年邦文雜誌に現はれたるもの（國語と國文學昭和三年五月號））　田村榮太郎編

等によつて御覽を願ひたい。

——終——

19146

昭和八年三月十日印刷
昭和八年三月十五日發行

定價八十錢

續國文學講座

國語學史概說

編輯兼發行者　文獻書院內　國文學講座刊行會
右代表者　武藤欽

印刷者　國文學講座刊行會

發行所　京都市下京區下長者町油小路西入　文獻書院　振替大阪六三〇九二番

發賣所　大阪市西區阿波堀通四丁目　大阪寶文館　振替大阪四三番

(八〇・一)

人工4L
-56

國文學講座刊行會發行

新村京大教授 言語學概說 壹圓五拾錢

吉澤京大教授 國語學史概說 八拾錢

吉澤京大教授 王朝文學概說 壹圓

江馬文學士 續有職故實 壹圓

阪倉三高教授 古事記選釋 八拾錢

島田三高教授 枕草紙選釋 壹圓

宮田大阪高校教授 日記文選釋 壹圓五拾錢

荒瀨京都府立女專教授 鏡類選釋 壹圓貳拾錢

清水立命館大學教授 戰記物選釋 七拾錢

田中京都女專教授 問題解說 七拾錢

井手桜山高校教授 上古歌謠

澤瀉京大助教授 上代文學概說 全壹冊 壹圓貳拾錢

島田三高教授著 國文學名作梗概

澤瀉京大助教授 萬葉集選釋

尾上東京女高師教授 古今和歌集選釋

佐成女子學習院教授 新古今和歌集講義

岩城奈良女高師教授 源氏物語講義

全壹冊 壹圓五拾錢

發賣所
寶文館
東京市日本橋區室町四 振替東京二八〇番
大阪市西區阿波堀通四 振替大阪四三番

終